

IF-G-66

花房吉太郎
山本源太郎
編輯

日本博士全傳

全

東京博文館藏版



1948



377.5 H169 n

百有九



自序

理想上ノ空論如何ニ巧妙ナルモ歴史的ノ事物切實人ヲ感動シ
易キニ若カサルナリ是故ニ仁人義士ノ言行ハ道義ノ化育ヲ扶
植シ學者先生ノ云爲ハ文運ノ消長ト相關ス譬ヘハ宇宙間ノ萬
物ハ太陽ノ光熱ヲ受ケテ發生スルカ如ク文運ノ開進ハ學者先
生ノ云爲ニ是レ由ラスンハアラズ學者先生ノ責任タル亦タ大
ナラスヤ

維新茲ニ二十有五年文教秩然トシテ隆興シ大家彬々トシテ輩
出シ將サニ大ニ國光ヲ發揚スルモノアラントス此時ニ當リ政
府ハ新タニ學問上ノ功績ニ因リ醇ヲ拔キ精ヲ擧ケ授クルニ博
士ノ學稱ヲ以テス誰レカ又タ今日ノ博士タルモノハ眞ニ我が

自序

學界ノ大家先生ナラサルヲ疑フモノアラシヤ
惟フニ傳記ノ教育上ニ必要ナルハ天下後進ノ志氣ヲ鼓舞獎勵
シ發憤興起功ヲ成シ名ヲ遂ケシメントスルニ在リ本書固ト青
年諸子ノ爲メニ作ルモノ編者私カニ謂ヘラク同シク傳記ナリ
ト云フト雖モ政治家實業家等ノ傳記ハ寧ロ青年諸子ニ用ナシ
音ニ用ナキノミナラス動モスレハ彼ノ人子ヲ誤ラサルモノナ
シトセンヤ況ンヤ單ニ其成人以後ノ功績ヲ記述スルモノニ於
テチヤ若シ夫レ學者先生ノ傳記特ニ其青年タリ子弟タリ時
ノ行動ヲ記述スルモノアラハ其青年諸子ニ益スルモノ果シテ
幾許ナラン蓋シ青年諸子ハ修學勉業ノ時期ニ在ルモノナリ如
何ナル大政治家モ如何ナル大實業家モ將タ如何ナル大學者モ

必スヤ一タヒ此時期ヲ經過セサルヘカラス而シテ其能ク大家
タルト否トハ概子此時期ノ勤勉如何ニ因ルモノ、如シ誰レカ
風霜ニ堪ヘスシテ梅花ノ芬芳アリト謂フヤ天地豈ニ根蒂ナク
シテ花實アルノ理アラシヤ本書ノ編著其意實ニ此ニ在リ而シ
テ本書記述スル所ノ學者先生ノ云爲ニシテ聊カ以テ青年諸子
ニ益シ文運ノ開進ニ瑣少ノ裨補ダニ之レ有ラハ亦タ唯編者ノ
幸ノミナランヤ

明治二十五年八月

編輯者 識

例言

一本書編輯ノ序次ハ先ツ學歷官歴其他重モナル事實ヲ綜合シ次テ博士諸君ノ新知舊識其最モ親善ナル所ノ人ニ就キ其成育性行ノ如何ヲ聞キ爰ニ一ノ模稿ヲ草シテ博士諸君ノ補正ヲ乞ヘリ然レモ固ト是レ多數ニシテ此例ニ依リ難キモノハ博士諸君自ラノ直話ヲ採リ或ハ確實ナル材料ニ參考セリ

一博士諸君ノ經歷中其學術經驗ニ成リ學者先生ヲ價スヘキモノ即チ發明、事業、著述等確實顯著ナルモノハ悉ク之レヲ網羅スルコトヲ努ム其瑣末ナルモノニ至テハ之レヲ記載セス
以上ノ方針ニテ本書ノ編輯ニ從事セシト雖モ種々ノ支障アリテ事書一ニ出ツルコト能ハスシテ簡畧ニ失スルモノ多キハ編者ノ遺憾トスル所ナリ將タ之レヲ出版スルニ當リ萩原善太郎氏ノ編著ニ係ル第一回第二回ニ於ケル帝國博士列傳ヲ増訂シテ合帙ト

ナス是レ博文館主人大橋氏ノ依頼ニ依リテナリ即チ題シテ日本
 博士小傳ト名ツケタルニ後故アリテ全傳ト改稱スルヲトハナレ
 リ讀者其レ之レヲ諒セラレヨ

二

日本博士全傳目次

文學博士 加藤弘之君	一
文學博士 重野安繹君	四
文學博士 島田重禮君	六
文學博士 小中村清矩君	九
文學博士 外山正一君	十二
文學博士 末松謙澄君	十四
文學博士 中村正直君	十八
文學博士 川田剛君	二十
文學博士 黒川眞頼君	二十四
文學博士 南條文雄君	二十六
文學博士 井上哲次郎君	二十八
文學博士 坪井九馬三君	三十七

文學博士 元良勇次郎君	三十九丁
文學博士 星野 恒君	四十二丁
法學博士 箕作麟祥君	四十五丁
法學博士 鳩山和夫君	四十七丁
法學博士 穗積陳重君	五十丁
法學博士 田尻稻次郎君	五十三丁
法學博士 菊池武夫君	五十五丁
法學博士 岡村輝彦君	五十八丁
法學博士 木下廣次君	六十一丁
法學博士 富井政章君	六十三丁
法學博士 井上正一君	六十六丁
法學博士 熊野敏三君	六十七丁
法學博士 宮崎道三郎君	七十丁
法學博士 增島六一郎君	七十二丁

法學博士 末岡精一君	七十四丁
法學博士 穗積八束君	七十六丁
法學博士 梅 謙次郎君	七十八丁
法學博士 土方 寧君	八十一丁
法學博士 和田垣謙三君	八十四丁
法學博士 金井 延君	八十七丁
醫學博士 高木兼寬君	九十一丁
醫學博士 大澤謙二君	九十八丁
醫學博士 三宅 秀君	百 丁
醫學博士 池田謙齋君	百三丁
醫學博士 橋本綱常君	百五丁
醫學博士 佐藤 進君	百九丁
醫學博士 田口和美君	百十二丁
醫學博士 小金井良精君	百十八丁

醫學博士 佐々木政吉君	百二十丁
醫學博士 緒方正規君	百二十三丁
醫學博士 實吉安純君	百二十六丁
醫學博士 櫻村清徳君	百三十一丁
醫學博士 宇野 朗君	百四十丁
醫學博士 大森治豊君	百四十一丁
醫學博士 谷口 謙君	百四十二丁
醫學博士 濱田玄達君	百四十五丁
醫學博士 高橋順太郎君	百四十九丁
醫學博士 北里柴三郎君	百五十丁
醫學博士 片山國嘉君	百五十四丁
醫學博士 三浦守治君	百五十七丁
醫學博士 中濱東一郎君	百五十九丁
醫學博士 佐藤三吉君	百六十三丁

醫學博士 榑 倣君	百六十七丁
醫學博士 隈川宗雄君	百七十丁
醫學博士 青山胤通君	百七十二丁
醫學博士 河本重次郎君	百七十四丁
醫學博士 大谷周庵君	百七十九丁
醫學博士 森 林太郎君	百八十二丁
醫學博士 村田謙太郎君	百八十五丁
醫學博士 菊池常三郎君	百八十七丁
醫學博士 猪子吉人君	百九十一丁
醫學博士 弘田 長君	百九十三丁
醫學博士 伊藤圭介君	百九十五丁
醫學博士 山川健次郎君	百九十八丁
醫學博士 菊池大麓君	二百丁
醫學博士 矢田部良吉君	二百三丁

理學博士 長井長義君	二百六丁
理學博士 寺尾 齋君	二百八丁
理學博士 松井直吉君	二百十二丁
理學博士 櫻井錠二君	二百十四丁
理學博士 小藤文次郎君	二百十六丁
理學博士 箕作佳吉君	二百十八丁
理學博士 久原躬弦君	二百二十一丁
理學博士 佐々木忠二郎君	二百二十三丁
理學博士 巨知部忠承君	二百二十六丁
理學博士 北尾次郎君	二百二十九丁
理學博士 關谷清景君	二百三十二丁
理學博士 村岡範爲馳君	二百三十六丁
理學博士 松村任三君	二百四十丁
理學博士 横山又二郎君	二百四十二丁

理學博士 吉田彦六郎君	二百四十五丁
理學博士 齋田功太郎君	二百四十八丁
理學博士 石川千代松君	二百五十丁
理學博士 原田 豐吉君	二百五十三丁
理學博士 飯島 魁君	二百五十五丁
理學博士 藤澤利喜太郎君	二百五十八丁
理學博士 田中正平君	二百六十丁
理學博士 田中館愛橘君	二百六十三丁
工學博士 長谷川芳之助君	二百六十五丁
工學博士 原口 要君	二百六十七丁
工學博士 松本莊一郎君	二百六十九丁
工學博士 古市公威君	二百七十二丁
工學博士 志田林三郎君	二百七十五丁
工學博士 辰野金吾君	二百七十八丁

工學博士 谷口直貞君	二百八十一丁
工學博士 巖谷立太郎君	二百八十三丁
工學博士 高松豐吉君	二百八十六丁
工學博士 平井晴二郎君	二百八十九丁
工學博士 山田要吉君	二百九十丁
工學博士 増田禮作君	二百九十四丁
工學博士 石橋綱彦君	二百九十七丁
工學博士 片山東熊君	三百五丁
工學博士 沖野忠雄君	三百八丁
工學博士 南部球吾君	三百十丁
工學博士 南 清君	三百十二丁
工學博士 石黒五十二君	三百十四丁
工學博士 高山甚太郎君	三百二十丁
工學博士 清水 濟君	三百二十一丁

工學博士 藤岡市助君	三百二十四丁
工學博士 仙石 資君	三百三十一丁
工學博士 三好晋六郎君	三百三十二丁
工學博士 渡邊 渡君	三百三十五丁
工學博士 白石直治君	三百三十九丁
工學博士 中澤岩太君	三百四十二丁
工學博士 山口半六君	三百四十五丁
工學博士 野呂景義君	三百四十八丁
工學博士 大島道太郎君	三百五十丁
工學博士 田邊朔郎君	三百五十四丁
工學博士 眞野文二君	三百六十丁

日本博士全傳目次終

日本博士全傳

花房吉太郎
山本源太 編輯

文學博士加藤弘之君

君ノ八世ノ祖久之但馬出石藩主仙石侯ニ仕ヘテヨリ累代家祿二百二十石ヲ食ミ父ノ四郎兵衛正照ニ至テ用人役ヲ勤メ頗ル名聲アリ君嘉永五年父ニ從ツテ始メテ江戸ニ來リ佐久間象山ノ門ニ入りテ兵學ヲ講シ後チ大木忠益ニ就キテ蘭學ヲ學ビ後又獨佛英學ヲ修ム

此ノ時ニ當ツテ尙武ノ餘習未ダ衰ヘズ偶々書ヲ讀ミ文ヲ習フモノアレバ人以テ痴トナスニ至ル故ニ洋學ノ如キモノハ之ヲ蛇蝎視シ甚シキニ至テハ其之ヲ學ブ者ヲ以テ直ニ賣國ノ臣ナリ浮薄ノ徒ナリトシテ往々之ヲ路ニ要シ或ハ其居ニ就テ暗殺スルガ如キ比々皆然ラザルハナシ其幸ニシテ虎口ヲ免レ以テ今日アルニ至レル者ハ實ニ忍耐ト先見ト確乎不拔ノ氣慨トハ致ス所ナリト云ハサルヘカ

君初ノ名ハ弘藏後チ弘之ト改ム天保七年六月廿三日ヲ以テ但馬國出石ニ生ル幼
ヨリ、顯敏一ヲ聞テ十ヲ知ル長ズルニ及ンデ益々名聲アリ萬延元年幕府ニ聘セラ
レテ開成所雇教員トナリ元治元年更ニ全所教官トナル明治元年目付役ヨリ大目
付役ニ累遷シ又勘定奉行ヲ兼ヌ當時洋學者ヲ以テ君ト並ビ稱セラル、者ハ神田
孝平、箕作秋坪、中村敬介等ニシテ之ヲ四傑ト稱セリ、
後チ入テ職ヲ文部ニ奉ズルニ及ンデ益々力ヲ文教ニ盡シ亦國典制定ニ贊與シテ
大功アリ明治ノ二年ニ當ツテ既ニ大學大丞トナリテ從五位ニ叙セラレ忽チニシ
テ待讀ニ舉ゲラレ全七年ニハ一等議官ニ兼任シ累進シテ大學總理トナリテ專ラ
人材陶冶ト大學ノ増進トニ志ヲ傾ケ日ナラズシテ人材彬々トシテ輩出シ八年ニ
ハ既ニ第一回ノ卒業生ヲ海外ニ派遣スルニ至ル之ト同時ニ大學ノ規律モ漸次整
頓ヲ告グルニ至リ以テ今日帝國大學タルノ基礎將ニ此時ニ成ルト云ツベキナリ
功ヲ以テ正五位ニ進ミ亦勳三等ニ叙セラレ旭日中綬章ヲ賜フ十七年十一月從四
位ニ進ミ尋テ元老院議官ニ任ゼラレ更ニ從三位ニ進ミ廿一年五月ニ文學博士ノ

學位ヲ授ケラレ四月又勳二等ニ叙セラレ後又帝國大學總長ニ任シ二十三年帝國
議會ノ開設アルヤ貴族院議員ニ敕選セラレ
始メ君ノ宮内出仕ニ補セラレテ待講ノ任ニアルヤ或人俄ニ民撰議院ヲ撰定スベ
キヲ建議セリ是ニ於テカ論者二派ニ分レテ甲ハ以テ之ヲ可トシ乙ハ以テ之ヲ
不可トシ朝野騷然タリ君乃チ尙早論ヲ唱ヘテ之ヲ辨駁セシカバ忽チ輿論二途ニ
分レテ遂ニ漸急ノ兩旗ヲ見ルニ至レリ其著ス所ノ書ハ隣草交易問答、西洋各國盛
衰強弱一覽表、政体畧、眞政大意、國体新論、國法汎論、立憲政体起立史等アリテ皆大ニ
世ニ行ハル又近ゴロ天則テフ一雜誌ヲ發行セラル議論正確、叙事流暢、時弊ヲ矯正
スルニ足ル一大指針アリ文學社會ノ評論定義ヲ下ス好論法アリ其他政事ニ農ニ
商ニ工ニ苟モ社會上ノ現象ハ悉ク擧テ之ヲ網羅シ以テ天下ノ正理原則ヲ公示シ
侃々諤々毫モ假借スルトコロナク眞ニ天則ノ名ニ背カズト謂フベシ
君天資絶倫ノ才ヲ以テ博ク和漢英獨佛蘭ノ六學ニ通シテ修メザル者ナキハ汎ク
人ノ知ル所ナリ宜ナリ藝ニ陛下ノ侍講ニ舉ゲラレ又久シク東京大學總理ノ職ニ
居レリ其學生ヲ訓陶スル秩序肅然トシテ亂レズ後チ議官ニ轉任セラル、ニ當リ

宛、モ、赤、子、ノ、父、母、ニ、於、ケ、ル、ガ、如、ク、滿、校、學、テ、之、ヲ、惜、ミ、遂、ニ、再、ヒ、君、ヲ、戴、ク、ニ、至、リ、タ、リ、ト、亦、以、テ、其、ノ、愷、悌、ノ、君、子、タ、ル、ヲ、知、ル、ベ、キ、ナ、リ、

文學博士重野安繹君

君字ハ士德成齋ト號ス舊鹿兒島藩士ナリ文政十年十月六日ヲ以テ鹿島城下ニ生
ル天資銳敏才藝アリ少ニ藩設學校ニ入りテ和漢學ヲ修メ年較長ジテ江戸ニ遊
ビ尋テ昌平學ニ入ル刻苦勦勵業大ニ進ム後千舎長ニ舉ゲラレ名聲忽チ四方ニ廣
マル藩主島津侯之ヲ聞キ擢デ、邸學ヲ督セシム君命ヲ受ケテ大ニ盡ス所アリ既
ニシテ之ヲ構スル者アリ遽カニ事ニ坐シテ薩ノ南島ニ流竄セラル是レヨリ益々
力ヲ讀書ニ專ニシ業浸焉トシテ進ム後千赦ニ遇フテ歸ル會マ英艦薩藩ト俄ニ兵
端ヲ開クノ事アリ朝廷詔シテ幕府及諸藩ヲ徵シテ將ニ大ニ識スル所アラントス
島津侯上國セント欲スレドモ英艦ノ虛ニ乗ジテ來襲センコトヲ愛フ退テ國ヲ守
ランカ朝命ヲ如何ン是ニ於テ君密命ヲ受ケテ横濱ニ赴キ英國公使ニ會シテ大ニ
其理否曲直ヲ辯論シ遂ニ和ヲ講ジテ歸レリ侯因テ意ヲ上國ニ專ラニスルコトヲ

得、タ、リ、維、新、ノ、後、君、大、坂、ニ、ア、リ、テ、大、ニ、學、生、ヲ、蒸、陶、ス、四、方、笈、ヲ、負、フ、テ、來、リ、學、ブ、者、甚、
多、ク、門、下、常、ニ、滿、ツ

明治ノ四年聘ニ應ジテ文部省ニ出仕シ編輯ニ從事セシカ忽チニシテ編輯課長ニ
舉ゲラレ既ニシテ修史局副長トナリ累進シテ一等編修官トナリテ從五位ニ進ミ
又職ヲ東京大學教授ニ兼テ後又編修長トナレリ先年學位令ノ發布セラル、ヤ首
トシテ文學博士ニ舉ゲラレ尋デ正五位ニ進ミ遂ニ其功績淑聞ニ達シテ元老院議
官ニ榮進シ更ニ位階ヲ進メテ從四位ト爲ス是レヨリ先キ君ハ多年編修ヲ以テ任
トシ明治聖代ノ歴史始メテ後世ニ昭カナルノミナラス前代學者ノ未タ發見ニ係
ラザルモノヲモ爲ニ之ヲ發覺補正スルモノ寡ナカラズ且ツ我文教上其比翼ニ據
レルモノ殆ンド枚舉ニ遑マアラズ其他傳贊碑銘ニ於ケル世ノ所謂名譽的ノ文苑
ハ君ノ作案ヲ待テ始メテ其ノ價值ヲ發スルニ至ル人其碩學ヲ頌シテ之ヲ當世ノ
山陽ニ比スルモ謂レナキニ非ザルナリ
其著ハス所ノ書萬國公法和譯編年日本外史等アリテ共ニ世ニ行ハル君ノ漢學ニ
於ケル專ヲ實用主義ヲ取り主トシテ漢弊ヲ脱去セリ故ニ今日大ニ擢用セラレテ

身ハ顯官ニアリ其人ニ接スル周匝至ラザルナク雅俗並ビ至ル是レ其著ルシク漢儒中ニ卓出スル所以ナリ或人君ヲ評シテ曰ク子徳ニ七絶アリ一ハ博學ニハ文三八詩四ハ棋五ハ鼓六ハ脫弊七ハ吾レ之レヲ念レタリト以テ其才藝達セザルモノナキヲ見ルベシ

君ノ文章ハ從雅嚴整魏叔子ノ文ヲ讀ムガ如ク人ヲシテ一見君ノ文タルヲ覺ラシム又常ニ漢學ノ衰頽ニ歸セルヲ慨嘆シ屢々斯學ノ講ゼサル可ラザルヲ痛論ス主意確立聽クモノヲシテ敬服セシム

夫レ漢學ハ東洋ノ哲學ニシテ決シテ之ヲ衰退セシム可カラズ然レドモ漢學ノ往々社會ニ擯斥セラル、所以ノモノハ何ゾヤ是レ其學ノ罪ニ非ズ之ヲ學ブ者ノ罪ハミ豈亦思ハザル可ケンヤ

文學博士島田重禮君

君字ハ敬甫籠村ト號ス舊村上藩士ナリ其先美濃ノ土岐氏ヨリ出ヅ伊豆守滿貞別ニ邑ヲ駿河ノ島田ニ食ム因テ氏トス若狹守重國足利義晴ニ仕フ後故アリテ武藏

ノ大崎ニ隱レ世々名族タリ父重規ニ至テ七男二女ヲ舉グ君ハ其第八子ナリ天保九年八月十八日ヲ以テ荏原郡下大崎村ニ生ル幼ニシテ顯悟群兒ニ異ナリ嬉戯常ニ好テ筆硯ヲ弄ス四五歳ノ頃善ク字ヲ識ル父嘗テ頂ヲ撫デ、曰ク此兒後必ズ文學ヲ以テ名ヲ成サント不幸ニシテ五歳母ヲ喪ヒ七歳又父ヲ喪ヒ仲兄尋テ没ス其家ニ在ルモノハ惟伯姊ノミ

君嘗テ伯兄ノ先哲叢談ヲ讀ムヲ聞キ慨然覺ルトコロアリ儒ヲ以テ家ヲ興サント欲ス是時ニ當テ資産漸ク落チ以テ其學資ニ供スル能ハズ伯姊其志ヲ察シ継續以テ學資ヲ助グ君感奮終霄怠ルコトナシ里人指シテ痴呆トナス年十五大澤赤城ニ從テ學ビ次ニ海保漁村ニ就テ大ニ經子史學ヲ傳習シ年二十二安積良齋ニ從フ居ルコト幾クモナクシテ良齋没ス由テ家ニ歸リ苦學自ラ究ム年廿六唱平齋ニ入り意ヲ肆ニシテ博ク百家ノ書ヲ涉獵シ學大ニ進ム鹽谷岩陰深ク其才ヲ愛シ配スルニ其孫女ヲ以テス慶應元年唱平學大試ニ應ジテ甲科ニ登リ金幣ヲ賜フ同年九月拔擢セラレテ唱平學助教トナル三年十二月外國調役並チ命セラレ既ニシテ之ヲ辭ス時ニ君駿河臺ニ僑居シ赤貧洗フガ如シ然レドモ毫モ志ヲ變ゼズ村上侯之ヲ

聞キ聘シテ儒員タラシメントス君固辭シテ就カズ侯其志ヲ嘉シ待ツニ賓師ノ禮ヲ以テシ歲祿百石ヲ贈リ教職ヲ囑ス君乃チ俸ニ就ク後チ因幡ノ支封池田侯其宗藩ニ請ヒ厚祿ヲ以テ之ヲ聘ス辭シテ就カズ侯其志操ニ感ジ躬カラ來リ學ブト云フ明治ノ七年始メテ東京師範學校ノ聘ニ應ジテ教職ニアリ既ニシテ五等教諭ニ舉ゲラレ幾クモナクシテ又修史局三等協修トナレリ後チ東京大學講師ノ任ヲ受クルニ當リテ其名益々顯ハレ遂ニ大學教授ニ進ミ從六位ニ叙セラル爾來文科大學漢文科ノ教授ハ主トシテ之ガ任ニ當リ諄々トシテ倦マズ其之ガ訓陶ニ由テ一箇ノ學士ヲ出スヲ數ヲ知ラズ是ヲ以テ累進シテ正六位トナリ奏任官一等ニ陞叙セラレ文學博士ノ學位ヲ授ケラル

君是ヨリ先キ明治二年塾ヲ下谷ノ長者街ニ開キ雙桂精舎ト稱ス明年居チ練堀坊ニ移ス時ニ名聲漸ク遠近ニ聞ヘ翕然笈ヲ負フテ來リ學ブ者日々相繼ギ數月ナラズシテ學舍皆滿ッ君又資性羸然善病ニシテ勝ヘザルガ如シ然レドモ必ズ夙ニ起テ講堂ニ臨ミ沍寒炎暑ノ候ト雖モ未ダ曾テ怠ラズ其子弟ヲ律スルヤ頗ル嚴肅ニシテ毫モ假貸スル所ナシ然レドモ師弟ノ間ハ城府ヲ設ケズ相親ム一家ノ如シ又

嘗テ安井息軒芳野金陵等ト忘年ノ交ヲ爲セシコトアリ二氏亦深ク其才學ヲ稱スト云フ

君常ニ教育ヲ以テ自ラ任シ其門下薰陶ヲ受ケテ成就スル者甚ダ多シ今年君歲五十一著ス所ノ文集若干卷雜著數種未ダ梓ニ上ラズ其學博覽旁通考據ヲ主トシ幼ヨリ顧炎武ノ人トナリヲ慕フ又伯姉ヲ養フコト廿餘年尙一日ノ如シ平生他ノ嗜好ナシ只甚ダ書籍ヲ好ミ常ニ王白田ノ語ヲ誦ス故ニ窮迫ノ中ニアリト雖モ衣食ヲ節シテ書ヲ購ヒ一本ヲ得レバ隨テ讀ミ遂ニ堆積萬卷ニ及ベリト云フ嗚呼君史子百家ノ書ニ至ル究メザルモノナク就中尤モ經書ニ精通ス一世ノ碩儒ト謂ッベキナリ

文學博士小中村清矩君

君其先ハ山城石清水八幡宮司ヨリ出ツ寶永ノ頃ヒニ當テ其嗣弟某江戸ニ出デ金工ヲ以テ業トス世々相繼デ父春矩ニ至レリ君文政四年十二月ヲ以テ江戸麴町ニ生ル六歲ニシテ字ヲ識リ能ク假字草子ヲ讀メリ既ニシテ鄉塾ニ入テ漢籍ヲ學ビ

又西島蘭溪ノ講義ヲ聽ケリ廿二歳ノ時令義解公事根原等ノ書ヲ讀ミ始メテ國典
專攻ノ志ヲ起シ伊能願則ニ從ヒテ記紀以下ノ古典類ヲ研究シ安政年代本居内遠
ノ門ニ入りテ大ニ國典ヲ傳習シ業大ニ進ム文久年間和歌山藩ニ聘セラレテ藩士
ニ列ス爾來藩立古學館ノ國學教頭トナリ又幕府和學所頭取ノ囑ニヨリ同館ニテ
令義解ヲ講義セリ

後千王政復古文教浸々トシテ興起スルニ及ンテ直ニ舉ゲラレテ邦制取調ヲ囑セ
ラレ續テ語箋編輯ニ從事シ專ラ國典ノ欠點ヲ補フテ功アリ後千神祇省ニ登庸セ
ラレ既ニシテ内務ニ移リ又文部ニ入ル此時ニ當ツテ大學ノ規律漸ク整ヒ我古代
法制ノ如キモ將ニ良師ヲ聘シテ之ヲ學徒ニ授ケントセリ於是君乃千之カ教授ニ
舉ケラレ主トシテ古今法制上ノ講授ヲ擔當シ我邦制古法爰ニ至テ始メテ大ニ發
達スルノ端緒ヲ開ケリ

其當時之カ教授ノ科目ヲ摘載スレハ初年級ニ於テハ制度通ニ原ヅキテ本邦古今
法律ノ沿革概要ヲ講シ其第二、三年級ニ至テハ大賢令、貞永式目、徳川百箇條等ヲ授
ケ第四年即最終ニ到テ法曹至要抄ヲ講授シタリ其他學生ノ參考書ニ供シタルモ

ノハ延喜式、令義解及職原抄等ノ數種アリシト云フ

蓋シ本邦古代法律家其人ニ乏シキノミナラズ其沿革ノ如キニ至ツテハ之カ研究
ニ從事スルモ一朝一夕ノ之ヲ能クス可キニ非ズ且ツ其考據博涉以テ之カ法理因
淵ヲ探究セザル可ラザルヲ以テ尋常凡學ノ企及スベキ所ニ非サルナリ獨リ君ハ
播然之カ沿革ニ明カナルハミナラズ我古代法律大家ヲ以テ指稱セラルハ者ハ君
ヲ措テ亦他ニ其人アラザルベシ宜ナル哉正七位ヨリ從六位ニ進ミ又東京學士會
員ニ舉ゲラル先年官制ノ大改革アルヤ法科大學教授トナリ奏任官三等ニ叙セラ
レ累進シテ奏任官二等ニ陞叙セラル尋テ文學博士ノ學位ヲ授ケラル是ヨリ先キ
君ハ本邦古今法制教科書編纂委員トナリ曾テ制度取調局ニ兼務スルアリ續テ中
學校用和文教科書編纂委員トナリ又古事類范編纂委員長タルノ榮ヲ得タリ一昨
年來官大ニ帝國制度取調ニ着手セラル、君亦之カ委員ニ舉ケラル以テ其邦制大
家タルヲ見ルベキナリ又爰ニ曾テ撰述シタル歌舞音樂畧史二卷ヲ印行シテ之ヲ
世ニ公ニセリ

君ハ獨リ本邦法律沿革上ニ明カナルノミナラズ又最モ古典ニ通曉セリ故ニ其宿

志ハ少壯ヨリ數十年來研究シ來リタル法律歴史上ノ著述ニアルモ公務繁劇ニ因リ未タ其志ヲ果サズト云フ今年君齡六十九日々大學宮内文部ノ三衙ニ出勤シ疾病事故アルニ非ンバ未ダ曾テ欠勤セズ老テ益々壯ナリ豈人生ノ一大快事ナラズヤ

日本法律家タラント欲スルモノハ須ラク先ヅ邦令律典ノ沿革ヲ考究シ然ル後泰西各國ノ法律ヲ對照セバ其實務ニ適スベキヤ蓋シ疑ヲ容レザルナリ彼ノ徒ラニ歐米ノ法律ニノミ狂奔シテ法令ノ沿革ハ恬トシテ之ヲ顧ミザルガ如キ者ハ何ノ國益ヲナサンヤ猶木ニ縁テ魚ヲ求ムルト一般ナリ

文學博士外山正一君

君ハ舊幕士ナリ嘉永元年九月二十七日ヲ以テ江戸小石川柳町ニ生ル幼ヨリ穎悟學ヲ好ミ嶄然群兒ト異ナレリ其父母モ亦心ヲ盡シテ之ヲ教訓ス長ズルニ及ンデ益々學ニ志シ手ニ卷ヲ捐テズ十二歳ノ頃ヒ始テ番書調所ニ入りテ英學ヲ講ジ文久三年既ニ開成所教授方ニ舉ケラレ慶應元年舊幕ノ命ヲ以テ英國ニ留學シ倫敦

大學豫備校ニ入りテ普通學ヲ修ム明治三年十月更ニ辨務書記ニ任ジテ米國ニ派遣セラル尋デ外務權大録ニ任セラル此時ニ當テ君官職ノ任ヲ負ヒ專ラ學業ニ一身ヲ委マルコト能ハザルヲ以テ上書シテ職ヲ辭ス時ニ五年二月ナリ爾來米國ミシガン州アン、ア、ポール高等中學ニ入りテ凡ソ一ケ年半普通學ヲ修メ翌年九月ミシガン大學ニ入學シテ凡ソ三ケ年間哲學理學ヲ學ビ九年五月業成リ全校ヨリ文學士ノ稱號ヲ受ケテ歸朝シタリ是レ實ニ本邦人海外ニ留學ヲ命セラレタル者ノ嚆矢トス

明治ノ九年既ニ開成學校五等教授ニ舉ゲラレ爾來專ラ力ヲ教職ニ盡シ且ツ誠意學校ノ増進ヲ圖リテ怠ラザリシカバ規律立トコロニ整頓シ其翌年ニハ校名ヲ改稱シテ大學ト稱シ剩サハ法、理、文ノ三科ヲ設ケテ大ニ其面目ヲ一新スルニ至リ君亦累進シテ大學教授兼文學部長ニ進ミ又帝國大學評議官トナリ東京學士會員ニ舉ゲラレ位階ハ正六位ヨリ從五位ニ進ミ尋テ文學博士トナレリ又其翻譯書著述ノ文章等若干アリテ大ニ世ニ傳播セリ

始メ君ノ洋行スルヤ泰西ノ事情未ダ明カナラズ加フルニ往々奇怪ノ流言アリ故

二人々狐疑兩端ヲ持スルノ秋ナリ然ルニ斷然桑梓ヲ棄テ、鵬程萬里ノ波濤ヲ渡リ以テ一知己一面識ナキ異人種ニ雜リテ其學業ヲ研究セント欲セシガ如キハ蓋シ當時ノ人情爲シ難キ所ナリ獨リ君ハ確然之ヲ敢行ス以テ其少壯氣慨ヲ見ル可キナリ

君爲人沈毅寡言ニシテ議論卓越其文章ハ井然トシテ條理アリ宜ナル哉先年ミシガン大學ヨリ更ニ興フルニ文學博士ノ稱號ヲ以テス是ニ由テ之ヲ觀レバ君ノ學藝ハ遠ク海外ニ聞ヘテ遂ニ該大學ノ認ムル所トナリタルハ君ハ一大名譽ト謂ハザルベカラズ

君天敏ノ才ヲ以テ既ニ教授ノ任ニ在ルコト此ニ十餘年循々トシテ尙一日ノ如シ帝國大學ノ旺盛今日ノ如キヲ致セシ所以ノモノハ實ニ君等ノ功多キニ居ルナリ

文學博士末松謙澄君

豐前國京都郡ハ景行天皇ノ古蹟ニシテ周圍ニ山アリ山秀デ水流レテ風景絶佳ナリ其地ニ村アリ前田村ト云フ君實ニ此村ニ生ル君ノ十世ノ祖末松加賀守宇都宮

家ニ仕ヘテ家老タリ天正年間城井谷ノ城陥リ宇都宮家滅ブルニ及ビ加賀守亦戰死ス遺子是レヨリ豐前ニ流落シ遂ニ前田村ニ其住ヲ占ム

父ノ名ハ臥雲居士通稱ハ七右衛門郡務ニ從事シ堤防濞濞等ノ治蹟頗ル多ク今尙郡民其澤ヲ被ル前田村ノ隣村ヲ稗田村ト云フ有名ナル詩人村上佛山ノ住スル所ナリ君十一歳ニシテ之ニ入門シテ漢學ヲ修ム明治四年始メテ東京ニ出デ嘗テ近藤塾ニ入りテ英數ノ二學ヲ修メ既ニシテ去ル明治六年官始メテ師範學校ヲ設立シ以テ教員タルベキノ生徒ヲ募集ス君其募ニ應ジ試験ヲ經テ甲科ニ上ル在學明年ニ至リ大ニ同志ト學校ノ改革ヲ計ル校長甚ダ之ヲ悦バズ君及今ノ仙石典獄ニ退學ヲ命ズ之レヨリ學ニ定所ナク嘗テ東京外國語學校ニ學ビ傍テ新聞記者トナリ遂ニ日報社ニ入ル此時始テ伊藤參議ニ會フ後數日ヲ經テ君街頭ニ彷徨ス偶々參議馬車ニテ通過ス之ヲ見テ直ニ車ヲ駐メ載セテ共ニ其麻布ノ邸ニ歸ル閑話時ヲ移シ分ル、ニ臨ミ參議其書房ヨリギボンノ羅馬史ミルノ論理學ノ二書ヲ出シ之ニ與ヘテ謂テ曰ク此論理書ノ如キハ予レ亦容易ニ之ヲ解セズ羅馬史予ニ二部ヲ有ス依テ今共ニ之ヲ君ニ送ル君ノ成業期スベキナリト君大ニ感激スル所アリ

爾來益々學業ニ奮勵セリ
 明治八年朝鮮雲陽艦ノ砲擊事件起ルヤ政府黒田井上二公ヲ使節トシテ朝鮮ニ遣
 ハス此時君ハ伊藤參議ノ勸メニ依リ初メテ官途太政官御用掛ニ就キ使節ニ從テ
 朝鮮ニ赴キ歸朝ノ後工部權少丞ニ任ズ幾許クモナク法制官ニ兼任ス同ジク十年
 西南ノ役起ルニ及ビ君ハ東京ニ在リテ官餘日々新聞ノ記事論說ヲ擔當シ大ニ賊
 徒ノ討滅セザルベカラザルヲ論ズ其年六月命ヲ受ケテ戰地ニ赴キ陸軍省七等出
 仕ヲ兼子山縣參軍ノ幕僚ニ加ハリ軍ニ從フ同ジク十一月亂平テ歸京ス歸レバ即
 子官既ニ君ノ素志ヲ容レ將ニ君ヲシテ海外ニ遊バシメントス君雀躍直ニ現官ヲ
 辭シテ公使館書記生見習ト爲リテ倫敦ニ赴ク在勤幾許クモナクシテ再ビ官ヲ辭
 ス是ヨリ專ラ學業ニ志ヲ傾ケ遠ニケムブリツチ大學ニ入り三ヶ年ニシテ優等ノ
 卒業ヲ爲シエルエルビト、バツチエロー、オフアーツノ學位ヲ受ケ後亦マスタトニ進
 ム同ジク十九年春內命ヲ以テ歸朝ス是レヨリ先キ君ノ未ダ歸朝セザルニ官既ニ
 君ヲ文部省參事官ニ任ジ歸朝後內務省參事官ニ轉ジ尋テ縣治局長ニ昇進シ奏任
 官一等ニ叙シ從五位ニ叙セラレ又高等文官試驗委員ニ兼任シ以テ文學博士トナ

レリ而シテ二十三年帝國議會ノ開設セラル、ヤ決然官ヲ辭シ衆議院議員ニ撰舉
 セラル
 始メ君ノケンブリツチ大學ニアルニ當リ傍ラ佛獨ノ二學ヲモ研究シ其大學ニ在
 ヲテハ最モ雄辨ヲ以テ著ハル然レドモ平時甚ダ多言セズ亦豪放ナラズ其一タビ
 事ニ當レバ議論風ヲ生ジ膽大斗ハ如シ君ノ討論會ニ臨ムヤ一場活動衆皆傾聽セ
 リト云フ
 君ハ幼少ヨリ頗ル鋭敏ノ質アリシトハ疑ヲ容レス其學塾ニ在ルヤ年尤モ若クシ
 テ級尤モ高シ嘗テ人ニ謂テ曰ク予レ幼時他ノ異能ナシ唯其村童輩ト嬉遊スルニ
 當リ或ハ之ト争フガ如キアアルモ未ダ曾テ他人ノ助ケヲ仰ギシコトナク且ツ之
 ナ、父、母、ニ、訴、フ、ル、等、ノ、コ、ト、ハ、絶、ヘ、テ、爲、サ、ズ、此、一、事、ハ、常、ニ、長、老、ノ、賞、讚、ヲ、受、ケ、タ、リ、ト
 君又幼時學ヲ勉メズ八歳ニシテ初メテ習字ヲ隣郷ノ寺院ニ習フ然レドモ習字ハ
 君ノ最モ好マザル所故ヲ以テ習字堂ニ登ルコト極メテ稀ナリ其間常ニ村童ヲ誘
 ヒ、テ、林、間、原、頭、ニ、戲、遊、シ、期、セ、ズ、シ、テ、項、羽、ヲ、摸、セ、リ、是、ヲ、以、テ、筆、跡、ハ、君、ノ、最、モ、拙、キ、所
 ナリト云フ其著ハス所ノ書ハ青萍詩存、日本文章論、英譯源氏物語、谷間姬百合、支那

古文學畧史希臘古代哲學一班等之レナリ又近年一時世上ニ喧傳セシ義經再興起原書ノ如キハ實ニ君ノ筆ニ係ルト君天賦ノ才ヲ以テ中途知遇ヲ得テ奮勵シ後遂ニ英國ニ航シテ此ニ學業ノ大成ヲ告グ嗟人青雲ノ士ニ就テ其名益々顯ル人ト爲リ磊落ニシテ潔白青竹ヲ割リタルガ如シ宜ナル哉身ハ一旦登庸セラレテ要職ニ當リ又降テ民間有望ノ地位ニアリ蓋シ偶然ニ非ザルナリ

文學博士中村正直君

君ハ東京府ノ人舊幕士ナリ天保三年五月廿六日武藏國江戸ニ生ル天資穎敏幼ニシテ家庭ノ訓誨ヲ受ケ長ジテ益々學ヲ好ム齟齬ノ頃ヒ既ニ誦讀ヲ勤メ後チ井部塾ニ入り水滸傳ヲ讀ミ又桂川甫周ニ就テ蘭書ヲ學ビ齡十七ニシテ昌平塾ニ入り一齋等ノ訓導ヲ受ケテ學業大ニ進ミ遂ニ乙科ニ及第シ拔擢セラレテ儒林ニ列スルコトヲ得タリ爾來安井息軒鹽谷岩陰藤森弘庵等ノ先輩ト交通シ又巨儒佐久間象山ヲ屢々其旅亭ニ訪ヒ爲ニ往々世人ノ耳目ヲ來シ殆ンド危害ニ罹ラントセシコト數回ナリシト云フ

君幼名ヲ釧太郎ト呼ビ後チ正直ト改メ敬字ト號ス家素ト寒微僅カニ學資ヲ給セリ其昌平塾ニ在ルヤ偶マ米艦來テ互市ヲ求ム是ニ於テ攘夷鎖港ノ說海外ニ沸騰シ甲論乙駁幕議區々志士扼腕起テ洋館ヲ燒ク高杉ハ如キアリ抗論辨駁吉田武田ハ如キアリ皆不幸ニシテ或ハ鋒鏑ニ罹リ或ハ囹圄ニ斃ル就中先見佐久間象山ノ如キモ遂ニ刺殺セラル、所トナレリ君竊カニ思ヘラク方今ハ世ニ處スルモノ宜シク歐米ニ航シテ識見ヲ博シ以テ彼是折衷スルトコロナクンバアルベカラザルナリト遂ニ慶應二年ヲ以テ英京龍動ニ遊ヒ居ルコト二年大ニ得ル所アリテ歸朝セリ是ヨリ先キ君昌平塾ヲ出デ、ヨリ甲州徽典館ノ學頭ニ聘セラレテ盛ニ學徒ヲ誘導シ館内靡然トシテ其下風ヲ慕フ後再ビ擧ゲラレテ昌平塾教授トナレリ明治二年倫敦ヨリ歸朝スルニ途ンデ小石川ニ同人社ヲ開イテ大ニ學生ヲ薰陶シ家塾常ニ滿員ヲ告グ是時ニ當ツテ都南三田ニ慶應義塾アリ都北礫川ニ同人社アリテ互ニ相伯仲シ都下ハ二大塾ト稱セラレ現ニ其門下ヨリ出デ、朝野ノ要務ニ在ルモノ多シ

明治ノ八年聘ニ應ジテ始テ職ヲ東京女子師範學校攝理ニ負ヒ次テ大學教授ニ舉

ゲラル、ニ及ンデ專ヲ後進ノ士ヲ誘導訓致シ之ニ由テ成業ノ文學士ヲ出ス丁數ヲ知ラズ是ヲ以テ官位階ヲ授クルニ從五位ヲ以テシ累進シテ勅任教授トナリテ正五位ニ叙セラレ遂ニ元老院議官ニ榮轉シテ位階ハ四位ニ列リ又文學博士ノ學位ヲ授ケラル、ニ至リ后病テ没ス年漸ク古稀朝野之ヲ措メリ君文章ニ於テハ東坡ハ一瀉千里退之ハ浩洋簡嚴ナルヲ嗜ミ又廬陵歐九ハ情至浩氣ヲ愛シ亦震川ハ簡醇ヲ喜ビ亦尤モ餘姚ハ三不朽ヲ具フルヲ重シ一日三誦ヲ怠ラズ況ンヤ其學ハ博ク和漢洋ニ通ジテ修メザルモノナク其著述ノ翻譯書又ハ文章等ハ堆積山ヲ爲シ就中西國立志篇ノ如キハ洽ク世上ニ其名ヲ知ラル、ニ至レリ世ノ漢儒多クハ偏固墨守主義ニシテ苟モ之ヲ實用ニ施スコトヲ知ラズ獨リ君ハ翻然トシテ博涉主義ヲ取り遂ニ進デ之ヲ政治界ニ活用シ以テ最高ノ榮位ヲ極ムルニ至ル嗟亦偉ナル哉

文學博士川田剛君

君字ハ毅卿、斐江ト號ス父ノ名ハ資嘉字ハ士會ト稱シ母ハ瀨尾氏ナリ君天保元年六月十三日ヲ以テ備中淺口郡赤崎ニ生ル幼ニシテ父母ニ別レ伯舅瀨尾維徳ノ家ニ食ハル維徳ハ醫師ニシテ漢洋ノ學ニ通ズ君其教ヲ受ケ稍長シテ詩ヲ中村池北ニ學ビ徂徠派ノ學ヲ鳥越式部ニ受ケ朱子學ヲ鎌田宗平ニ受ケ又小野務ニ就テ國典及ビ和歌ヲ講習ス君弱冠ノ頃ヒ江戸ニ遊學シ初メ大橋訥庵ニ從テ程朱陸玉性理ノ書ヲ講習セシガ既ニシテ其大意ヲ了シ次ニ藤森天山ニ就テ文學ヲ學ビ後又古賀茶溪ニ從テ博ク諸子百家ノ書ヲ傳習ス是ヨリ先キ安井息軒、藤森天山、鹽谷宕陰、芳野金陵等ノ諸老儒一大文會ヲ設ケテ舊雨社ト稱ス君年尙少フシテ之ニ列シ最モ安井息軒ニ愛重セラハ天山没スルニ及ンデ安井息軒ニ從ヒ古學ヲ講ジ專ラ考證學ニ心ヲ傾ケリ君業成ルニ及ンデ大溝侯賓師ノ禮ヲ以テ其藩ニ聘シテ學政ヲ司ラシム始メ松山侯其儒臣山田方谷ヲシテ君ヲ招聘セシメ祿五十石ヲ給シテ上士ニ列センコトヲ約ス大溝侯之ヲ聞キ更ニ百石ヲ増給シテ上士ノ頭ニ班セシメントス君思ヘラク松山ハ生國ニシテ祖先墳墓ノ地ナリ且ツ前約ナリト遂ニ大溝ヲ辭シテ松山ニ仕

文學博士川田剛君

フ大溝侯歳禄五入口ヲ贈リテ其講義ヲ聞ケリ松山侯支封安中侯モ主侯ト相會フ
 テ講筵ニ臨ミ且江戸邸ノ學生ヲ教督セシメ亦歳禄若干石ヲ贈レリ後チ松山侯幕
 府閣老トナルニ及ンデ君ヲシテ督學トシ且ツ會計官ヲ兼子シム尋テ監察ニ遷レ
 リ君此時大勢一變ノ近キニアランコトヲ察シ候テ諫テ辭職セシム直言激烈ニシ
 テ執政輩ニ忌マレ遂ニ其策用ヲレス居ルコト一兩年果シテ王政復古シ伏水ノ敗
 ニ松山侯徳川内府ト共ニ東ニ還リ罪ヲ天朝ニ獲テ其封土ヲ沒收セラル是ニ於テ
 始メテ其直諫ヲ用イザリシヲ悔ユト云フ

此變ノ起ルヤ君ハ江戸邸ニアリ之ヲ聞キ馳セテ大坂ニ趣ク到レバ則チ大坂ハ既
 ニ落城セリ因テ藩老熊田恰ト共ニ兵士ヲ率ヒテ松山城ニ歸ル途ニシテ官兵ニ圍
 マレ藩老切腹シ遺書シテ罪ヲ官軍ニ謝シ以テ衆士ノ命ヲ助ケンコトヲ乞フ君監
 察ヲ以テ切腹ノ席ニ臨ミ且ツ遺言ノ草案ヲ修正ス既ニシテ官軍其謝罪ヲ容レテ
 圍ヲ解キ君ヲ松山城ニ護送ス此時ニ當テ松山侯ハ江戸ヲ去リ會津ヨリ函館ニ奔
 レリ君舊主ハ爲ニ哀ヲ天朝ニ乞ント欲シ形ヲ變シテ奴僕トナリ潛ニ京都ニ入り
 辨事秋月侯ニ上書シテ松山侯ハ反臣ニ非ザルヲ辨ズ又潛カニ江戸ニ往キ侯族板

倉勝彌ノ或ル寺ニ潛居セルヲ見テ之ヲ伴ヒ主従形ヲ變ジテ道者トナリ無異ニ敵
 地ヲ通過シ山陰道ヨリ松山ニ還リ之ヲ立テ板倉氏ノ封ヲ襲ハシメンコトヲ上請
 ス又人ヲ遣リ函館ヨリ前ノ松山侯ヲ迎歸リ其罪ヲ謝ス朝廷之ヲ寬典ニ處シ勝彌
 チ松山ニ封シ藩名ヲ高梁ト改ム勝彌手書シテ厚ク其功ヲ稱シ少參事ニ任ジテ秩
 録ヲ加フ君敢テ當ラズ辭シテ深川ニト居シ業ヲ學徒ニ授ク金澤鳥取兩侯世子及
 諸侯士大夫來リ學ブ者二百餘人聲名大ニ遠近ニ傳フ

明治ノ三年一月聘ニ應ジテ始テ大學少博士トナリ尋テ權大外史ニ進ミ正六位ヲ
 授ケラレ十年ニハ一等編修官ニ任ゼラレテ從五位ニ進ム十四年六月 陛下與羽
 北海道ニ幸スル之カ供奉トナリテ扈從シ後チ宮内省ニ出仕シ又大學教授ヲモ兼
 子シガ尋テ其職ヲ解カル廿一年六月文學博士トナリ又藝キニ東京學士會員ニ舉
 ゲラレテ屢々諸學術ノ要道ヲ講述シテ以テ文學社會ニ裨益ヲ與フルヲ舉テ算フ
 可カラズ且ツ常ニ王室ノ隆盛ヲ圖リテ功アリ事遂ニ叡聞ニ達シ昨年諸陵頭ニ榮
 擢セラレテ勅任官トナリ續テ位階ヲ進メテ從四位トナシ又勳六等ニ叙セラル
 其著ハス所ノ書ハ讀史閑話讀經閑話蓋管社古文偶評文海指針隨讀隨鈔客江記程

藤樹年譜外史辨誤隨變紀程楠氏考等アリ其外未ダ世ニ公ニセザルモノアリ君人ト爲リ恭謙ニシテ學識尤モ高ク其文章ハ雄健奔逸蘇東坡ノ風アリテ亦別ニ一機軸ヲ出セルモノナリ且ツ詩賦ニ精達シテ其名世ニ喧ク明治昭代ハ鴻儒ト謂ツベキナリ
滔々タル天下名利ノ爲ニ其身ヲ屈セザルモノ蓋シ幾人カ在ル嗚呼君ハ如キハ眞ニ高潔自ヲ守ル者ト謂ツ可キナリ

文學博士黑川眞賴君

朝ニ道ヲ聞テタニ死ストモ可ナリ雖股懸梁以テ學業ヲ切瑳ス豈管輕々易々ノ業ナランヤ君ハ故ノ黑川春村翁ノ一子ナリ翁ハ一世ノ國學者ニシテ博ク和漢ノ學ヲ涉獵シテ窮メザルモノナキハ既ニ人ノ知レル所ナリ君幼ヨリ秀穎發達成人ハ如シ七歳ノ時翁ニ就テ和歌ヲ詠シ十七歳ノ頃ヒ大寒一ヶ月間毎曉草野集全部ヲ僅々數刻ニ誦了セリ長ズルニ及ンデ益々強記大ニ古典ニ通曉ス
君文政十二年十一月ヲ以テ江戸ニ生ル父祖ノ業ヲ繼テ專ラ志ヲ國學ニ傾ケ洽ク

皇朝史乘ノ沿革ヲ考覈シテ大ニ得ル所アリ尤モ史學并ニ古語ニ委シク又和歌ヲ善クス又其漢學ニ於テハ經書及老莊韓非ニ精通セリ
明治ノ二年四月始メテ仕ヘテ府縣學校調查委員トナリ既ニシテ大學少助教ヨリ中助教ニ次テ權大助教ニ進ミ爾來三省一院ニ出仕シテ遂ニ農商務權少書記官トナリテ正七位ニ叙セラレ其間嘗テ文部九等出仕トナルアリ吉田神社官司トナルアリ元老院大書記生トナリ内務四等屬ヨリ三等屬トナリ後チ全省准奏任御用掛トナリ終ニ農商務ニ轉スルニ至ツテ大ニ其位置ヲ進メリ是レヨリ先キ東京學士會員ニ舉ゲラレ又内國勸業博覽會審査官トナリテ大ニ盡ス所アリ十八年十二月非職ヲ命ゼラレ尋テ御歌所寄人ニ舉ゲラレ又文學博士トナレリ昨年以來美術學校ノ教諭トナツテ大ニ學生ヲ誘導シ次テ帝國博物館學藝委員トナレリ其嘗テ内務省ニ在ルヤ史傳課長心得トナリ專ラ編修ニ意ヲ用ヒ後チ農商務ニ轉ジテ博物局史傳課長兼圖書課長トナリテ亦大ニ全力ヲ編修ニ費シ其編成ヲ告ゲタルモノヲ舉グレハ左ノ數種ノ多キニ及ベリト云フ
今其在官中編輯又ハ著述セシ書目ハ語彙國史要畧歷代天皇御謚號讀例全考證皇

位繼承篇十卷、全御系圖二卷、三種神器篇、工藝志料、穴居考、石器考、天日槍歸北時代考、蘇耶曷叱來朝考、職工類考證三卷、考古書譜增補等ニシテ、曩ニ又古事類苑編纂委員ノ任ヲ囑托セラル

君始メ家庭ノ教訓ヲ受ケ後チ專ラ獨學ノ力ニ依リテ遂ニ此ク一大學者ノ位地ヲ占ムルニ至レリ、故ニ六十年來未ダ嘗テ賈ヲ取ツテ業ヲ受ケシコトナシト云フ以テ其苦學ノ致ストコロナルヲ見ルベシ
人苟モ邦土ニ生ル亦其風土人情ヲ知ラザル可カラズ、其之ヲ知ラント欲セバ遠ク史乘ニ遡リテ之ガ淵源ヲ究メザル可カラズ、故ニ近キヲ學バズシテ遠キヲ學ビ此ヲ究メズシテ彼ヲ究メント欲スル者ハ抑亦誤レリト謂ツベシ、語ニ曰ク國境ニ入ラバ先ツ其禁ヲ問フト嗟、今ハ青年輩徒ラニ近キヲ念レテ志ヲ遠キニ馳セ以テ犯禁ハ笑ヲ招クコト勿レ

文學博士南條文雄君

君ハ福井縣ノ人ナリ、嘉永二年五月十二日福井城下ニ生ル少ヨリ慧智アリ、齠齒ノ

頃ヒ既ニ佛經大意ヲ了解ス、長ズルニ從ヒ發才衆ニ越ユ年十八般若經ヲ讀ミ始テ佛敎ノ微妙眞理ヲ盡セルヲ覺リ爾來名僧碩德ニ就キ大ニ經典ノ妙理ヲ攻究ス、明治ノ初年西敎ノ漸ク盛ニシテ佛敎ノ將ニ衰頽ニ陷ラントスルノ兆アルニ當リ君慨然トシテ思ヘラク佛敎ヲシテ千載不易ノ基ヲ立テシメント欲セバ須ク海外ニ航シテ西敎ノ蘊奧ヲ探リ又其論客名士交通シテ識見ヲ擴メ以テ他日破邪顯正ハ資ニ供スルニ非スンハ佛敎何ニ因テカ護ルヲ得ンヤト是ニ於テ決然三衣ヲ脱シテ洋服ニ易ヘ單身命ヲ擲テ桑梓ヲ辭シ萬里ノ波濤ヲ渡テ英國ニ航シ同國牛津大學ニ入學シテ梵學學士マリスマラールニ就テ刻苦奮勵殆ンド八ケ年ニシテ同校ヲ卒業シマスタ、アフ、アーツノ學位ヲ受ケ心中錦ヲ着テ歸朝ノ途ニ就ケリ君ノ歸朝スルヤ東京大學ニ大谷派敎授ニ各宗寺院ニ其他到ル處君ヲ招聘シテ其講義ヲ聞ク、今現ニ大谷派敎授ノ任ヲ帶ビテ京都ニアリ其身殆ト寸隙ナシト云フ抑モ梵學ハ泰西各國高尙ノ學トナシテ人々之ヲ修ムルヲ難トナシ其學概子十ケ年ヲ費サズンバ其業ヲ卒ル者ナシト西人尙且然リ況ンヤ君ハ素修年アルニ非ズ、颯然挾ム所ナクシテ直ニ彼國ニ航シ以テ遂ニマスタ、アフ、アーツノ學位ヲ得タ

ルハ君ノ一大名譽ト謂ハザル可カラズ是レヨリ先キ君ノ牛津大學ニ在ルヤ我經
 文ヲ英譯シテ世ニ公ニシ又ハ梵文經典ノ誤字ヲ訂シ或ハ論文ヲ著述シテ發行セ
 シカバ忽チ神學社會ニ其名ヲ知ラル、ニ至リ爾來博士學士輩ト浴ク交通シテ大
 ニ益スル所アリ此他西人ノ耳目ヲ驚カセシモノ尙一ニシテ足ラズト云フ或ル人
 君ヲ評シテ古昔ノ玄裝三藏終南大師ニ比スルモノアリ說ノ當否ハ姑ク置テ論ゼ
 ザルモ亦以テ佛學者中傑出ノ人物タルハ更ニ疑ヲ容レザル所ナリ是ヲ以テ官囊
 ニ之ニ與フルニ文學博士ノ學位ヲ以テセリ
 西教ノ據ル所ハ天ヲ主トシ佛教ノ說ク所ハ人ヲ主トス其天ヲ主トシ人ヲ主トス
 ル其到ル所ハ則チ一矣只佛教ハ說キ得テ廣漢人ヲシテ信シ易カラザラシム是レ
 佛教ノ今日將ニ心ヲ用ユベキ點ナラン歟

文學博士井上哲次郎君

君名ハ哲字ハ君廸又巽軒ト號ス哲次郎ハ其俗稱ナリ幼名船越乙三郎蓋シ乙卯ノ
 歳ニ生レシヲ以テ名ク安政二年十月廿五日筑前國太宰府ニ生ル父ハ富田俊達本

松尾氏船越氏ニ入贅シ后又富田氏ニ入贅ス醫ヲ業トス母ハ阿與志船越要之進ノ
 第三女ナリ今ヤ双親既ニ逝キ二兄アリ曰ク種次郎曰ク繁太郎繁太郎夭死シ種次
 郎后ニ井上氏ニ入贅シテ井上侃齋ト稱シ現ニ博多ニ在リテ醫ヲ業トス
 君五才母ノ喪ニ丁リ父富田氏ニ入贅スルヤ季父船越芳哉ノ鞠養スル所トナリ六
 七歳ノ時ヨリ習字讀書ヲ家庭ニ習ヒ八才ニシテ始メテ中村周平ニ就キ大學中庸
 ノ句讀ヲ受ク周平名ハ全鄧字ハ子龍徳山ト號シ村ノ宿儒ニシテ學問該博詩ヲ能
 クシ又文ヲ能クス當時賢明ノ聲アリ九才ノ頃季父歿ス因テ甘木實父ノ許ニ至リ
 佐野文同飯田俊雄香月恕經松岡又右衛門ヲ師トシ經史ヲ講讀シ傍ヲ商人某ニ就
 テ算術ヲ學ブ年十三太宰府ニ還リ再ヒ中村周平ノ塾ニ入り主トシテ史書ヲ研究
 シ時アリテ又詩ヲ作り遂ニ塾頭ト爲ル此時ニ當リ君竊ニ志ヲ立テ矢ツテ學業ヲ
 大成センコトヲ期ス偶博多ニ到リ叔父井上鐵英ノ家ニ在リテ山棚ヲ觀ル叔父井
 上氏ハ醫家ニシテ好學ノ士ナリ君ニ命シテ山棚ノ詩ヲ作ラシム君始メテ五古一
 首ヲ作ル

造化工將奪屋頭動險巖塔尖牛角秀岩穴虎口危金闕聳雲岬玉樓輝旭曠自非平治

世。游戲豈如斯。

大ニ其賞讃スル所トナル后入贅シテ其家ヲ繼ク初メ宰府ニ在リテ夙夜勤勉セリ然レモ荒村ノ裏林深ク人稀ニ風勁ク月凄ク頗ル落莫ノ地タルヲ以テ乞フテ叔父ノ許ニ來リ村上研次郎ヲ師トシテ英學ヲ修ム時ニ門生百十數人皆初學ノ徒ナリ君乃チ師ノ命ヲ受ケテ其過半ヲ教ユ又岩永修齋福井南八ニ就テ漢學ヲ修メ傍ラ大工職某ニ算術ヲ學ブ明治四年冬十月驟然笈ヲ負フテ長崎ニ至リ廣運館ニ入り主トシテ米人ボンネル、アルノルト二氏ニ就キ英學ヲ學ヒ兼テ算術地理歴史等ヲ修ム時ニ理學博士横山又二郎全巨知部忠承等同窓ニ在リテ切磋相勵ム勉學二年餘明治八年八月生徒長トナリ月俸二圓ヲ受ケ以テ自ヲ給ス同年十一月更ニ助教授ヲ命セラレ幾干モナク定期ノ試験ニ應シ英書二部ノ賞賜ヲ得下等英語學校ヲ卒業ス時ニ年十九才一ヶ月ナリ是ヨリ先キ君全校ニ學フヤボン、子ル言ヘルヲアリ曰ク子ハ希臘ノ哲學者ニ似タリト當時君哲學ノ何物タルヲ知ラサリシト雖モ己ニ哲學的嗜好アリシト云フ卒業ノ后歸國シ明治八年二月上京シテ開成學校ニ入學ス營窓數閱年篤學尤モ強記ニ富ミ竟ニ東京大學文學部ニ入りフエ子ロサク

一ハ、テリ、外山正一諸氏ニ就テ哲學及ヒ政治學ヲ修メ中村正直ニ就テ漢文ヲ學ヒ横山由清ニ國典ヲ學ブ君曾テ自勵歌ヲ作ル

君不見我邦之人太憧々。貴賤皆被癡霧封。學問當如太平洋。識見當如不二峰。泰西諸國多君子。學問日入幽微裏。只求其實不求虛。妙理發揮良有以。電線鐵路互交錯。風船雲捲空際著。戰艦護海大如厦。萬兵猛於貔虎攫。文教德華絕五洲。總是學問力之由。孜孜欲達文明域。只要我汲其源流。我國雖稱逢昭代。學問未進俗蒙昧。奔馳日々世上人。鈞名射利何煩碎。立志宜逐古人蹤。變忽忙而爲從容。學問當如太平洋。識見當如不二峰。不然仁義殆墜地。學問不講豈成器。浮辭虛飾滔々多。三千萬人皆如醉。遍施善教化。四陲。嗚呼此責其屬誰。吾徒須自任此責。各究奧義極弊衰。一統之律是大道。天地之間賢爲寶。彫蟲估嘍豈足言。須探玄深知機早。立功企德唯是宗。逐々求舉其人庸。學問當如如太平洋。識見當如不二峯。

明治十三年七月東京大學ニ於テ哲學政治學科ヲ卒業シ文學士ノ學位ヲ受ク尋テ文部省御用掛トナリ編集局ニ在リテ始メテ東洋哲學史ノ編纂ニ着手シ傍ラ專問學務局ニ兼勤ス明治十五年三月東京大學助教授ニ任シ續テ東洋哲學史ノ編纂ニ

從事シ又每週二回文學部ニ於テ東洋哲學史ヲ講ス井上圓了、三宅雄次郎、松本源太郎、棚橋一郎等ノ諸名士來聽シ大ニ聲譽ヲ博セリ此時ニ當リ君諸家名流ト徵逐シ文ハ中村敬宇、重野成齋、南摩羽峯諸氏ニ質シ詩ハ小野湖山、大沼枕山、菊地三溪數氏ニ就キ研鑽頗ルカム明治十七年二月哲學修業ノ命ヲ受ケ三年間獨乙國ニ留學ス君東京ヲ發スルニ當リ七言一首ヲ賦ス云ク

遅々惜別出都門、蓮嶽摩天落日昏。自此所期唯一事、西洋哲學欲窮源。

行ヲ送ルモノ數百人島田篁村、依田百川、南摩羽峯、小野湖山、大沼枕山、森槐南、信夫恕軒、中根香亭、元田南峯、岡本韋庵、本田種竹、有井進齋、大江敬香、吉嗣拜山、白山黃村、白川船山、小中村清矩、飯田武郷、物集高見、佐々木弘綱、大澤清臣、久米幹文、大和田建樹ノ諸氏寄スルニ皆詩歌文章ヲ以テス小野湖山ノ詩ニ云ク

吾性迂魯且老矣。君性明敏眞哲士。欽君業成聲望高。遠大之志猶未止。明朝去遊大西洋。俯視鵬程九萬里。方今西洋孰最昌。獨逸國勢昌無比。船艦礮積固不論。學校之設稱善美。君向其間勉研磨。良師良友各卓爾。未知東歸在何年。親踐實歷皆可紀。一人立名一國光。我望於君事在此。嗚呼我邦閉鎖幾百秋。當時議論今則休。所恨吾生卅年晚。不

得追君歷遍大地球。

明治十七年四月獨京伯林ニ赴キ四ヶ月間專ラ語學ヲ修メ尋テハイデルベルヒ大學ニ入り一年間クノ、フヒツセルノ哲學講義ブンゼンノ化學講義ケーゲンバウエルノ解剖講義グニースノ理財學講義クインケノ物理學講義ヲ聽キ翌年十月轉シテライプチヒ大學ニ入り半年間ヴントノ哲學講義ロイカルトノ比較解剖學講義ハンケルノ物理學講義ウキングンノ梵語講義ヲ聽キ翌年四月伯林大學ニ轉シ一年間チエラーノ哲學講義ヘルムホルツノ物理學講義ウエーベル、オルテベルヒ二氏ノ梵語講義等ヲ聽キ傍ラハルトマント相交ハリ全年萬國東洋學會會員トナリ維納府萬國東洋學會ニ出席ス又スタインナ訪ヒ大ニ東洋哲學ノ差別ヲ論シ明治二十年三月巴理ノ文科大學并ニコレージュ、ド、フランス大學ニ入りシヤ子、リホー、ブーコー諸氏ノ講義ヲ聽グコト凡ソ半歲ニシテ再ヒ伯林ニ還リ全年十月伯林東洋學校講師ニ舉ケラレ東洋ノ哲學歴史文學等ノ講義ヲ爲シ又日本語ヲ教授ス翌年一月東洋學校ニ於テ日本神道論ヲ講ス來聽者三百余人ウキルヒヨ、パスチアン、チエラー、サハウ等ノ諸教授モ亦傍聽シ講堂殆ト立錫ノ餘地ナカリシト翌

年八月伯林ヲ發シテ伯耳義ヲ經倫敦ニ遊ヒスペンサー、マクスミラー諸氏ヲ訪ヒ後瑞典ニ出テ、維納府ニ遊ヒドレスデンヲ經テ伯林ニ再歸ス全年九月日本政府ノ代理トシテ瑞典諾威兩國ニ於テ開會セル萬國東洋學會ニ參會シ演舌スルコト凡ソ三回瑞典國王ニ謁スルノ榮ヲ得明治二十三年八月東洋學校講師ヲ辭シ歸途ニ就ク衆生別ヲ惜ミテ繼踵己マス晉國政府ハ君ノ勞ニ酬フルニ特別報酬四百麻克ヲ贈レリ時ニ清客姚文棟、潘飛聲、桂林、陶榮林ノ諸氏皆送別ノ詩ヲ作ル陶榮林ノ詩ニ云ク

我行海西頭、淺澹滄溟匯。中遇岐嶷士、豪氣何磊々。嘉名井上哲、明哲傾寮案。識高不二峯。學富太平洋。君所著異軒詩中有此二語手著異軒詩、薛然發絢綵、洋々辨惑文。直挾耶蘇罪。君有那蘇序晨鐘發深省、能學思不殆。來從三神山、六合窮章亥。言至普魯士、閱時七八歲。暨書綜衆長。君通英法德俄及印度文字西士青眼待、延爲國學師。金臺重郭隗、振興東方學。鞭策化鷲駘、三年擁皋比。分陰戒豫怠、忽起尊鱗思。鎮日手承頰、浩然賦歸去。夢伸尺八股、取道大西洋。掉頭俯仰顧、博遊米利堅。涉遠忘履屨、瀕行就予別。高論喝成彩、珍重惜臨歧。坐久不知暖、爰止而觴之。菽菽惟笱筴、兼味咄嗟難。魚肉嫌敗飯、捧觴爲公壽。此意慙鄙猥、我有

心腹言、芻蕘供招采。方今五大州、威力爲主宰。歐米競機詐、交鄰肆欺欺。給樓船碧波橫、巨刃白羽隴。一發衝車礮、丸彈如散礮。小者破天飛、大者萬鈞礮。轟城傾土牆、俘卒搏他備。有江失深險、有山失歸嶺。剽悍鬼神驚、當之輒沮醜。兵力強如彼、而又孰貨賄。環海拓市捕、放利求三倍。賈胡接踵來、兇欲騰髮鬣。雄傑作虬將、公狡甚慕容。處獨我亞細亞、積弱形腰腰。有如無枝木、拳曲露魁癩。又如久病人、切膚起難癩。民風敦古處、夷腥君將流。制器懲奇淫、長物餘木櫛。卽我何所持、公矛並盜鎗。數爲他族侵、頻披忍辱鎗。劫運未易回、噬臍祇追悔。中華兼日本、奇花初破蕾。同文證聲教、同心寒蘭茝。渙汗風雷行、戈矛鍛厲乃。掃除谿谷煙、芟刈郊原藿。庶幾銷寇萌、迭奏將軍愷。同舍舊而謀新原田歌每々、母爲同室鬪。舊盟不可改、唇亡則齒寒。深痛言猶在、使君才不世。志節標魂々、苟出而圖君。智珠驗白珮、此行爲蒼生。料匪卜爽塏、東歸觀丹陛。鹽梅調鼎鼎、無念賤子言。星月照天璫。君乃子伯林、發シ瑞典ヲ經テ伊太利ニ入りミラノ、ウエ子チア、ボロニア、フヒレソツエノ諸府ヲ歴遊シテ羅馬府ニ入り古跡ヲ回覽シ尋テナポリ府ニ入りウス、グヒオ山ニ登リ熾火口ヲ見此ヨリピザ、トリノヲ歴遊シテゼエノア府ニ至リ九月歸途ニ就ク船中五古一首ヲ賦シテ懷ヲ述ブ云ク

立志游西域學欲溯源泉。淹留經七載。探窮玄又玄。校舍逢碩學。僻村訪隱賢。語兼十國學。書讀幾萬編。東歸欲矯弊。抗慨志自堅。天外臨山嶽。長風吹上船。何圖百感集。蓬窓或廢眠。往事總如夢。前途亦似煙。離合雖難避。可堪此變遷。才人異邦友。今也杳何邊。東瀛多知己。惜哉少瓦全。壯圖何時遂。漢々故山天。半生如流水。忽過卅五年。萍蓬想異日。又應矢離弦。一瞬是我命。敢欲爲國捐。此事不干人。何必求賓緣。捨家游跡遍。如土賤金錢。傲然王說侯。東洋當合連。我國尙孱弱。巨力要幹旋。所期與西域。駢進競後先。

十月十三日ヲ以テ濱濱ニ着ス詩アリ云ク

蓬窓先見舊時容。氣象崢嶸志士胸。絳線染波昇旭日。半天映出玉芙蓉。

即日文科大學教授ニ任シ奏任官四等ニ叙セラレ明治廿四年文學博士ノ稱號ヲ受ク又學習院囑托教授ヲ兼ヌ著ハス所哲學字彙内地雜居論勅語衍義異軒詩鈔世ニ行ハル就中内地雜居論ハ普國在留中豪膽ナル大隈伯條約改正案ノ非ナルヲ慷慨シ遠ク稿ヲ井上圓了ニ托シテ出版シタルモノナリト當時反對論者ヲ助ケテ大ニ力アリシコトハ夙ニ人ノ知ル所ナリ君博覽強記ニシテ書トシテ窺ハサルナク理トシテ窮メサルモノナシ君ノ五古一

首、中語、兼、十、國、學、書、讀、幾、萬、篇、ト、之、レ、素、ヨリ、篤、學、ノ、全、豹、ナ、ラ、ン、乎、而、シ、テ、東、歸、欲、矯、弊、抗、慨、志、自、堅、ト、抱、負、遠、大、欣、慕、セ、サ、ラ、ン、ト、欲、ス、ル、モ、能、ハ、サ、ル、ナ、リ、人、ト、爲、リ、寬、厚、ニ、シ、テ、接、見、圭、角、ヲ、見、ス、性、又、勤、勉、ニ、シ、テ、常、ニ、身、ヲ、群、籍、堆、裡、ニ、置、キ、未、タ、曾、テ、分、陰、忽、カ、セ、ニ、セ、ス、夙、ニ、一、世、ニ、傑、出、ス、ル、モ、ノ、實、ニ、謂、ナ、キ、ニ、ア、ラ、サ、ル、ナ、リ

文學博士坪井九馬三君

君ハ東京府ノ人幼名久米吉ト稱ス其父與作美濃國池田郡脛永村ノ農ニシテ母ハ攝津國西成郡九條村ノ人ナリ安政五年十一月攝津九條村ニ於テ生ル明治五年二月大坂開成學校ニ入り兼子テ造幣寮立日進學舎ニ於テ普通學ヲ修ム幾干モナク全校ノ閉鎖ニ逢ヒ則チ日進學舎ニ入り業ヲ修ム翌年五月大坂開明學校ニ學ブ七年三月東京ニ來リ尋テ東京外國語學校ニ入り英學ヲ學ブ八年七月下等學科ヲ卒業ス翌年全校東京大學ト稱スルニ及ンテ全大學ニ學フコト數年十四年七月文學部ニ於テ政理財學ヲ卒業シ文學士ノ學位ヲ受ク更ニ理學專攻ニ志シ直チニ理學部ニ入り應用化學ヲ修メ十八年七月全學科ヲ卒業シ理學士ノ學位ヲ受ク

是ヨリ先キ君文學部ヲ卒業シ更ニ理學部ニ入ルヤ官特ニ其篤學厚志ヲ賞シ學費ヲ給與ス明治十六年東京大學ノ囑托ヲ受ケ傍ラ文學部ニ於テ史學ヲ教授シ又豫備門生徒入學試驗委員ヲ命セラル理學部卒業ノ后更ニ東京大學御用掛トナリ史學講義ヲ司トリ又理學部化學教場ニ勤務ス十九年東京大學ヲ帝國大學ト改稱ス尋テ文科大學講師トナリ東京大學豫備門ニ於テ理財學ヲ擔當ス又第一高等中學校ノ囑托ニ依リ全學科ノ教師ヲ兼ヌ二十年尋常師範學校全中學校高等女學教員學力試驗委員ヲ命セラル

明治二十年六月滿三ヶ年間獨乙國留學ノ命ヲ受ケテ之レニ航シ柏林フリードリッヒ、ウキルヘルム大學ニ入りテ史學ヲ專修シ二十二年十月換國內ホヘミア王國ブラグ府カルロ、フェルデナンデア大學ニ學ヒ更ニ一年間留學延期ヲ得全國ウキテナ府帝國大學ニ入り尋テスウキス共和國チューリッヒ大學ニ轉シ更ニ史學ヲ併修ス留學前後四年餘廿四年十月ヲ以テ歸朝シ直チニ文科大學教授ニ任シ正七位ニ叙セラレ史學講義ヲ擔任ス又私立專修學校ノ講師トナリ歴史學ヲ講義ス君夙ニ歴史學ヲ修メ后進ンテ海外ニ遊ヒ更ニ泰西史學ヲ攻究シテ遺ス所ナシ今

ヤ學東西ノ史ニ通シ以テ育英ノ業ニ從事ス卓說高論屢世ノ耳目ヲ聳動スル所以ナキニアラサルナリ夫レ理學ヲ修メ工學ヲ兼ヌルモノアリ文學士ニシテ法學博士タルモノアリト雖此等ハ學科ハ歸趣稍相同シキモノ敢テ驚クニ足ルモノナシ獨リ君始メ文學士トナリ后理學士トナリ今又タ文學博士ノ學位ヲ受ク強記拔群ノ才學アルモノニアラスンハ焉ソ能ク此ニ至ルヲ得ンヤ著アリ論理學講義ト云フ今玆年三十有五學ニ勉ムルノ日尙遠シ他日ノ事業當サニ目ヲ刮シテ待ツヘキナリ

文學博士元良勇二郎君

君ハ舊攝津三田藩士杉田泰ノ三男ニシテ後元良家ニ入贅ス杉田家ハ世ニ小笠原流ヲ傳ヘ家庭教育ノ嚴ナルヲ以テ同藩中ニ知ラル君安政五年十一月ヲ以テ三田ニ生ル幼ヨリ學ヲ好ミ明治二年郷里英學校ニ入學ス英學校ハ明治元年山本幸民全姓清二郎兩氏ノ創立ニ係リ洋語ヲ教ユル所ナリ當時藩中英學ニ志スモノ寥寥曉星ノ如ク士ノ校ニ在ルモノ僅ニ數人君就學后數閱月一時翕然ノ勢ヲ呈セシト

雖、凡、洋、夷、ノ、感、情、未、タ、全、ク、去、ラ、ス、從、テ、洋、學、ニ、抵、抗、ス、ル、モ、ノ、相、踵、テ、起、リ、漢、學、洋、學、兩、派、ノ、衝、突、遂、ニ、英、學、校、ヲ、廢、ス、ル、ニ、至、レ、リ、然、レ、モ、君、カ、英、學、講、修、ノ、志、望、儼、ト、シ、テ、動、ク、所、ナ、ク、攝、州、神、戶、ニ、出、テ、傳、道、師、某、ニ、就、キ、テ、益、英、學、ヲ、修、ム、八、年、新、島、襄、西、京、ニ、於、テ、同、志、社、ヲ、設、立、ス、ル、ニ、及、ヒ、直、チ、ニ、全、校、ニ、入、學、シ、業、大、ニ、進、ム、君、性、數、學、物、理、學、ヲ、好、ム、卒、業、ノ、后、東、京、ニ、出、テ、諸、大、家、ニ、接、シ、況、ク、其、說、ヲ、聞、キ、自、ラ、悟、ル、所、アリ、常、ニ、人、ニ、語、テ、曰、ク、學、問、ノ、要、的、其、得、タル、所、ヲ、應、用、シ、テ、社、會、ヲ、改、良、ス、ル、ニ、アリ、ト、君、ノ、友、人、德、富、猪、一、郎、君、云、ヘ、ラ、ク、君、ハ、余、カ、同、窓、ノ、先、進、ナ、リ、其、嘗、テ、與、ニ、同、志、社、ニ、アル、ヤ、篤、學、全、校、ニ、冠、タ、リ、君、喜、ン、テ、斯、邁、爾、斯、ノ、自、助、論、ヲ、讀、ム、而、シ、テ、讀、ム、所、ノ、モ、ノ、ヲ、以、テ、之、レ、ヲ、身、ニ、行、ヒ、殆、ト、傍、人、ノ、眼、中、ニ、於、テ、ハ、君、モ、亦、自、助、論、中、ノ、一、人、ナ、ル、カ、ト、想、ハ、シ、ム、ル、モ、ハ、ナ、キ、ニ、ア、ラ、ス、ト、以、テ、自、勵、ノ、一、班、ヲ、觀、ル、可、キ、ナ、リ

明治十六年哲學研究ノ爲メ米國ニ航シボストン大學ニ在ルコト二年哲學ノ漠然トシテ據ル所ナキヲ憂ヒ終ニ哲學中頼ム可キハ唯實驗學派ナルコトヲ感シ斷然意ヲ決シ實驗主義ヲ以テ著名ナル同國ボルチモール府シヨンスホブキンス大學ニ轉ス當時有名ナル大家スタンレーホール實驗心理學ヲ教授セシヲ以テ乃氏ノ

門ニ入りテ研究生トナリ傍ヲ社會學ヲ修ム居ルコト三年撰ハレテ同校ノフヘルロトナル后フヘルロ、バイ、コル、テ、シ、ト、ナ、リ、尋、テ、ド、ク、トル、オ、フ、フ、ヒ、ロ、ソ、フ、ヒ、ノ、學位ヲ得二十一年七月ヲ以テ歸朝ス

直チニ帝國大學囑托講師トナリ精神物理學ヲ教授ス明治二十二年帝國大學文科教授ニ任セラレ專ラ心理學ヲ教授ス二十四年八月文學博士ノ學位ヲ受ク君歸朝以來率先シテ普通教育ノ改良ヲ計リ本邦文學界ノ弊風ヲ一洗シ確乎タル事實ヲ基トシテ立論スルノ風儀ヲ匿起セン、ト、キ、助、ム、是、ヨ、リ、先、キ、東、京、英、和、學、校、教、師、ト、ナ、リ、同、校、生、徒、ヲ、薰、陶、セ、リ、二、十、二、年、外、山、正、一、神、田、乃、武、等、ト、協、力、シ、私、立、正、則、豫、備、校、ヲ、創、立、ス、依、テ、東、京、英、和、學、校、教、師、ヲ、辭、シ、大、學、教、務、ノ、傍、ヲ、專、ラ、同、校、生、徒、ノ、教、導、ニ、從、事、ス

君、倫、理、即、チ、實、理、主、義、ヲ、以、テ、自、ラ、任、シ、心、理、學、ノ、著、ア、リ、皆、獨、逸、ハ、實、驗、學、派、ニ、基、依、ス、最、モ、學、者、社、界、ハ、注、目、ス、ル、所、ナ、リ、人、ト、爲、リ、温、厚、篤、實、言、辭、正、確、ニ、シ、テ、風、丰、森、嚴、沈、思、默、考、智、ヲ、研、キ、德、ヲ、修、メ、テ、夙、夜、休、セ、ス、頗、ル、慈、愛、ニ、深、ク、並、セ、テ、果、斷、ニ、富、ム、故、ニ、其、事、ヲ、處、ス、ル、ヤ、一、舉、手、一、投、足、ト、雖、モ、敢、テ、苟、ク、モ、セ、ス、此、レ、大、ニ、世、人、ニ、尊、重、セ、ラ、ル、所

以ナリ

文學博士星野恒君

君ハ天保七年七月七日ヲ以テ生ル越後國蒲原郡白根町ノ人幼ヨリ學ヲ好ミ殆ト寐食ヲ念ル其母常ニ病ヲ生センコトヲ恐レ屢之レテ諭示ス嘗テ外ヨリ歸ル堂偶屏風ヲ圍繞シ時ニ盛暑燬クカ如シ怪ンテ之レヲ披ケハ君其中ニ端坐シテ讀書セリ是ヨリ復強テ止メサリシト

年甫メテ十四贊ヲ木村環洞ノ門ニ執リ漢籍ヲ學フ環洞氏ハ同郡曲通村眞宗梵行寺住職某ノ三男ニラテ夙ニ四方ニ遊學シ江戸ノ龜田綾瀨豐後ノ帆足萬里ニ師事ス常ニ君ヲ論スニ實學實踐ヲ以テシ且ツ實理ヲ認メ識見ヲ立テ是非ヲ辨明セシム當時讀書ノ徒誦讀之レ事トシ理義漠然トシテ定見ナキモノ比々皆然リトス君嘗テ先哲叢談ヲ讀ミ先儒ノ卓行嘉言ヲ喜ヒ自ラ期待スル所アリ心ヲ詩書論孟ニ注キ孜孜研修然レモ家貧ニシテ僮僕ナク自ラ家事ヲ執リ力ヲ讀書ニ專ラニスルヲ得ス又書籍ヲ購買スル能ハス乃慨然トシテ大儒ノ食客ト爲リ餘暇ヲ以テ研學

セント欲シ年二十一一家ヲ辭シ京坂ニ歷遊シテ遂ニ江戸ニ至ル

當時安井息軒藤森弘庵鹽谷岩陰ノ諸儒各其門ヲ張リ名聲籍甚ナリ君私カニ喜フト雖モ就學ニ由ナク事大ニ窮ス年ヲ踰エテ漸ク鹽谷氏ノ學僕トナルヲ得然レモ晝ハ勞役ニ服シ夜ハ燈火ヲ挑ケ且抄シ且讀ミ或ハ徹曉眠ラス是時境次郎小牧昌業三間正弘等鹽谷氏ノ門ニ在リテ切磋琢磨ス君其講筵ニ列シ又定日文會ニ出テ嘗テ一回ハ欠席ナク嶄然頭角ヲ顯ハシ儕輩ノ敬畏スル所トナル慶應三年岩陰易篁是ニ於テ師門ヲ辭シテ國ニ還ル君萬延元年ヨリ爰ニ至ル恰モ八閱年猶一日ノ如ク精勤怠ヲサリシト

是ヨリ先キ鹽谷氏幕府ニ召サレ儒官ト爲ル舊君山形藩主別ニ鹽谷氏ノ支房ヲ其藩中ニ立テントス岩陰乃君ヲ養フテ其嗣トセントス君雙親奉待ノ故ヲ以テ其厚義ヲ謝ス蓋シ氏ニ信重セラル、斯ノ如シ明治中興越後府立ッ君召サレテ水原學校ノ教官トナリ群生ヲ教授ス明治八年君三十七歳ニシテ上京シ大政官修史局三等協修ヲ拜命ス尋テ三等掌紀ト爲リ又一等ニ進ミ十四年四等編修官ト爲リ正七位ニ叙ス現ニ文科大学教授ニ任シ從六位ニ叙セラル

君、和、漢、ノ、學、ニ、精、通、シ、職、ヲ、大、學、ニ、奉、シ、テ、力、ヲ、育、英、ニ、盡、シ、又、意、ヲ、本、邦、史、類、ノ、考、覈、ニ、傾、瀉、シ、斯、學、會、ノ、講、演、ニ、於、テ、又、ハ、東、洋、學、藝、雜、誌、ニ、於、テ、時、々、學、說、ヲ、演、述、ス、對、論、切、實、後、進、ノ、研、學、ニ、得、ル、所、知、ル、可、キ、ナ、リ、

語ニ曰ク君子有三戒少之時血氣未定戒之在色又其壯也血氣方剛戒之有鬪及其老也血氣既衰戒之在得ト君人ト爲リ嚴正謹直誦シ來リテ毫モ寸翳ナシト此レ豈ニ躬行實踐ノ致ス所ナラザランヤ今人自ラ律スル所以チ知ルモノ甚稀ナリ人心ノ日ニ輕薄浮藻ニ流ル、モノ蓋シ之レカ爲メナリ鑑ミル所ナクシテ可ナランヤ

法學博士箕作麟祥君

維新以來著ルシク其進歩ヲ來タセシモノハ法律ニシテ曩キニ新律綱領ノ一タビ世ニ出デ、ヨリ法律ノ進歩モ着々歩ヲ進メテ遂ニ明治十三年ニ現行刑法、治罪法ノ發布ヲ見ルニ至レリ當時重ニ其編纂ノ業ヲ取レルモノハ實ニ君等與ツテ力アリ、

君通稱ハ貞太郎後子貞一郎ト改ム舊作州津山藩士ニシテ後子東京府ニ轉貫ス弘化三年六月廿九日ヲ以テ江戸ニ生ル父ヲ省吾ト謂フ夙ニ蘭學ヲ修メテ坤輿圖識等ノ著アリ此ノ時ニ當ツテ攘夷鎖港論囂々トシテ海ニ滿チ未ダ泰西ノ美ヲ語ルモノ絶テコレナカリシニ此書一タビ世ニ出デ、ヨリ世人始メテ目ヲ歐米ノ各國ニ注グニ至レリ

君天資聰明穎智幼ニシテ父ヲ失ヒ祖父箕作阮甫ノ鞠育スル所タリ阮甫ハ名醫ナリ嘗テ幕府ノ召ニ應ジテ開成所教授トナリ大ニ盡ス所アリ八絃通誌等ノ著アリ君亦少フシテ安積良齋翁ノ門ニ入りテ漢籍ヲ修メ又其父祖ノ業ヲ繼イデ蘭學ヲ修メ後子更ニ英佛二學ヲ修ム慶應二年徳川民部大輔ニ從ツテ佛國ニ赴キ大ニ感

發スル所アリ居ルヲ凡ソ二年ニシテ歸ル明治元年一等譯官ニ舉ゲラレ續イテ大學中博士ニ任ゼラル君乃チ一大私塾ヲ開イテ大ニ英佛二學ヲ教授シ吟誦ノ聲常ニ門ニ滿テリ現今其門下ノ子弟ニシテ往々登庸セラレテ要職ニアルモノ多シ明治ノ初年既ニ制度御用掛トナリ四年ニハ大學大博士トナリ尋テ從五位ニ叙セラレ幾許クモナクシテ翻譯局長ノ職ニ就ケリ此ノ時ニ當テヤ歐文法律書ノ翻譯ナルモノハ未ダ嘗テ之ナク其偶マ之アルモ多クハ臆測妄斷音ニ原語ノ意ニ反スルノミナラズ譯者自身モ又撞着シテ其然ル所以ヲ知ラザルニ至ル獨リ君ハ非常ノ勤勉ト良能トヲ以テ遂ニ彼ノ有名ナル佛蘭西六法ヲ翻譯シテ之ヲ世ニ公ニシタリシカバ人々始テ邦文ノ歐律ヲ學ブノ便ヲ得テ以來法律學ヲ研究スルモノ日々益々其數ヲ増スニ至レリ其他君ノ翻譯ニ係ル所ノモノハ獨リ佛律ニ止ラズシテ英律ノ如キモ其餘慶ヲ蒙ルモノ枚舉ニ追アラス蓋シ本邦歐律ノ翻譯者ヲ以テ鳴ルモノハ君ヲ以テ權輿トナス

全九年ニハ司法大丞タリ尋テ司法大書記官トナルニ及ンデハ翻譯、民法編纂、兩課長トナリ十三年ニハ元老院議官ニ榮進シテ從四位ニ叙セラレ功ヲ以テ勳三等旭

日中綬章ヲ賜フ爾來會社條例并ニ破産法編纂委員ノ重任ヲ負ヒ後又商法編纂委員ヲ命セラル、ニ及ンデ其身ハ殆ンド寸暇ナク晨起更寢孜々トシテ倦マズ遂ニ善ク復命ノ功ヲ奏スルニ至レリ其榮譽斯ノ如シ宜ナル哉忽チニシテ正四位ニ進ミ累進シテ從三位トナリ尋テ勳二等旭日大綬章ヲ賜ヒ廿一年五月ニ法學博士ノ學位ヲ授ケラレ十一月司法次官ニ任シ後貴族院議員ニ敕選セラレタリ

君人ト爲リ温厚篤實ニシテ能ク人ヲ容ル平素尤モ職務ニ勉勵シ其退朝平居ノトキト雖トモ未タ曾テ筆ヲ捨テシヲナク殊ニ商法、民法訴訟法等ノ編纂事業ニ付テハ始終能ク力ヲ致セリ其功績豈想ハサベケンヤ實ニ君ハ天資聰明ノ智ト稀世ノ材ト積年ノ經驗ト多年ノ勉勵トニヨリテ遂ニ大ニ前代未曾有ノ大業ヲ翼賛スルヲ得タルハ將ニ百世ノ偉業トナスベキナリ

法學博士鳩山和夫君

君ハ東京府ノ人舊眞嶋藩士ナリ安政三年四月三日江戸虎ノ門内眞島邸内ニ生ル父ノ名ハ博房文事ニ通セリ君少ヨリ奇異常ニ靜默ノ評ヲ受ク然レドモ苟モ事ニ

臨メ、バ、亦、最、モ、敏、捷、ニ、シ、テ、他、童、ノ、及、ブ、所、ニ、非、ズ、其、嬉、戯、ヲ、爲、ス、己、レ、必、ズ、之、カ、巨、魁、ダ、リ、長、ズ、ル、ニ、及、デ、大、ニ、學、業、ニ、志、シ、致、々、ト、シ、テ、倦、マ、ズ、後、チ、大、學、南、校、ニ、入、リ、テ、普、通、學、ヲ、修、メ、續、テ、開、成、學、校、ニ、轉、シ、專、ラ、法、律、學、ヲ、修、ム、時、ニ、學、術、最、モ、優、等、ニ、シ、テ、常、ニ、其、一、位、ヲ、占、メ、未、ダ、嘗、テ、他、人、ニ、席、ヲ、讓、ラ、ザ、リ、シ、ト、云、フ

明治八年七月君年十九法學修業ノ爲メ米國留學ヲ命ゼラレ十月米國新約克コロ
ンビヤ大學へ入學シ几ソー一ケ年半ニシテ同大學ヲ卒業シテ法律學士ノ學位ヲ受
ク明年六月コンチカツト州ニユーヘブン府大學校ニ於テ法律博士ノ學位ヲ
受ケ同十三年七月更ニ法律大博士ノ學位ヲ受ケテ歸朝ス時ニ年僅ニ二十四ナリ
君ノ歸朝スルヤ直ニ大學ニ聘セラレテ法學部ノ講師トナリ既ニシテ又代言人ト
ナリテ大ニ代言社會ノ面目ヲ一新シ之カ位置ヲ増進スルニ至レリ當時君ト肩ヲ
比ブルモノハ獨リ高橋一勝、星亨、增島六一郎氏等ニシテ後チ其職ヲ去ルニ及ンデ
高橋氏ハ逝去シ星氏ハ退去シ獨リ增島氏代言社會ニ古今獨歩ノ運動ヲ試ムルニ
至リ其威名赫々旭日ノ如キニ至ルニ及ンデ君亦一朝官ヲ辭シテ再ビ代言界ニ翺
翔スルニ至リタルヲ以テ宛モ代言社會ニ龍虎ノ二敵手ヲ生ジ中原ノ鹿未ダ何レ

ハ手ニ歸スルカヲ知ルベカラズ或人之ヲ評シテ龍虎ノ戰ニ擬スルモ又故ナキニ
非ザルナリ二十四年衆議院議員ト爲ル

其在職中ノ功績トナスベキモノヲ擧グレバ彼ノ外國交渉事件ニ際シテ屢々崎神
ノ間ニ往復シテ之カ調和ヲ試ミタル如キ又目下社會ノ一大問題タル條約改正
事件ノ如キハ主トシテ之カ取調ヲ擔當シ計畫スル所少ナカラズト云フ彼ノ先年
葡萄牙皇帝陛下ヨリコンマンドール、ドロール、ロアヤル、ミリチール、ボルチユゲ
ート、ドノートル、センユールゼ、ジユキリスト勳章ヲ贈與サレタルガ如キ其外交上
ニ功績アル一端ヲ窺フニ足ルベシ

始メ君ノ洋行ヲ命ゼラル、ニ當リ菊地博士、小村、齋藤ノ二學士モ亦共ニ派遣セラ
ル然レドモ二氏ハ同國大學ヲ卒業スルヤ直ニ實地ノ業ニ就キ或ハ行ヲ裝シテ歸
國ノ途ニ就クモ君獨リ心ニ慮ル所アリ遂ニ留テ大博士ノ學位ヲ得タリ其卒業授
與式ニ臨ミテ君一場ノ演說ヲナシ滿場大喝采ヲ博シタリト云フ蓋シ卒業生ニシ
テ席上演說ヲナス者ハ從來米國ニ於テ尤モ稀ナル所ニシテ其之ヲ爲ス者ハ最優
等生ニ非ズンバ決シテ之ヲ爲サズト況ンヤ君ハ外國人ニシテ此榮譽ニ與リタル

ハ、一、大、名、譽、ト、謂、ハ、ザ、ル、可、ラ、ズ、
君人ト爲リ温良ニシテ喜怒色ニ顯ハサズ人ニ接スル常ニ披ム所ロナシ宜ナリ我
大學出身ノ諸學士中其學術尤モ優等ニシテ一タビハ民間ニ奮ヒ一タビハ官海ニ
入り再ビ野ニ下リテ上下共ニ其名望ヲ博シタルヤ吾レ之ヲ推シテ明治ノ人才ト
謂ハント欲スルナリ

法學博士穗積陳重君

君ハ東京ノ人家世々舊伊豫宇和島藩ニ仕フ祖老諱ハ重磨國學ヲ以テ名ヲ擧ゲリ
始メ祖考少ニシテ粗豪其最モ親交スル所ノ友只二人アリ花時月夜未ダ嘗テ相伴
ハズンバ非ズ年甫テ廿五一日相語テ曰ク吾儕荏苒以テ今日ニ至ル未ダ一業ノ見
ル可キ者ナシ之ヲ思ヒ之ヲ想ヘバ既往ノ事皆已ニ非ナリ今ヨリ以往各其志ヲ立
テ以テ爲ス所アルベシ否ラズンバ復タ相見ルトナカラント袂飲シテ別ル於是祖
考謂ヲ本居大平翁ニ取り掃仕數年業大ニ進ム遂ニ國學ヲ以テ家ヲ興ス而シテ他
ノ二友亦各其志ヲ成ス所アリシト云フ其歿スル年六十一著ハス所ノ書若干卷ア

リ皆家ニ藏ス又嘗テ手ツカテ赤穂精義内侍所三楠實錄先代萩忠婢おさ川傳ヲ寫
シ之ヲ子孫ニ傳ヘリト以テ其人トナリヲ知ルベシ先考諱ハ重樹善ク其箕裘ヲ繼
ギ藩營ノ教授トナリテ竟ニ其家聲ヲ落サマリシト云フ

君ハ其第二子ナリ安政二年七月十一日ヲ以テ宇和島仲ノ町ニ生ル天資秀穎奇拔
一ヲ聞テ十ヲ知ル韶齒ノ頃ヒ已ニ藩設明倫館ニ入テ漢籍ヲ修メテ特進英脫全館
ノ培養生長ニ擧ゲラル此時ニ當ツテ父ハ藩命ヲ以テ江都ニ在リ專ラ慈母三遷ノ
教ヲ受ク君ノ母ハ賢女ナリ尤モ教育ニ心ヲ盡シ常ニ之ニ語ルニ楠公父子或ハ赤
穂義士等ノ忠績ヲ以テシ切々トシテ鍼戒ヲ加フ君亦心肝ニ銘シテ之ヲ記セリ時
會々王政復古車駕東征江都ヲ改テ東京ト稱ス四方秀才先ヲ爭テ群リ至ル君亦貢
進生ニ擧ゲラレ上京シテ開成學校ニ移リ專ラ法律學ヲ修ム學業銳進遠ク等輩ノ
上ニ出ツ官乃チ君ヲ援ンデ、英國ニ留學セシム九年十月キングス、コーレツヂニ
入り次テミツドル、テンブルニ移リ考古博涉學理實驗并ビ進ム遂ニバリストル、ア
ト、ローノ學位ヲ得タリ十二年四月去テ獨逸ニ向ヒ更ニ柏林大學ニ入テ大ニ法理
ヲ研究シ十四年六月ニ至テ歸朝セリ是レヨリ先キ君ノ伯林大學ニ在ルヤ偶々瑞

士國ニ於テ萬國公法會議ノ舉アリ此時君ハ我英國駐在ノ森公使ニ隨行シテ之ニ臨ミ痛ク治外法權ノ弊害ヲ演說シ滿場ハ大喝采ヲ得タリト云フ

其歸朝スルヤ大學法學部講師ノ任ヲ負ヒ既ニシテ大學教授兼法學部長ニ進ミ文部少書記官ヲ兼ヌ後チ大學教授兼教頭トナリ又大學評議官ヲ命ゼラル、ニ及ンデ請テ之ヲ辭シ專ラ教授ノ職ニ居レリ又文官試驗委員タリ其身繁職ニアルコト如此是ヲ以テ位階ハ正六位ニ進ミ官職ハ奏任官二等タリ廿一年五月法學博士ノ學位ヲ授ケラル

君ノ持論ハ主トシテ法學ノ蘊奧ヲ研究シテ其法理ノ正鵠ヲ得ルニアリ故ニ苟モ學理ニ遠ザカルモノハ捨テ、之ヲ取ラズ然レドモ彼ノ徒ラニ空理ニ流レテ反テ適用ノ道ニ戻ルノ類ニ非ザルナリ之ヲ以テ君ノ學生ヲ教授スル懇々學理ニ基テ之ヲ説キ嘗テ輕忽ニ附シ去ルコトナク其教場ニ登ルヤ滿堂肅然トシテ聲ナク皆其講義ヲ傾聽スト又曩ニ大學教頭并ニ評議官ノ任ヲ懇請シテ之ヲ辭シタルモ其意蓋シ專攻ノ目的ニ外ナラズト云フ

其入ト爲リ謙讓ニシテ人ニ接スル常ニ懇懇溫容ヲ以テス是レ其當世學者流ニ大

ニ卓出スル所以ノモノナリ夫レ志チ一藝ニ盡サント欲スル者ハ固ヨリ博涉主義ノ多能ヲ望ム可カラズ耕ノ事ハ農夫ニ若カズ器ノ事ハ工人ニ若カズ況ンヤ學業ニ於テオヤ

法學博士田尻稻次郎君

君ハ鹿兒島縣ノ人ナリ嘉永五年六月廿九日鹿兒島城下ニ生ル資性宏達沈毅少ヨリ大志アリ其群兒ト伍ス己レ常ニ之ガ旗頭タリ長ズルニ隨ヒ大ニ學ニ志シ致々トシテ倦マズ嘗テ鄉塾ニ學ブ消金ノ日沍寒ノ夜ニ至レバ健氣少ク撓ム乃チ學友ト約シテ曰ク某刻寢ニ就キ某刻起床スベシ若シ此則ニ違フ者ハ深夜早曉ヲ論セズ直ニ冷水ヲ以テ其頭上ニ注グベシト既ニシテ學友中往々違則シ冷水ヲ注ガル者アルモ君ハ未ダ曾テ之ヲ受ケシコトナシト云フ

弱冠ノ頃ヒ慨然鄉里ヲ去テ上京シ大ニ英學ヲ講習ス明治四年官君ヲ拔デ、米國ニ留學セシム此ニ於テ君躍然萬里一飛ノ思ヲ爲シ單身急裝全國ヘ航シ直ニハートホルト中學ニ入ッテ大學豫備科ヲ修ムル丁凡ソ三ケ年ニシテエイル大學ヘ入

學十二年二月全科卒業得業士ノ稱號ヲ得テ更ニ一ケ年間全校ニ於テ研究生トナリ輕濟、財政、政治、歴史ノ四科ヲ專修シ學全ク成リテ歸朝ス
君ノ歸朝スルヤ直ニ大藏少書記官ニ舉ゲラレ又學校講師ヲ兼テ專ラ理財學ヲ講授セリ後千國債局長ニ進ムニ及ンデ更ニ法科大學教授ヲ兼任シ又高等文官試驗委員トナリ尋デ法學博士ノ學位ヲ授ケラレ次デ銀行局長ヲ兼子又貴族院救選議員タリ

君平素ノ行ヒハ最モ勤儉ニシテ出勤退朝ノトキト雖ドモ未ダ嘗テ駕ヲ命ゼシコトナク常ニ徒歩シテ出デ徒歩シテ退ク其曾テ大學講師ノ任ニアル一日君ノ弊車ニ乘シテ出校スルアリ學生以テ異トナス君曰吾未マダ車ニ駕セシ時ナケレトモ今日少シク事故アリ只タ授業時間ニ遅レザランコトヲ期スルハミト然レトモ君ハ財ヲ節シテ之ヲ有用的ニ使用シ未タ一金ダモ之ヲ徒費セシコトナク其門下常ニ書生數名ヲ育養シ自ラ得ル所ノ俸給ヲ以テ之ニ當ツルニ至ル其爲人以テ知ルベシ方今出身ノ人一朝ニシテ俸給ヲ得ル即チ以テ足レリトナスノミナラズ較モスレハ其己レ曾テ學生タリシトチ念失シ書生ヲ以テ蛇蝎視スルガ如キモノ數フ

ルニ進マアテズ豈啻ニ之ノミニ止マランヤ其身ハ縱放逸樂ヲ事トシ財ヲ無用的ニ徒費シ恬トシテ之ヲ顧ミザルガ如キニ至ツテハ固ヨリ府屬取ルニ足ラザルナリ君又幾キニ大ニ我銀行上ニ付其利害得失ヲ演シタルガ如キ其碩學卓見ヲ窺フニ足ルベシ是レヨリ先キ君ノエイル大學ニ在ルニ當リ常ニ喋々辯論ヲ爲スチ好マズ其討論席ニ就クヤ未ダ嘗テ一語ヲ發セズ前後黙シテ辯論ノ要旨ヲ聞キ然ル後論點結局ノ争ニ至リ君始テ大聲一喝忽チ雄辯ヲ奮ヒ僅々數語ヲ以テシテ能ク一場ノ大問題ヲシテ釋然冰解タラシム校友以テ及ブ可カラズト爲シ皆其才能ニ驚嘆セシト云フ

我邦經濟學者ヲ屈指スレバ實ニ寥々數フルニ足ラズ其間々經濟家ヲ以テ自稱スル者アリト雖ドモ未ダ以テ眞ノ經濟家ト爲スニ足ラズ嗟獨リ君ノ如キハ堂々眞正ノ經濟學大家タルベキナリ

法學博士菊池武夫君

君ハ岩手縣ノ人舊南部藩士ナリ父ノ名ハ仙助後チ長閑ト改ム南部侯ニ仕ヘテ目

付役町奉行又用人役ヲ勤メリ君嘉永七年七月廿八日ヲ以テ陸中盛岡ニ生ル七歳ニシテ讀書ヲ始メ十一歳ノ頃藩儒江幡五郎氏ノ門ニ入ツテ漢籍ヲ修ム氏ハ慨世家ニシテ吉田松蔭日下玄瑞等ト相交レリ是レヨリ先キ藩侯學校ヲ設ケテ修文所ト稱シ大ニ闊藩ノ子弟ヲ教育セシム君因テ此ニ入學シ切磋琢磨幾クモナクシテ業大ニ進ミ保育生ニ拔擢セラル時ニ君年僅ニ十二ナリ常ニ好デ歴史ヲ讀ミ尤モ古今ノ沿革ニ目ヲ注ギ徒ラニ字句ニ拘泥セズ又詩ヲ善シ屢々其賞ヲ受ケ亦最モ江幡氏ニ愛重セラル成辰ノ役起ルニ及ンデ江幡氏ハ奥羽列藩ノ牛耳ヲ執リ其門生四方ニ遊説ス是ニ於テ文教忽チ廢然亦一人ノ學ヲ事トスルモノナシ君乃笈ヲ收メテ家ニ歸ル

此時ニ當ツテ藩中大ニ洋風練兵ヲ講ジ其子弟ヲシテ之ヲ習ハシメ別テ二隊トナス一ハ十五歳以上ノ士族子弟ヨリ成リ一ハ其以下ノ子弟ヨリ成ル世人之ヲ名ケテ豆隊小豆隊ト稱セリ君亦其小豆隊中ノ一人ナリ既ニシテ父仙助目付役トナリ始メ相馬ニ隊伍ヲ率ヒテ出張シ後チ退テ秋田ノ境ヲ固ム金澤城陥ルト聞キ將ニ隊伍ヲ整ヘテ東セントスルヤ流言アリテ曰ク秋田ノ軍勢襲撃シテ南部兵ヲ盡殺

スト君之ヲ聞キ憤然大ニ爲ス所アリトスル際事ノ誤聞ニ出タルヲ以テ止メダリト其少壯義ニ勇ミ難ヲ恐レザル概子此類ナリ

明治二年君歳十五慨然感ズル所アリ上京以テ學術ヲ修メント欲シ之ヲ父ニ請フ許サレズ後チ再ビ之ヲ請フ乃チ許サル然レドモ一錢ノ資ヲ給スルナシ君辛フジテ上京ス當時麻布南部藩邸ニアル目付役谷某之ヲ愍ミ以テ南部家英磨君ノ近侍トナス居ルコト一年未ダ身ヲ學業ニ委スルコト能ハズ遇々英磨君亦歸國ス依テ隨ヒ歸ル爾來郷里ニ在テ大ニ學業ヲ修メ後チ再ビ其兄利敬君ノ近侍トナリテ修文所ニ學ビ其翌三年遂ニ官費上京ヲ命ゼラレテ出京シ伊藤庄之助ニ就テ英學ヲ學ヒ尋デ大學南校ニ入り又開成學校ト變ズルニ及ンテ專ラ法律學ヲ修ム八年七月援擢セラレテ米國留學ヲ命ゼラレテ之ニ航シ十月ボストン府ボストン大學ニ入學シ凡ソ一ケ年半ニシテ全科卒業バチエロルオフロノ稱號ヲ受ケ爾後尙大學ニ在テ憲法議院法ヲ研究シ既ニシテ同府裁判所ニ入り重ニ訟訴實地及代言事務ヲ講習シ十三年七月米國ヲ去リ英佛ヲ經テ十月歸朝ス

爰ニ於テ直ニ司法省ニ聘セラレ又大學法學部講師ノ任ヲ負ヒ既ニシテ司法少書

記官ニ舉ゲラレテ又大ニ其才能ヲ顯ハシ遂ニ司法大臣秘書官トナリ爾來公務握
 掌ニ日月ヲ消シ年間殆ンド閑隙ナク加フルニ時々代言試験及判事登庸試験委員
 ナ命セラル、ト數回ノ多ニ及ビ又文官普通試験委員ヲ兼子タリ然レトモ事ヲ
 處理スル、ト尤モ迅速ニシテ多々益々辨シ未ダ曾テ事務ノ延滞ヲ來セシ、トナシ廿
 四年冠ヲ掛ケ業ニ代言ニ從事シ又其ノ餘暇常ニ東京法學院講師トナリテ英語邦
 語兩科ノ教授ニ從事シ毫モ繁ヲ勞フノ色ナク現ニ院長ノ任ニ在リ廿一年五月法
 學博士ノ學位ヲ授ケラル

君人ト爲リ溫厚ニシテ才敏ナリ辨舌明確一言ニシテ人能ク之ヲ了ス又常ニ人ニ
 語テ曰ク法律ハ元ト實地應用ノ學ナルニ學者往々空理ニ失シテ之ガ適用如何ヲ
 顧ミザル者アリ豈亦戾ラズヤト君カ代言事務ニ老練ナル所以アル哉

法學博士岡村輝彦君

船舶幅湊出入織ルガ如クニシテ常ニ紛雜ノ事件多ク明斷碩學ノ判官ヲ得ルニ非
 ンハバ能ク其間ニ立テ事務ヲ整理スルコト能ハザランヤ所謂明斷碩學ノ判官實

ニ其人アリ横濱始審裁判所長岡村博士是ナリ君ハ東京府ノ人舊舞鶴藩士ナリ安
 政二年十二月廿日攝津大坂ニ生ル父ヲ義昌ト稱シ明治初年ニ兵庫權令タリ始メ
 藩主故アリテ濱松ヨリ鶴舞ニ轉ズルニ及ビ一家之ニ從テ共ニ鶴舞ニ來ルト云フ
 君天性宏達穎悟少ニシテ藩設學校ニ入りテ漢英二學ヲ修メ明治三年始メテ藩ノ
 貢進生トナリテ上京シ大學南校ニ入りテ普通學ヲ修メ續テ開成學校ニ轉ジテ法
 律學ヲ專修ス九年六月官第二回ノ優等生ヲ海外ニ派遣スル君ヤ其撰ニ當リテ英
 國ニ航シ十月英國法學士兼倫敦ミットルテンブル社員テ、デーセ、アトキンス
 ニ就キテ法學ヲ研究シ次テ倫敦キングス、コーレ、ジ大試験ニ及第シテ倫敦ミツ
 ドル、テンブルヘ入社シ十三年一月倫敦法學院ニ於テ試験ニ及第シテパリストル
 ノ免狀ヲ受領シ尋テ上等裁判所クインズベンチ部ノ代議員ニ列スルコトヲ許サ
 レ爾來商法及ビ海運法ヲ專修シ重ニ海運裁判所ニアリテ實驗ヲ究ム十四年二月
 學業全ク卒リシヲ以テ未ダ留學滿期ニ至ラザルモ官命ヲ受ケテ歸朝シタリ
 其歸朝スルヤ直ニ司法省ニ舉ゲラレテ民事局ニ勤務シ續テ判事ニ任セラレテ控
 訴院ニアリ次テ正七位ニ叙セラル十六年大審院ニ入り尋テ從六位ニ進ミ遂ニ横

濱始審裁判所長トナリテ正六位ニ累進シテ奏任官二等トナリ又法學博士ノ學位ヲ授ケラル曩ニ君ハ代言人試験委員及判事登庸試験委員タルヲ數回ニシテ又高等文官試験委員ノ重任ヲ負ヒテ毎年之カ執行ニ從事シ繁務ノ余暇ハ常ニ横濱ヨリ出勤シテ東京法學院及明治法律學校講師ノ職ニアリテ大ニ學生ヲ蒸陶シ毫モ繁ヲ勞フノ色ナク彼ノ英國證據法ノ如キハ講數殆ハ十餘回ハ多キヲ重キ其年數亦六七ヶ年ニ涉リシト其熟達推シテ知ルベシ世ニ證據法學者ヲ以テ稱セラルハモ亦宜ナリ今ヤ職ヲ致シテ專ラ代言ノ業ニ從事シ更ラニ赫々ノ名アリ

是ヨリ先キ君ノ未ダ横濱ニ赴任セザルニ當リ長谷川判事所長トナリテ大ニ從來ノ弊習ヲ一洗シ事務着々トシテ觀ルベキモノアリシモ一朝氏ノ洋行セラルハニ際シ一時港民ノ不幸ヲ來セシモ君ガ後任ヲ繼グニ及ンデ益々港民ノ便益ヲ圖リ繁ヲ省キテ簡ニ就キ忽チ人民ノ欽仰ヲ來スニ至レリ且ツ代言人待遇上ニ著ルシキ改正ヲ加ヘテ彼ノ判事ト懸隔楚越ノ如クナル弊習ヲ除去シ勉メテ事務ノ澁滯勿ラシメタリ之レ蓋シ英國ノ制ニ基クト云フ

君人ト爲リ溫厚ニシテ苟モ事ニ臨ノバ敢テ躊躇スルコトナク常ニ果斷英裁ヲ以

テス又品行端正ニシテ曾テ世人ノ容喙ヲ招キシコトナシ平居人ニ語テ曰ク凡ソ法官タルモノハ心ヲ晴天白日ノ清キニ置キ寸分一刻ダモ法理ノ精神ヲ念却ス可カラズト以テ其持論ハ一班ヲ知ルベシ

人苟モ公平無私ノ心ヲ以ツテ事ニ處セバ其結果亦必ラズ公平ナルベシ之ニ反シテ苟モ偏私ノ眼ヲ以テ訟ヲ聽カバ甚シキ不公平ノ結果ヲ生ゼンノミ嗟世ハ法官タル者ハ心ヲ此ニ用イズンバアル可カラザルナリ

法學博士木下廣次君

嘉永安政ノ頃ヒニ當テ肥後熊本ニ碩儒號ハ韓村先生ナルアリ其名四隣ニ聞ヘ門下常ニ滿チ英才輩出セリ即チ今ノ竹添公使ノ如キモ亦先生ノ門人ナリト云フ

君ハ先生ノ一子ニシテ嘉永四年正月廿五日ヲ以テ肥後熊本城下ニ生ル少ヨリ家庭ノ教訓ヲ受ケ長ジテ後藩立時習館ノ居寮生ニ擧ゲラレ明治三年十一月藩ノ貢進生トナリテ大學南校ニ入り凡ソ二ヶ年間佛語學ヲ修メ五年八月更ニ明法寮法學校ニ入學シテ同校舍長トナリ四ヶ年間法學ヲ研究シ八年八月拔擢セラレテ佛

國留學ヲ命ゼラレ十一月巴里大學ニ入ツテ凡ソ四ケ年法學ヲ修メ全校ヲ卒業シテ法學得業生ノ稱號ヲ得十二年十一月更ニ法學博士ノ學位ヲ受テ歸朝スルヤ文部省准奏任御用掛トナリテ大學法學部講師ノ任ヲ負ヒ既ニシテ大學教授トナリテ正七位ニ叙セラレ十九年三月更ラニ法科大學教授トナリテ從六位ニ進ミ又帝國大學評議官及高等文官試驗委員トナリ次テ法學博士ノ學位ヲ授ケラレ又第一高等中學教頭ノ任ヲ兼子タリ其後古莊嘉門氏之カ校長ノ任ヲ辭スルニ及ンデ君其後ヲ受ケテ校長ノ任ニ當リ專ラ英才陶冶ニ志ヲ傾ケ滿校靡然トシテ其風教ニ化ス

君人トナリ剛邁ニシテ果斷アリ議論確切動かスカカラズ其始メ入テ法科大學教授ノ任ニ就クヤ主トシテ學生ノ品行上ニ注目シ又大ニ人才陶冶ノ點ニ心ヲ傾ケリ或人之ヲ評シテ曰ク六學ニ人傑アリ上ニ渡邊總長アリテ之ヲ統治シ下ニ木下評議官アリテ之ヲ助ク以テ益々帝國大學ノ基礎ヲシテ鞏固ナラシメタリト又頃君第一高等中學教頭ノ任ニ就クヤ痛ク學生ノ品行ヲ論シ慷慨悲嘆次クニ滿腔ノ熱血ヲ以テス一聽學生ヲシテ悚然反顧ノ念ヲ生セシム嗟君ノ如キハ眞ニ教育ヲ以テ自ラ任スルモノト謂ツヘキナリ

法學博士富井政章君

陽氣發スル處金石亦徹ル精神一到何事カナザヤンヤ君ハ京都府ノ人舊北白川宮家臣ナリ安政五年九月十日京都武者小路通新町ニ生ル父ノ名ヲ正恒ト稱ス頗ル通才アリ君少ニシテ聰了四歳字ヲ識ル長スルニ從ヒ嶄然群類ヲ出ツ少時尤モ人ニ異ナル所ノモノハ只人ニ後レヲ取ラザルコトヲ常ニ心肝ニ銘セリト云フ明治二年ニ小學校ヲ卒ヘ全シク四年ニ中學校ヲ卒業シ同シク六年ニ府立佛學校ヲ卒業シ續テ上京シテ東京外國語學校ニ入り佛語學ヲ修メテ第一等科ニ至ル是ヨリ先キ君學友某ト共ニ司法省法學生徒ノ試験ニ應ジ不幸ニシテ落第セリ是ニ於テ慨然遂ニ洋行ノ志ヲ決ス

明治十年五月自費ヲ以テ佛國ヘ航シ里昂府ノ紳士某ニ雇ハレ寒苦具サニ嘗メ其僅カニ得ル所ノ報金ヲ以テ學資ニ充テ煩務ノ余暇大ニ學業ヲ切嗟シ粉骨碎身後遂ニ里昂大學ニ入りテ法律學ヲ修メ十三年八月全校ヲ卒業シテ法律學士ノ學位

ヲ受ケ尙進ンデ法理ノ蘊奧ヲ研究シ至難ノ試験ヲ受クルヲ四回ニシテ十六年二月ニ至リ遂ニ法律博士ノ學位ヲ得タリ其試験ニハ毎回必ズ白圈全數ヲ以テ及第セリト所謂白圈トハ最高點ノ符號ニシテ全數トハ各科目悉ク其點ヲ得タル者ヲ云フ而シテ毎學年ノ終リニ優等生中ニ就テ懸賞競争試験ヲ行フノ慣例アリ君ハ他邦異語ノ身ヲ以テ毎年其撰ニ當リ刑法民法ニ於テ優等賞ヲ得タルヲ以テ其名聲漸ク高ク後チニハ皆其成績ノ拔群ナルニ驚カザルモノナカリシト然レトモ是ヨリ君ハ多年寒暑ヲ異ニスル異域ニ在ルノミナラズ非常ノ艱苦ト勉學トヲ積ミタルカ故ニ終ニ病ヲ醸スニ至リ今尙其病根ヲ絶ツテ能ハズト云フ

十六年夏學成リ業遂ゲテ歸朝スルヤ直チニ司法省ニ舉ゲラレ既ニシテ大學教授ニ任シ從六位ニ叙セラル後チ高等文官試験委員トナリ法學博士トナリ尋テ法科大學長トナレリ君カ全國遊學中大ニ學事ニ盡ス所アリシヲ以テ佛國文部大臣ヨリ、オフィシエダカテミ、勳章ヲ贈與セラル是レ蓋シ其成績ノ拔群ナルヲ表賞セシカ爲ナリト云フ目下君ハ公務ノ余暇東京和佛學校及明治法律學校講師ノ列ニ加ハリテ大ニ學生ヲ蒸陶シ且ツ其文章ハ東洋學藝雜誌中央法學會雜誌法學協會

雜誌國家學會雜誌五法律學校討論筆記等ニ散見シ其法學社會ニ裨益ヲ與フルヲ寡ナカラズ就中里昂府大學ニテ最高點ヲ得ラレタルトドクトル學科ノ卒業論文ノ如キハ尤モ其卓見學識ノ高キヲ察スルニ足ルヘク其他近時ノ著書ニ在テハ契約法講義刑法論綱民法論綱等アリ皆世ノ好評ヲ得テ行ハル

始メ君ノ法學生徒入學試験ニ應ジテ科ニ登ラザルヤ大ニ悔悟奮勵爾後益々進デ今日アルニ至レリ學友某嘗テ或人ニ此事ヲ語テ曰ク吾レ僥倖ニシテ科ニ登リ富井氏ハ不幸ニシテ科ニ登ラズ今反テ高下所ヲ異ニスルニ至レリ若シ氏ニシテ其時ニ當テ及第セバ豈亦勇進激昂單身佛國ニ航スルガ如キコトアランヤト是ヲ以テ之ヲ觀レバ人世一時ノ不幸ハ反テ永久ノ幸トナリ其始ノ幸ハヒ後ノ幸ニ如カザルモノアリ況ンヤ一時ノ試験ハ元ト僥倖的ノモノナルニ於テチヤ

學ニ熱心ナル者ハ賤業ヲ爲スチ耻ヂズ之ヲ耻ル者ハ真正ノ學士ニ非ザルナリ嗟君ノ如キハ蹉テ益々進取ノ氣慨ヲ勃發シ曾テ小節ヲ顧ミズ彼ノ一タビ跌ケバ忽チ天ヲ仰テ大息シ直ニ志ヲ他ニ轉スルガ如キハ固ヨリ取ルニ足ラザルナリ

法學博士井上正一君

君ハ舊山口藩士ナリ嘉永三年二月廿五日長門國大津郡伊上村ニ生ル父ノ名ハ正健謹直ヲ以テ聞ユ君幼ヨリシテ秀才アリ遠ク群兒ノ上ニ出ツ年十三始メテ萩明倫館ニ入ッテ漢籍ヲ修メ後又文學寮ニ入學ス明治元年京都ニ出テ江馬天江ニ就テ詩文ヲ學ビ幾許クモナクシテ上京シ箕作麟祥氏ノ門ニ入リテ佛學ヲ修ム

明治三年開成學校ニ入り明年更ニ貢進生トナリテ大學南校ニ入學シ普通學ヲ修メ同シク五年八月南校ヲ退學シテ司法省明法寮生徒トナリ專ハラ法律學ヲ修業シ八年八月法學修業ノ爲メ佛國留學ヲ命ゼラレテ之ニ航シ十月巴里專門校ニ入リテ滿二ケ年間法學ヲ研究シ同校法學バツシユリエーニ及第シテ證狀ヲ受ケ更ニ一ケ年間同校ニ於テ法理ヲ研究シテ法學全科ヲ卒業シ法律學士ノ學位ヲ受ケ時ニ留學滿期ニ際スルヲ以テ更ニ延期ヲ官ニ請フ官之ヲ容レ遂ニ三ケ年ノ延期ヲ以テス是レニ於テジョン府法學專門校ニ入學シテ法理ノ蘊奧ヲ極メ十四年七月同校博士試驗ニ及第シテ法學博士ノ稱號ヲ受ケ尋イテ歸朝ノ途ニ就ケリ歸朝後直チニ司法省ニ出仕シ訴訟法取調委員トナリ次テ法律學士ノ稱號ヲ受ケ既ニ

シテ同省ノ准奏任御用掛トナリテ翻譯課長ニ補セラレ續テ司法書記官トナリ文書課長ニ兼務シ從六位ニ叙セラレ判事登用試驗委員民法草案編纂委員法律取調委員等ヲ命セラル終ニ司法省參事官ニ任シ法學博士トナレリ

是ヨリ先キ君ノ佛國ニアリテ博士試驗ニ應ジタルトキノ論文ハ羅馬及佛ノ二文ニテ債權讓渡ノ論題ナリシト云フ又公務ノ餘暇ハ常ニ明治法律學校ニ出勤シテ大ニ法學生ヲ教導シ成業ノ士ヲ出ス丁數ヲ知ラズ其著書ニシテ現時法學社會ニ一大裨益ヲ與フル刑法治罪法講義ノ如キヲ見テ以テ其學淵識見ノ高キヲ知ルベシ君人ト爲リ寛裕淡泊人ニ接スル常ニ温顔ヲ以テス一見舊識ノ如シ具ニ其佛國大學ハ法律家タルニ負カズト云

法學博士熊野敏三君

君ハ舊山口藩士ナリ父ノ名ハ右仲母ハ横山氏ナリ家世々武ヲ以テ毛利侯ニ仕フ君ハ安政元年十二月ヲ以テ長門國阿武部萩松本弘法谷ニ生ル少ヨリ奇才アリ嬉戯群兒ト異レリ六歳ノ頃一日某社ニ詣ス君懇懇心ニ祈ル所アルガ如シ其ノ母之

レニ問テ曰ク汝何チカ祈ル答ヘテ曰ク大將ヲ祈ルト蓋シ當時尙武ノ世只大將ハ無上ノ榮位ナルヲハミ兒腦ニ記セルガ故ナリ長ズルニ從ヒ始メテ學ニ志チ傾ケリ

君幼名ハ猪三郎ト稱ス幼ニシテ父ナ亡ヒ獨リ母ノ養育ヲ受ク年甫テ十一在郷松下塾ニ入り馬島甫仙ニ就キテ漢學ヲ修メ明治四年三月ヲ以テ上京シテ佛學ヲ修メ明治五年三月開成學校ニ入學シテ佛語ヲ學ビ七月明法寮生徒トナリ專ラ法學ヲ研究シ八年八月法學修業ノ爲メ佛國留學ヲ命ゼラレ巴里大學ニ入ツテ佛學ヲ修メ凡ソ三ヶ年ニシテ全大學ヲ卒業シ法學士ノ學位ヲ受ク爾來全大學研究生トナリテ法理ヲ講スルノ際偶々三好判事洋行シテ巴里ニ來レルヲ以テ之ガ補助ヲナシ十六年七月更ニ法學博士ノ學位ヲ受ケテ歸朝ス

歸朝後直チニ司法省ニ出仕シ次テ法律學士ノ稱號ヲ受ケ後チ亦文部ニ轉シテ專ラ東京法學校ノ教職ヲ擔當シテ盡ス所アリ十九年二月檢事ニ舉ラレテ東京控訴院ニアリ尋テ司法參事官トナリ從六位ニ叙セラレ專ラ法典編纂ノ業ヲ執リ且ツ時々代言人試験并判事登用試験委員トナルト屢々ニシテ又海軍主計學校ニ兼勤

シテ法律講授ノ任ヲ負ヒテ其身ハ常ニ閑隙ナク亦傍ラ明治法律學校東京和佛學校ノ講師ノ職ニ在リテ數千百人ノ學生ヲ教導シ未ダ嘗ツテ倦怠ノ色ナシト云フ蓋シ君ノ今日執ル所ノ業ハ一トシテ純學的法律應用ノ點ニ非ラザルハナク之ヲ實際ニ活用シテ以テ國家ノ大務ニ當ルハ能ク其學ヲ所ニ負カズト謂ツ可キナリ是レヨリ先キ君ノ明法寮生徒タルヤ學術品行尤モ衆ニ超ヘ且ツ辨論確切ニシテ動カス可カラズ故ニ後チ官撰ヲ以テ佛國巴里大學ニ入ルニ及ンデモ著シク其奇才ヲ顯ハシ就中博士試験論文ノ如キハ條理明晰ニシテ毫モ澁滯ナク大ニ全校ノ稱賛ヲ受ケシト云フ又廿一年六月法學博士ノ學位ヲ授ケラル

君氣宇曠開裁決流ルハガ如シ故ニ事務ヲ理スル極テ迅速ニ處方立ドコロニ成ル以テ其敏才ノ然ラシムル所ナルヲ見ルベシ嗚呼君少時大將ヲ祈ル大將ハ蓋シ啻ニ兵ヲ揮キ軍ヲ督スルノ謂ニ非ズ一局長大將ナリ一課長亦大將ナリ其他一業一事苟モ人ノ長タル者亦皆大將ニ非ザルハ無キナリ余亦君ノ大ニ大將タランコトヲ望颯シテ止マザルナリ

法學博士宮崎道三郎君

君ハ安政二年九月ヲ以テ伊勢國津ニ生ル父ヲ八郎右衛門ト云ヒ性着實ニシテ文武ニ達シ藤堂守善ノ家老職ト爲リ能臣ノ聲アリ君孩提ノ頃ヨリ羸弱故ヲ以テ父母敢テ讀書ヲ強ヘサリシト雖而カモ謹嚴ナル家庭ノ教育ハ以テ大ニ其志操ヲ雄壯ナラシメタリト七八才ノ頃始メテ學ニ就キ幾千モナク擢テラレテ給費生トナリ時習館ニ寄宿シテ土居某以下諸師ノ薰陶ヲ受ク時習館ハ津藩々立ノ學舎ニシテ專ラ漢學ヲ授クル所ナリ適洋學ノ修メサル可カラサルヲ視學課ノ傍ラ鈴木某廣瀬某等ヲ師トシ私カニ英學ヲ學フ年十八東京ニ出テ、同人社ニ學フコト數月尋テ開成學校ニ入テ英吉利法律ヲ脩メ拮据勉勵數閱年明治十三年七月ニ至リテ東京大學法學部ヲ卒業シ法學士ノ學位ヲ受ク

是ヨリ先キ君學窓ニ在ルノ日實際ニ學文ニ法律長足ノ進步ハ其沿革ニ據ラサル可ラス而シテ我邦人更ラニ之レヲカムルモノナキヲ慨シ早ク已ニ已レカ任トナス故ニ大學ヲ卒業スルヤ他ノ備聘ニ應セス大學研究生トナリテ獨專ラ東西ノ法律史ヲ講究ス后文部省御用掛トナリ更ニ大學御用掛ニ轉シ始メテ和漢法律史ノ

編纂ニ從事セリ當時法律ノ學漸ク盛ナリシト雖而之レカ沿革ニ注目スルモノニ至テハ寥々曉天ノ星ヲ觀ルカ如キナリ君沈思默考タニ舊記ニ就テ一考ヲ案シ朝ニ諸說ニ探テ一照ヲ採リ涵養稍々体ヲ成スニ及ヒ之レヲ大學ノ講筵ニ披露シテ大ニ喝采ヲ博セリト明治十七年八月沿革法理及羅馬法專修ノ命ヲ受ケテ獨乙ニ赴キ同年十月ヨリ翌年十月ニ至ルマテハイデルベルク大學ニ入り十九年十月ヨリ翌年十月ニテライプツク大學ゲツチンゲン大學等ニ於テ修學シエーリング、ラエンドシヤイド、ゾーム、ワフン、ビンジンク其他シルチエ、ベツカード、ロシー等ノ碩學大家ニ就キ沿革法理及羅馬法ノ蘊奧ヲ究ム又性哲學的ノ嗜好アリシヲ以テグント并ニロツシエルニ就キテ哲學理財ノ學ヲ兼脩ス時ニ獨乙留學后更ニ一年間佛國遊學ノ命ヲ受ク然レモ君常ニ主一ノ窮理ハ博涉ニ優ルコト數等ナルヲ信シ請フテ獨乙ニ留マリ專ラ沿革法理ヲ脩ムルコト一年深ク斯學ヲ考究シ十一年十月ヲ以テ歸朝ス

歸朝ノ后法科大學教授ニ任シ二十二年法制局參事官ニ兼任シ尋テ文官試檢委員圖書館幹事ヲ兼ヌ現ニ大學教授專任ニシテ法科及文科大學ニ出テ羅馬法沿革法

理ノ講義ヲ擔當セリ
人ト爲リ寛厚和順又緻密ノ性ハ能ク和漢法律沿革ノ溟濛タルヲ弘開シテ后世學
者ハ指針タルニ足ル以テ后進ノ慶福ト謂ハサル可ケンヤ

法學博士增島六一郎君

君通稱六一郎日芳學人ト號ス安政四年六月ヲ以テ滋賀縣近江國金龜城下ニ生ル
父ヲ團右衛門ト稱ス家世々彦根藩ノ重臣タリ君幼ニシテ藩設學舎ニ通學ス一朝
大雪脛ヲ設シ行人甚タ歩ニ難ム偶一商店前積雪未タ掃ハサル所アリ大呼シテ曰
ク屋前三尺積雪ヲ排掃スルハ我藩制ナリ汝何ソ怠ルヤト店主其年少ヲ悔リ依違
シテ奏セス君忽チ叱咤勵精シテ曰ク即時ニ於テセヨ若シ從ハスンハ法ニ處セン
ト意氣劇如タリ店宰大ニ恐懼シ竟ニ其言ニ從ヒシト資性嚴正ニシテ毫モ假借ナ
キ概子此類ナリ

君年甫メテ十四上京シテ山東義塾ニ入り英學ヲ脩ム明治五年外國語學校ニ入り
翌年開成學校ニ轉シ法學ヲ脩ム君時ニ年十七歲篤學常ニ同校ニ冠タリ明治九年

九月本科生ニ進ミ十二年七月全科ヲ卒業シ法學士ノ學位ヲ受ク直チニ大學豫備
門ノ教官ニ任セラル此時ニ當リ學術專攻ノ士相踵テ東京ニ來リ學成ルニ及ンテ
官途ニ奉仕スルモノ多ク獨自獨力以テ業務ヲ企圖スルモノ殆ト稀ナリトス君夙
二期スル所アリ幾干モナク大學ヲ辭シ高橋一勝磯野計山下雄太郎等ト相謀リ攻
法館ヲ神田錦町ニ設ケ專ラ代言辨護ニ從事ス蓋シ大學卒業生代言營業ノ權與ニ
シテ名聲頗ル顯ハル時ニ三菱會社主岩崎彌太郎君等ノ材ヲ愛シ資ヲ投シテ海外
ニ遊ハシム茲ニ於テ磯野山下二氏ト同船シ十三年英國ニ航ス既ニシテト云フ君
倫敦府ミットルテンブルニ入り法學ヲ研究ス十六年二月業ヲ卒ヘテパリストル
ノ學位ヲ受ク此ヨリ進ンテリバールニ遊ヒ又米國ボストンニ渡リ更ニ轉シテ
フヒラデルフヒヤニ到リ十七年六月歸朝ノ途ニ就ケリ官君ノ歸朝ヲ待チ直チニ
舉ケテ大學講師ニ任ス

是ヨリ先キ君海外ニ在リテ汎ク交テ學者紳士ニ結ヒ常ニ社會ノ進化ニ注目シテ
各地ノ制度文物ヲ觀察ス殊ニ代言事務ノ實況ヲ調査シテ大ニ他日ニ資スルアン
トナ期セリ用意周密ノ資性欽スヘキカナ僅カニ一年ニシテ大學講師ノ任ヲ辭シ

法學博士增島六一郎君

爾來民間ニ在リテ專ラ代言ノ業ニ從事ス今ヤ事務所ヲ京橋日吉町ニ設ケ訴訟事件ニ執筆シル席暖ナルノ逸ナシト君頗ル識見高ク唯日本法律ノ範圍ヲ行カンヲ期ス近時法律社會ノ難問タリシクエンセー對アツブカー訴訟事件ニ於テ無條約國波斯亞人ヲ日本法律ノ下ニ服從セシメタル如キ與テ力ナクンハアラス而ノ其事ニ當ルヤ内外親疎ノ異ナク能ク權義ノ在ル所ヲ分カニシテ又餘蘊ナシト云フ君又英吉利法律學校創設ニ盡力シテ校長ノ任ニ舉ラレ群生ヲ薰陶シテ盡セシ所少カラス又一社ヲ創立シテ日芳書院ト稱ス法學社會ニ行ハル、裁判釋誌ハ實ニ此書院ノ發行ニ係レリ當今法律雜誌ノ編著頗ル多シト雖モ我邦判決例ヲ后世ニ傳フルノ基礎ヲ開キタルモノ蓋シ此雜誌ニ在リト云フ

人ト爲リ剛直嚴正以テ自ラ律ス故ニ其事ニ當ルヤ寸毫モ屈スル所ナク又借ス所ナシ嗚呼夙ニ業ヲ民間ニ張リ古今一轍聲望更ニ籍甚ナルモノ由テ來ル所アルヲ見ル可キナリ

法學博士末岡精一君

君安政二年六月ヲ以テ山口熊毛郡宿井村ニ生ル初メ庠序ニ入テ讀書ヲ學ヒ慶應三年藩設文學寮ニ入り專ラ漢籍ヲ學フ明治二年藩ノ兵學者大村益太郎兵學寮ヲ創立シ蘭書ニ依リテ兵學ヲ教授セリ當時獨乙人來リ大ニ學制ヲ釐革ス君マタ獨乙語研究ニ志ザシ就テ學フ所アラントス意ニ充タスシテ之レヲ果サス贅居スル一二年十八歳ノ時實兄富永景知ニ從ヒテ上京シ芝育英寮ニ入りテ英學ヲ修ム全校后チ早稻田ニ移ルニ及ヒ轉シテ英語學校開成學校等ニ學ヒ十四年七月東京大學文學部ニ於テ哲學經濟ノ二學科ヲ卒業シ尋テ文學士ノ學位ヲ受ク直チニ大學御用掛文學部講師ヲ命セラレ法理文ノ三學部圖書取締兼務トナリ又法學部准講師ヲ命セラル

明治十五年三月滿三ヶ年之間留學ノ命ヲ受ケ獨乙國ニ航シ柏林大學ニ在ルコト二年后奧國維納大學ニ移リテ政治學ヲ研究シ留學期滿ルニ及ヒ尙一年間延期ノ許可ヲ得單思精研更ニ自費ヲ以テ自耳義英吉利佛蘭西以太利等ヲ經歷シ十九年十月ニ到リ歸朝ス官直チニ舉ケテ法科大學教授ニ任シ正七位ニ叙ス二十年十月圖書館長ニ兼任シ奏任官三等ニ叙セラル又文官試驗委員高等文官試驗委員ヲ命セ

ナル

君海外ニ在ルヤ主トシテ各國憲法制度ヲ攻究シ彼此參照大ニ得ル所アリ曾テ英米佛憲法ノ俗話、英佛埃比較官吏法、憲法通俗解釋法、國際公法及沿革史ノ概要行政法、汎論等ヲ著ハス其他國際法著書、評領事制度ニ就テノ俗話、英獨米比較彈劾ニ就テノ話等ヲ起稿シタリ而シテ國家學會雜誌、法學會雜誌、國光、日本同盟法學會講義等君ノ論文ヲ掲載スルモノ實ニ少カラストス

法學博士穗積八束君

君ハ法學博士穗積陳重ノ實弟ニシテ其父重樹夙ニ經史百家ノ書ニ通シ當時學生其門ニ充テ名望大ニ顯ナル君文久元年三月ヲ以テ宇和島仲ノ町ニ生ル幼時塾生某ニ讀書ヲ習ヒ后藩設明倫館ニ入ツテ漢籍ヲ脩ム明治七年父母親戚ト俱ニ東京ニ來リ共立學校ニ入り始メテ英書ヲ學フ幾クモナク外國語學校ニ入り尋テ大學ニ轉ス豫科ヲ經テ本科ニ進ミ政治學理財學ヲ脩ム學窓ニ在ルコト殆ト十星霜明治十六年七月東京大學ヲ卒業シ文學士ノ學位ヲ受ク

此時ニ當リテ大學卒業者官途ニ職ヲ奉スルヲ常トス獨リ君學理ヲ講究スルコトヲ務メ又博涉ノ志アリシヲ以テ猶ホ大學ニ留リテ研究生トナリ傍ラ外國語學校ニ入りテ獨乙語ヲ學フ明治十八年公法及制度歷史脩業ヲ命セラレテ獨國ニ留學ス君乃ハイデルベルク府大學伯林大學ニ在ルコト各一年半歲更ニ轉シテストラスブルクニ學フコト三年君又佛蘭語ニ通セシヲ以テ倫敦スエツチエルセ子ラル等ノ諸大學ニ歴遊シ汎ク有名ノ大家ニ接シ詳悉叩竭其蘊奧ヲ究ム就中ストラスブルク府ノ公法學者ニシテ參政ノ樞機ニ當レルラバントハ君カ最憑依セシ師ニシテ刺札ノ往復今猶絶ヘスト云フ

君明治廿二年ヲ以テ歸朝ス時恰モ我帝國憲法發布ノ一週間前ニシテ國民舉テ時事問題ニ熱中シ甲論乙駁歸着スル所ヲ知ラサリシノ際ナリ故ニ苟モ公法學者其人ノ名ヲ聞キ君ノ歸朝ヲ歡迎セサルモノナカリシト官直チニ舉ケテ大學教授ニ任ス又樞密院法制局帝國議會ニ在リテ名聲アリ而シテ公法學上幾多ノ疑問君等ヲ俟テ明カナルモノ少カラス現ニ公法學主任教授ニシテ專ラカテ大學ニ致ス曾テ華族會館學習院講師ヲ囑托セラレ又多額納稅議員會議所ノ講筵ニ聘セラレ私

立學校教務タリ
君容恣秀麗貴公子ノ風采アリ而カモ大學卒業ノ后兒童ト席ヲ列シテ語學校ニ學
ヒシカ如キ心事耿々卓落不羈具ニ欽スヘキナリ

法學博士梅謙次郎君

君ハ雲州松江ノ人藩醫梅蒸氏ノ二男ニシテ萬延元年ヲ以テ松江ニ生ル兄アリ錦之
丞ト云ヒ大學出身中夙ニ圭角ヲ顯ハシタル亡梅醫學士其人ナリ君資性學ヲ好ミ
幼時祖父道竹ニ就キ千字文孝經四書ヲ素讀ス又澤野脩輔ノ門ニ入り更ニ句讀ヲ
脩ム君醫家ニ生レテ斯業ヲ好マス年甫メテ十歳佛人亞歷山ニ就キ醫學修業ヲ命
セラレ自ラ之ヲ辭シテ漢學ヲ學ヒ後洋學校ニ入り英語ヲ學フ幾干モナク廢藩置
縣ノ政變ト共ニ各藩ノ校舍皆閉鎖セラレ學舎ヲ離ル、一、年餘明治四年小學校ノ
設置ニ當リ就學ス試験成績優等ヲ以テ縣廳ノ賞スル所トナリ嶄然頭角ヲ顯ハセ
リ后教員ト協ハス決然袂ヲ拂テ退學ス曾テ人ニ謂テ曰ク今ヨリ之ヲ想ヘハ慚愧
ニ堪ヘスト年五十父母相携テ上京シ陸軍出身ヲ志願セリ翌年陸軍幼年學校ノ募

集ニ應ス體質不合格ヲ以テ遂ニ學術試験ヲ果サス茲ニ於テ志ヲ轉シ東京外國語
學校ニ入り專ラ佛學ヲ學フ十七歳司法省法學生ノ召募ニ應シ甲科ヲ以テ及第ス
然レレ体格不長復入學ヲ許サレズ再ヒ語學校ニ入りテ佛語ヲ講脩ス

君天質羸弱加之家貧ニシテ攝養心ニ任セサリシカハ應試二回共ニ體質不長ヲ以
テ意ヲ得ス偶々母病ム時遺產漸ク傾キテ家ニ婢僕ヲ備ハザリシヲ以テ君自ラ薪
水ヲ供シ一意専心看護到ヲサル所ナシ既ニシテ慈母瞑ス時二年十八落膽愁傷遂
ニ病ニ罹リ僅ニ九死一生ヲ得廿一歳ノ春第一位ヲ以テ語學校ヲ卒業セリ此時ニ
當リ司法省法學校ノ欠員アルヲ聞キ突然試験ニ應シテ登第シ黽勉五閱年首席ヲ
以テ司法省法學校ヲ卒業シ尋テ法律學士ノ學位ヲ受ク即全省御用掛ニ任セラレ
法律ヲ教授ス君二十八歳法律學研究ノ爲メ佛國留學ヲ命セラル茲ニ於テ任ヲ辭
シテ全國ニ航シ直チニ里昂大學ニ入ル其ノ大學ニ在ルヤドクトラー第一回ノ試
檢ニ於テ四白圈ト特別ノ褒狀ヲ受ク白圈ハ尤優等點ニシテ四白圈トハ試檢官四
名悉ク之レヲ與フルモノナリ而シテ特別優等ニハ更ニ褒狀ヲ與フ同年第二回ノ
試験又四白圈ト特別ノ褒狀ヲ受ク翌年第三回ニ於テ同シク四白圈ヲ得翌年規定

ノ試験ニ應シテ亦四白園ト特別ノ褒狀ヲ得テドクトエル、アンドロワーノ學位ヲ受ク且ツ里昂大學ハ學術ノ秀拔ヲ稱シ爲ニ特ニ贈ルニヴエルメイユ銀地金覆ノ賞牌ヲ以テセリ非常ノ名譽ト謂ハサル可ケンヤ君ノ學事ニ熱心ナル未タ足レリトセス萬里書ヲ飛ハシテ更ニ獨乙國留學ヲ乞ヒ當路ノ許可ヲ得テ獨京伯林ニ轉シ益研脩ヲ積ム茲ニ一年後又獨乙聯邦ノ諸大學ヲ歴遊ス進ンテ英國ニ航セントスルニ當リ官命ニ接シテ歸朝セリ

直チニ法科大學教授奏任官四等ニ任シ后農商務省參事官ヲ兼子又學習院ノ教授ヲ囑托セラレ私立法律學校講師及東京商業會議所顧問トナリ猶餘暇著作ニ從事シテ益斯學ノ研究ニ努ムト后來具ニ恐ル可キナリ

聞クドクトラーノ試験ハ各國概子其制アリト雖モ佛國殊ニ嚴ナリト故ニ佛國法學士ニシテ試験ニ應スルモノ猶三五年ノ準備ヲ終ヘ漸ク塲屋ニ入ルヲ得ベシト君ノ試問ニ應スルヤ既ニ我邦ノ學位ヲ有シ涵養素ヨリ深カリシト雖モ羅馬法羅典語ノ如キハ曾テ脩メサル所ニシテ應試容易ノ業ニアラサルヲ知リ雖股懸梁夜以テ日ニ繼キ后推問ヲ儕輩ニ試ミ其與ミシ得ヘキヲ覺リ后試験ニ應セント成蹟

尤優等ヲ得ルニ及ンテ勇進益勉メ徹頭徹尾碧眼人士ヲシテ後ヘニ瞠瞠タラシタリト云フ

君日本和解論商法義解賣買法講義等ノ著アリ共ニ世ニ行ハル又里昂大學卒業論文ハ微細ナル佛蘭西文字ヲ以テシテ上下二篇通計七百餘頁全大學教師ノ勸誘ト書肆ノ請求トニ依リ之レヲ出版セシニ今猶佛獨法律社會ニ重キヲ置クト云フ

君七歳ニシテ學ニ就キ年ヲ闕スルコト廿有五年屢天爲ニ危セラレシト雖モ未ダ曾テ人后ニ落チス之レ蓋シ強記敏達ノ資アルニ由ルモ中年病ヲ得テ恰ト死ニ瀕シ更ニ進ンテ博士ノ榮位ヲ受クルニ至リシモノ勤勉苦節ニ堪フルニアラスンハ能ク此ノ如クナランヤ人ト爲リ温良ニシテ謙讓人ニ接シテ貴賤親疎ナシ又沈靜ニシテ寡言事ニ當リテ辯論明晰理義貫通セサルナシ其后进ヲ率ユルヤ淳々トシテ常ニ論スニ學術ノ蘊奧ヲ究ムヘキヲ以テス而シテ其私德ノ高潔ナルハ夙ニ世人ノ認ムル所具ニ一世ノ師表ト謂フ可キナリ

法學博士土方寧君

法學博士土方寧君

君ハ高知縣ノ人十一世ノ祖喜十郎正直遠江國高天神城主次郎義正ノ后胤ニシテ世々土方村ニ住シ掛川城主山内一豊ニ仕フ關原ノ役一豊功ヲ以テ土佐國ヲ領スルニ及ンテ從テ土佐ニ移リ高知藩士藉ニ列ス君安政六年二月十二日高岡郡佐川村ニ生ル明治元年五月藩ノ山本澹齋伊藤山陰ニ就キ漢學ヲ脩メ五年四月大坂ニ遊ヒ府立歐語學校ニ入り專ラ英語ヲ學フ六年一月東京ニ出テ赤坂有馬學校ニ寄宿シ英學ヲ講習ス后外國語學校ニ入り尋テ東京英語學校ニ移リ英語學科ヲ卒業シテ開成學校豫科第二級ニ入り十一年七月東京大學豫備門全科ヲ卒業シ九月東京大學法學部ニ入り勉學四年余十五年七月東京大學ヲ卒業ス時ニ同學數十人君學術優等ヲ以テ第一席ヲ占メタリト云フ

直チニ文部省ニ出仕シ明治十六年八月東京大學助教ニ任シ法學部ニ勤務ス尋テ法學部諮詢會々員ニ撰ハル全年十月法學部生徒暴行ニ際シ直チニ取調委員ヲ命セラル十七年六月法學部別課生入學試驗委員トナリ又豫備門生徒入學試驗委員ヲ命セラル尋テ圖書館事務兼勤トナリ十九年法科大學助教奏任官五等ニ任シ從七位ニ叙セラル

明治二十年六月滿三ヶ年間英國ニ留學ノ命アリ傍ヲ司法省ノ依囑ヲ受ケ英國裁判所構成法及司法ニ關スル事件報告ノ任ヲ佩ヒ全年七月橫濱ヲ發シ印度洋ヲ經テ倫敦ニ航シ全年十一月特ニ入學試驗ヲ免セラレミッドル、テンプルニ入學ス在全學三閱年定規ノ卒業試驗ニ及第シ全國インス、オフ、コト法學教育委員ヨリ全科卒業證書ヲ受ケミッドル、テンプルニ於テバリストル、アットローノ學位ヲ受ク又英國司法並ニ代言社會ノ實務ヲ觀了シ二十四年二月倫敦ヲ發シリバプールヨリ航シテ紐育ニ至リコロンビヤ法科大學エール法科大學ハーバート法科大學其他諸州有名ノ法科大學ヲ巡視シ桑港ヲ經テ全年四月下旬歸朝シテ法科大學教授ニ任シ奏任官四等ニ叙セラル同年八月法學博士ノ學位ヲ授ケラル是ヨリ先キ君大學出身ノ法律家數名ト相謀リ英吉利法律學校ヲ創立ス即現今ノ東京法學院ニシテ爾來全校講師ノ任ニアリ

夫レ法律家ノ法律家タル所以ノモノ頭腦先ツ深遠高尚ノ學理ヲ湛ヘ應用適實ノ活力又之ニ次カサル可カラス君曩キニ英國ニ在ルヤ司法大臣ノ命ヲ受ケテ司法事務ノ取調ニ從事シ又スキュコックス代言事務所ニ入りテ實修ヲ積ミインス、オ

フ、コト法學教育評議官ヨリ法學卒業ノ證書ヲ受ク而シテ君カ學理上ニ於ケル聲譽ハ夙ニ世人ノ知ル所殊ニ法律學ノ骨子タル契約法理ニ於テハ殆ト獨歩ヲ以テ稱セラル

君性甚タ運動ヲ好ミ毎ニ善ク其身ヲ養フ故ニ健全病ムコト稀ナリ嘗テ語テ曰ク予ハ無藝ナリト亦齋落瀉放毫モ狹ム所ナキヲ見ルヘシ近世學者多ク病アリ身体ノ運用大ニ省ル所ナクシテ可ナランヤ

法學博士和田垣謙三君

君ハ兵庫縣ノ人父ヲ讓ト稱シ舊豐岡藩主京極高厚ニ仕ヘ札幌奉行產物奉行等ノ要職ヲ歷任シ夙ニ盛名アリ君其二子ニシテ萬延元年七月十四日但馬國豐岡ニ生ル幼ヨリ讀書ヲ好ミ滿ノ儒者久保田精一ニ從ヒ漢籍ヲ學ブ業漸ク進ミ幾千モナク維新ノ革命ニ當リ世態變移ノ大勢ヲ看破シ明治四年醫師菊池武文ニ就キ始メテ獨乙語ヲ學ブ賦性英敏才氣稜々大ニ山間僻郷ニ在ルヲ慨シ翌年十月奮然笈ヲ負フテ東京ニ出ツ時ニ年甫メテ十三本郷進文學舎ニ入りテ專ラ獨乙語ヲ脩ム六

年五月東京外國語學校ニ入り后開成學校ニ於テ獨乙語鑛山學ヲ脩ム當時洋籍總テ英語ヲ以テスルノ議起リ獨乙語廢セラル、ニ及ンテ斷然意ヲ決シテ更ラニ英學ヲ脩ム精勉二年月明治十一年東京大學文學部ニ入り大ニ文學哲學經濟學ヲ脩メ學業英脫夙ニ同學ヲ凌駕ス十三年七月卒業考試ニ登第シ文學士ノ學位ヲ受ク始メ君ノ大學ニ入ルヤ恰モ文學部新設ノ初期ニ當リ同生皆文學科卒業先登者タルノ榮ヲ擔フ就中君ハ其先登中優等第一ノ位席ヲ占ム豈ニ學生ノ名譽ト謂ハサル可ケンヤ直チニ官ノ援擢スル所トナリ貸費留學ヲ命セラレ后官費生トナル其年十月英國ニ航シ倫敦大學ニ在ルコト一年余尋テケンブリッヂ大學ニ移リキングス、コレイシ故レオン、レヴヰト、フオックス、ウエル、及ケインズ、ミーク、諸教授ニ就キ經濟學ヲ專攻シ取捨較照ノ志ヲ抱キ后又獨乙ニ遊ビ伯林大學ニ入りワグネル、シユモルレル、トシ研鑽益勉メ在留前後三年ヲ經十七年五月歸朝セリ歸朝ノ后文部省ニ入りテ文科大學ニ勤務シ尋テ諮詢部會及諮詢總會々員ニ撰舉セラレ十七年豫備門生徒入學試驗委員トナリ十八年二月東京職工學校及法科大學ニ兼勤シ十九年十月法科大學教授委任官三等ニ任シ從六位ニ叙セラレ二十年

九月文官試檢局書記官ニ轉シ法科大學教授ヲ兼子二十二年四月法科大學教授兼帝國大學書記官ニ任シ更ニ文官試檢局書記官ヲ兼子十八年以來尋常師範學校尋常中學校高等女學校教員學力試檢委員ヲ命セラル、モノ數タヒ廿五年四月正六位ニ陞叙セラレ大學評議官ニ撰ハル君任ニ教務ニ當ルヤ諄々後進ヲ誘道シ職ニ書記官ニ在ルヤ百事ニ較掌シ萬裁一トシテ其技ニ任セサルナシト云フ君常ニ熱心學理ノ淵源ヲ考覈シ咄嗟ノ間苟クモ文筆ヲ弄スルヲ爲サス而シテ射利的ハ著述ヲ視ルコト恰モ蛇蝎ハ如シト蓋シ著作ノ業タルヤ文教ニ影響スル所最重大ナルモノアレハナリ嘗テ男女同權ノ說起リ世論沸々遂ニ女尊男卑ヲ論スルモノアルニ至ル君婦人教育會ニ臨ンテ天理論ヲ演說ス所說男尊女卑ハ天理ナリト云フニ在リテ大ニ世人ヲ變動セリ爾來未タ其論文ニ對シ價值アルノ駭說出テスト卓識高論聊カ以テ其全豹ヲ伺フニ足ル可シ君敏才ニシテ氣骨アリ夙ニ斯學ヲ研究シテ腦中自ラ定見アリ人ト爲リ淡泊ニシテ毫モ挾ム所ナシ又當代ノ偉人ト云フ可シ

法學博士金井延君

君ハ慶應元年三月遠州見附町近傍ニ生ル家世豪士タリ其父海三舊幕下皆川某ノ家臣トナリ江戸ノ間ニ往來ス君幼ニノ粗豪婉白ヲ以テ四隣ニ鳴ル後子上京シテ學ニ就キ六年半込新民義塾ニ入ツテ英學ヲ脩ム尋テ東京英語學校ニ轉シ十年九月大學豫備門ニ登第セリ翌十一年父商事ニ失敗シ家道頓ニ衰ヘ君亦學ヲ廢セントス幸ニノ親戚ノ資ヲ供スルアルヲ以テ僅ニ學ヲ襲ク十四年九月遂ニ大學文學部ニ入り幾干モナク給費生トナリ政治學理財學ヲ專攻ス十六年更ニ褒賞給費生トナル爰ニ於テ復親戚ノ助力ヲ借ラサルニ至レリ此ノ時ニ當リ大學々生ニシテ餘暇出テ、私立學校ノ教員トナリ或ハ以テ學資ヲ補給スルアルモ其得ル所邊幅ヲ飾ルノ資ニ抛ツモノ亦少カラス君獨リ學生ノ本分ヲ愼ル、モノトシ大ニ此等ノ流風ヲ排擊シ超然トシテ窮貧自ラ持シ稍服弊屣遂ニ其縛考トナレリト云フ十年八月六月東京大學文學部ヲ卒業シ文學士ノ學位ヲ受ク而モ期スル所アルヲ以テ他ノ聘備ニ應セス官費留學生ト爲リテ依然大學ニ在リ十九年大學組織變更ニ當リテ大学院學生トナリ全年七月官費留學ヲ命セラル

君ノ大學ニ在ルヤ甯ニ學術ノ優等ナルノミナラス雄大ノ辯ト富騰ノ誠トハ常ニ演說討論ノ壇上ニ充溢シ又勇敢ノ氣象ト辯論ノ才器ハ更ニ塲屋ノ統率者タリ儕輩未タ西洋文學ノ真粹ヲ解得スルニ至ラスシテ業ニ已ニ孔孟ノ主旨ヲ捨テ半襲半襲爰ニ道義ノ綱領ヲ壞リ日ニ輕佻浮薄ニ陥ルアルヲ慷慨シ十六年九月故文學士板倉氏等ト互修會ヲ起立シ躬行植節自ヲ先導ト爲リ專ラ修身道義ノ要ヲ講ス又風儀養成ノ目的ヲ以テ法學士立志等ト補文館ヲ設ケ志氣ノ消長ハ身体ノ強弱ニ關スルヲ悟リ或ハ柔術ヲ闘ハシ或ハ遠足ヲ試ミ頻リニ體育ニ力ム幾干ナラスシテ靡然風化ノ勢ヲ呈シ奏功共ニ空シカラス君又一夜二友ト運動場ニ會ス時ニ天暗ク氣冷カナリ相語テ日ク一機干ヲ興シ師教友補以テ斯道ヲ振興シ辨論拆義以テ知識ヲ交換セント熱心同志ヲ叫合シテ遂ニ一會ヲ成ス名ケテ文學會ト云フ始メ文學部ノ團體ニ過キサリシヲ以テナリ爾來盛衰幾變遷今ヤ國家學會ト稱シテ堂々天下ニ鳴ルモノ實ニ之レナリトス誰カ知ラン正議黨論國家ノ問題ヲ料理シテ社會ノ警鐘タル國家學會ノ起源ニ遡レハ三強骨暗夜ノ會合ニ因セントハ而シテ先キノ二友誰トカ爲ス日ク東洋問題ノ策士稻垣萬次郎日ク少壯外交家故

林權助氏ナリ

明治十九年獨乙ニ航シ直チニハイデルベルヒ大學ニ入り經濟學ヲグニス、レীগザーニ氏ニ憲法行政法國際公法ヲシユルツエ、フオンブルメリンクニ氏ニ學ヒ二十年ハレト大學ニ移リ純正經濟學應用經濟學ヲコンラツド、フリードベルヒニ氏ニフロイス行政法法理論倫理學ヲロイニング、スタムレル、ハイム諸氏ニ學ヒ廿一年伯林大學ニ入りワク子ル、シモレル、グナイスト、キエルケ、トライツケ諸氏ニ就キ經濟學、財政學、國法學、民法及史學等ヲ研修シ廿二年秋更ニ英國ニ轉學シ廿三年十一月歸朝シ直チニ法科大學教授ニ任シ獨乙政策協會々員ニ舉ケラル又高等商業學校嘱托教師私立專修學校ノ講師トナリ共ニ經濟學ノ講義ヲ担任ス君海外ニ航スルヤ社會表裏ノ情況ヲ看破センコトヲ期シ閑アレハ四方ニ遊歴シテ頻リニ交際ニ勤ム殊ニ意ヲ經濟學實地ノ傾向ニ注キ以テ社界問題ヲ研究シ又熱心ニ貧民々情ヲ探求シテ交互參照茲ニ於テカ實學大ニ進ム曾テ維納府ニ止マル三閱年スタインニ親炙シテ質ス所アリ后英國ニ移ルニ及ンテ力ヲ自修ニ致シ博覽涉獵ヲ擅ニシ尋テ東倫敦ホワイトチヤツベルニ至リトインビーホール館ニ

投ス抑此地ハ貧民惡漢ノ巢窟ニシテ殺傷鬭爭絶ユルコトナキ所君單身獨行シテ彼國窮迫人種ノ狀態ヲ探險シ后蘇格蘭地方ヲ巡遊シ既ニシテ歸朝ノ途ニ就ク知ラス君頻リニ歐洲大陸ノ實際ニ留意スルモノ單ニ斯學ノ資料ヲ得ントスルカ將タ他ニ視ル所アルカ吾人目ヲ刮シテ后期半生ノ事業ヲ觀ント欲スルモノナリ君性至孝然レ厄不幸ニシテ明治六年母ヲ失ヒ獨乙留學中又父ノ喪ニ丁ル言茲ニ至ル毎ニ泣然語ルニ生活ノ愉快ナキヲ以テス嗟先キニ襁褓孤翁ニ愧チサルノ勇アツテ后ニハ葦閣双親ヲ追想シテ已マス何ソ氣節ノ高キヤ人ト爲リ活潑ニシテ才敏ナリ少壯有爲博士ノ名アル宜ナル哉

醫學博士高木兼寛君

君ハ東京ノ人舊鹿兒島藩士ナリ嘉永二年九月十五日ヲ以テ日向國諸縣郡穆佐郷ニ生ル幼名ヲ藤四郎ト呼ビ父ハ郷士ニシテ通稱ハ喜助諱ハ兼次ニシテ母ノ名ハ園子ナリ家世々武ヲ以テ藩侯ニ仕ヘリ
安政三年君歳甫テ八歳同郷中村某ノ門ニ入りテ和漢學ヲ修メテ嶄然頭角ヲ露ハシ萬延ノ頃ヒニ阿萬孫兵衛ノ門ニ入りテ劍法ヲ習ヒ後チ又鎗弓術ヲ講セリ慶應元年齡十七一朝時勢ニ感ズル所アリ醫ヲ以テ身ヲ立テント欲シ毛利某ニ從ヒテ鷹島城下ニ至リ直ニ洋醫石神良策ノ門ニ入りテ醫學ヲ修ム其意蓋シ師ハ藩兵ノ京都守衛兵隊附醫官タルヲ以テ之ニ隨行ヲ乞ハント欲スルナリ偶マ師良策京都ヨリ下國シ將ニ再ビ上都セントス君之ガ隨行ヲ請テ許サレズ強テ之ヲ請フ亦許容サレズ是ニ於テ喟然嘆シテ曰ク吾事已メリト則チ去テ又岩崎俊齋ノ門ニ入りテ醫學ヲ修ム時ニ明治元年二月師俊齋藩命ヲ帶ビテ上都シ官軍ノ負傷者ヲ治療スルニ當リ君亦跡ヲ追フテ上都シ至レバ則チ豈ニ圖ランヤ師突然鬼籍ニ入ルノ翌日ナリキ君大ニ驚キ爲ス所ヲ知ラズ偶々同藩士爲メニ之レヲ周旋シテ以テ薩

軍治療院ノ助手タラシム爾來日夜病牀間ニ服務シテ怠ルコトナシ同年六月興州白川口及磐城平ノ賊兵猖獗ヲ極ムルヲ以テ藩主島津修理大夫忠義兵ヲ率テ應援セントスルニ當リ君乃チ撰拔セラレテ戰地病院助手トナリテ隨行セリ時ニ岩城小名濱ニ假病院ヲ設ケ必要上大村藩ト合併セリ此時薩軍ノ一傷卒アリ銃丸ノ右背部ヨリ胸部ヲ貫通シテ右胸ノ皮下ニアルヲ認知スルモ藩醫ノ之ヲ摘出スルモノナク且ツ野砲ノ彈丸ニテ膝關節ノ一部ヲ射傷セラレタル一士アルモ藩醫ニシテ之ヲ處スルノ法ヲ知ルモノナシ偶々大村藩醫ノ手術ヲ乞フテ之ヲ治セリ其他藩醫ノ療スル所ノモノハ一トシテ其治療法ニ適フモノナク只多クハ創口ニ線膏ヲ貼シテ其排泄物ヲ抑止スルノミ大村藩醫之ヲ評シテ曰ク貴藩兵士ハイツレモ一騎當千人皆其勇ニ驚カザルハナシ然レドモ獨リ醫術治療法ノ區々ナルニ至ツテハ亦一驚ヲ喫セザルヲ得ズト於是君慨然誓テ藩醫ヲ雪ギ且ツ醫學ノ蘊奧ヲ極ムンコトヲ決心セリ

明治元年十一月軍平テ鹿島ニ歸リ一書ヲ父ニ送り且ツ請テ曰ク兒不肖既ニ過分ノ學資ヲ仰ギ以テ今日ニ至ル未ダ一業ノ見ルベキモノナク却テ與羽ノ戰地ニ自ラ修學ノ足ラザルヲ覺リ且大村藩醫ヨリ受タル藩辱ヲ雪ガザル可カラズ此目的ヲ達スル固ヨリ數年ノ學業ヲ積ムニ非ズンバ不可トナス自今兒薪ヲ枕トシ粥ヲ喫リ以テ大ニ爲ス所アレントス幸ニ尊慮ヲ勞スル勿レ其學資ノ如キハ兒ニ軍用金ノ餘殘尙十三兩アリ以テ學資トナスベシト既ニシテ藩設開成學校ニ入りテ蘭學數學理學等ヲ學ビ又英學ヲ修メリ同二年藩ノ英醫ウキリアムヅキリスヲ聘シテ病院及醫學校ヲ設立スルニ當リ君亦藩命ヲ六等授讀ノ職ニ受ケテ學生ヲ薰陶シ漸ク昇テ三等教官トナリ更ニ醫學校長ニ進ム同五年二月兵部省ニ召サレテ將ニ上京ノ途上ニ上ラントス或ハ之ヲ諭止スルモノアリ君確然トシテ動かズ遂ニ上京ノ途ニ就ケリ其嘗テ校ニアルヤ常ニ罪人行倒等ノ屍ヲ解剖シテ以テ學術上ノ研究ニ充テリ蓋シ其大志ハ海外ニ航シテ醫學ノ蘊奧ヲ究ムルニアレバナリ

明治八年六月海軍生徒トシテ醫學修業ノ爲メ英國留學ヲ命ゼラレテ直ニ之ニ航シ九月セントトーマス病院醫學校ニ入り精力研磨忽ニシテ等輩ヲ駕シ翌年三月ノ第一期ニハ三等賞英貨十磅及賞狀ヲ受ケ七月第一夏期ニハ二等賞英貨十磅及賞狀ヲ得十月ニ至テハ既ニ解剖教授助手ニ擧ゲラル、ノ榮ヲ得タリ此ニ於テ歐

米學士始テ君ノ凡庸ナラザルヲ知レリト云フ十年三月第二冬期一等賞英貨廿磅及賞狀ヲ得七月ノ第二夏期ニハ三等賞英貨十磅及賞狀ヲ得十一年三月ノ第三冬期ニハ二等賞英貨十磅及賞狀ヲ受ケ四月ニ至テハ外科學校ニ於テ、メンバルシツブ、ノ、ヂプロマ、ヲ受ケ六月ニハ産科實地上達ノ賞狀ヲ得七月ニハ龍動内科學校ヨリライセンシエード、ノ、ヂプロマ、ヲ受ケ以來内科當直醫ヲ勤メテ賞狀ヲ得タリ十二年春更ラニ外科當直醫ヲ務メテ亦賞狀ヲ得タリ今茲外科解剖學并實地外科ノ競争懸賞試験アリ君之レニ應シ最高點ヲ得乃チチセセルデン銀製賞解ヲ受クルノ榮ヲ得且ツ日ナラズシテ更ラニ學術優等及品行善良賞トシテ黄金製賞牌ヲ領シ尋テ産科及婦人科當直醫タリ十三年五月ニ至ツテ學業全ク成リ外科學校ニ於テフエローシズ、ノ、ヂプロマ、ヲ受領シテ歸朝ノ途ニ就ケリ

君ノ歸朝スルヤ嘗テ英國ニ於ケル醫名ノ高キニ背カズ直チニ海軍々醫中監ニ擧ケラレ東京海軍病院長ノ職ニ就キ十五年ニハ海軍々醫監ニ榮進シ十八年ニハ遂ニ醫官ノ最上位ナル海軍々醫總監ニ累進シ次テ從四位ニ叙セラル蓋シ君ガ此榮進ヲ致セル所以ノモノハ志想ノ確手タルト事ヲ爲スニ當テハツ子ニ勇爲機敏ニ

シテ大ニ常人ニ異ナル所アルヲ以テノ故ノミ斯ルガ故ニ曾テ受ケタル藩邸ヲ雪ギシノミナラズ現今醫學社會ハ牛耳ヲ執リ又内外醫務ニ衛生ニ先鞭ヲ着ケテ大ニ衆目ヲ驚カシ且ツ醫學社會ハ面目ヲ一新セシガ如キハ固ヨリ之ヲ勲績ト云ハザル可カラズ

是ヨリ先キ君ハ戊辰ノ役親シク軍中ニアツテ大ニ經驗ヲ極メリ其後チ海軍ニ仕ヘテ軍醫少監ノ官ニ進ムヤ海外留學ノ念慮ハ益々勃興シ大ニ求ムル所アリシモ當時政府ハ海外留學生ノ怠慢爲ス所少ナキヲ以テ一時之ヲ召還セントスルノ傾向アルニ苦ミ其ノ後チ君ハ官之ヲ許サレザレバ私費ヲ以テ洋行セントテ企テ公暇ヲ得テ鹿島ニ到リ之ヲ英人ウイリスニ謀ル氏大ニ之ヲ賛成シ且ツ曰予將ニ東上シテ爲メニ力ヲ盡スベシ然レドモ事成ラズンバ予ノ私費ヲ以テ之ニ貸與スベシト君乃深ク結托シテ歸京ノ途次長崎ニ泊ス遇マ鹿島縣令大山綱良長崎ニアリ君ガ洋行ノ舉アルヲ聞キ人ヲシテ謂ハシメテ曰ク君若シ海外留學成業ノ後年ヲ期シテ本縣ニ勤メバ吾レ將サニ縣費ヲ以テ洋行セシメント君謂ヘラク吾今縣費ヲ以テ成業スルモ久シク僻隅ニアルノ意ナシ然レドモ年ヲ期スレバ又憂フルニ

足ラズト乃之ヲ諾シ書ヲウイリスニ致シ且ツ縣令ノ書ヲ携ヘテ歸京シ直チニ全縣出張所ニ至リテ將ニ渡洋ノ途ニ就カントスルヤ河村少輔之ヲ聞キ旨ヲ諭シテ之ヲ止メシム君大ニ失望爲ス所ヲ知ラズ時ニ英人アンデルソン氏之ニ告ゲテ曰ク自今一二年間余ヲ助ケテ海軍醫務ニ従ハバ其素志ヲ果サシメント君乃醫務局學舎ニ教官ノ任ヲ執レリ然レドモ君ガ洋行ノ念ハ益々切ニシテ止マラント欲スルモ止ムルヲ能ハズ遂ニ當時海軍病院事務長ナル前田獻吉ヲ見テ説テ曰ク先生苟モ余ヲ以テ凡庸視セラレ事ヲ爲スニ足ラズトセバ則チ已マン然レドモ苟モ事ヲ爲スニ足ルヘシト爲サバ宜シク余ヲシテ海外ニ遊ブノ機會ヲ得セシメヨ是レ只余ノ私請ハミナラズ抑亦國家ノ爲メナリト氏直ニ諾シテ洋行ノ運ニ至ラシメタリト以テ君ノ醫學ニ熱心ナルヲ見ルベシ

君ガ建勳偉績中ノ一二ヲ掲クレバ或ハ彼ノ現今既ニ皇后陛下ノ親臨セラル、慈惠醫院ヲ起シテ以テ貧民塗炭ノ疾苦ヲ清厦玉欄ノ樂土ニ濟救シ或ハ今ノ所謂成醫會ヲ起シテ以テ民間有爲ノ同業者ヲ獎勵シ併セテ將來囑望ノ醫生ヲ成醫會講習所ニ薰陶シタルハ世人ノ敬服稱賛シテ止マザル所ナリ又或ハ海軍兵員中脚

氣病ノ爲ニ苦シム者頸踵相次テ殆ド其過半ヲ占メ漸ク死亡數ヲ増スノミナラズ且一般ニ海軍兵員ノ不健康ナルヲ嘆シ憂心苦慮終ニ非凡ノ發見滿天下ノ反對論者中ニ孤立シテ千辛萬苦ノ間ニ十有六年十月一日ヲ以テ兵食改良ノ必要ヲ親ク天皇陛下ニ直奏シ後早クモ十七年一月十五日ニ至リ海軍一般ノ兵食改良ヲ實施セルニ其後幾許ナラズシテ果シテ其効績ヲ現ハシ置ニ海軍兵員ノ健康ヲ非常ノ區域ニ進メタルノミナラズ目スル所ノ脚氣病ヲシテ廿年ニハ絶無ニ歸セシメタルガ如キ實ニ本邦醫學社會未聞ノ偉業ト謂フベク聞クガ如クンバ此兵食改良ノ舉ヲ以テ促進セル海軍兵員ノ健康ヲ其既往ニ比ベ推算スルトキハ十七年後廿二年ニ至ル迄僅ニ六ヶ年間其費用ヲ省ケルモノ金百十六萬九千余圓ノ巨額ニ當ルト云フ果シテ然ラバ君ニ贈ルニ博士ノ稱號ヲ以テセルガ如キハ素ヨリ君ヲシテ満足セシムルヲ能ハサル可ク將ニ授ケラル、ニ高貴ノ勳章ヲ以テセラルヲコソ始メテ君ガ勳德ニ酬ユルニ足ラン乎後果シテ其事アリタリ

人一タビ君ノ傳ヲ讀過セハ忽ニシテ感ニ入り忽ニシテ快ト稱シ其志操ノ鞏固ニシテ百折不撓ノ氣慨アルニ驚カザルベカラズ嗚呼後世醫ヲ以テ起ルモノ宜シク

此ハ如クナラズンバアル可カラザルナリ

醫學博士大澤謙二君

君ハ愛知縣ノ人舊豊橋藩士ナリ神職大森美濃ノ第四子ナリ幼ニシテ聰了居作成人ハ如シ人以テ奇童ト爲ス齡始テ十一吉田藩ノ侍醫大澤玉龍之ヲ聞キ養テ其子ト爲シ藩儒小野湖山ノ塾ニ入り漢學ヲ修メシム忽ニシテ等輩ヲ駕シ居ルヲ數年君父ニ請フテ上京シ醫學所ニ入テ今ノ田代基徳并ニ渡邊洪基氏等ニ就テ英語ヲ學ビ後又島村鼎石井信義等ノ教授ニ就テ解剖生理學藥物病理學ノ諸科ヲ研究セリ

君其幼名ハ右近次後ニ謙ニト改ム嘉永五年七月三日三河國寶飯郡當古村ニ生ル天資穎悟少ヨリ醫學ニ志シ維新ノ際慮ル所アリ足立寛ニ從ヒ江戸ヲ去テ遠州ニ赴キ專ラ英語ヲ修メリ此時ニ當テ王政復古シ四方俊秀ノ士爭テ帝都ニ集リ諸學浸焉トシテ興ル君乃チ奮然再ビ行ヲ裝シテ上京シ醫學所ニ入テ研究スルヲ凡ニケ年ニシテ舉ゲラレテ句讀師トナリ既ニシテ大學中得業生ニ進ム

官乃チ之ヲ拔ンデ獨乙國ニ留學セシム因テ之ニ航シ伯林醫學校ニ入テ獨逸語羅甸語數學動植理解剖比較同胎生生理學等ノ諸科目ヲ研究スルヲ僅カ四ケ年ニシテ理科試問ニ及第シカンジタート、デルメジンノ稱號ヲ受テ歸朝ノ途ニ就ケリ其歸朝スルヤ直ニ東京醫學校ニ雇ハレ尋テ二等教諭ニ進ミ幾クモナクシテ五等教授ノ任ヲ囑セラル然レトモ君ハ固ヨリ醫學ノ蘊奧ヲ窮ムルヲ以テ素志トナスガ故ニ未ダ之ヲ以テ足レリトセズ十一年二月本官ヲ辭シ更ニ自費ヲ以テ再ビ獨逸國ニ航シストラスボルグ府大學校ニ入テ生理藥劑病理解剖組織產科眼科耳科内外科精神病學裁判醫學衛生局處解剖小兒科婦人科等ノ十餘科目ヲ究メ十五年九月遂ニ醫學博士ノ學位ヲ受領シ尋テ歸朝ス

此ニ於テ官直ニ舉ゲテ大學教授ニ任シ既ニシテ正六位ニ叙シ中央衛生會ニ醫學部試業規則ニ又全得業士試問規則起草ニ其他教授法取調ニ至ルマデ皆之カ委員ニ舉ゲラレ宛モ醫學社會ニ一新學者ヲ顯出シタルノ感アラシム之ヲ以テ累進シテ醫科大學教頭トナリ又大學評議官ヲ命セラル彼ノ先年脚氣病ノ流行スルヤ君之カ審査委員長心得トナリテ盡ス所アリ遂ニ進ンテ奏任官一等トナリ廿一年醫

學博士ノ學位ヲ受領シ醫學社會ノ大家ト仰カルニ至レリ
君獨逸ニ留學スルコトニ回大ニ醫術ノ蘊奧ヲ極ム廿二年官舉テ教頭ノ重任ニ當ラ
シムルヤ君益々學徒ヲ教導シ諄々トシテ未ダ曾テ倦マズ衆生徒之ヲ景慕スト云
フ

醫學博士三宅秀君

古人云ヘルアリ醫三世ナラザレバ其藥ヲ服セズ蓋シ醫ハ元ト大業ニシテ必ズ學
カト經驗トヲ要スベキノ謂ナリ豈之ヲ我メザル可ケンヤ君ハ東京府ノ人舊金澤
藩士ナリ嘉永元年十一月十七日ヲ以テ江戸本所綠町ニ生ル父ヲ三宅良齊ト云ヒ
肥前島原ノ人ナリ佐倉侯ニ聘セラレ醫ヲ以テ業トス君幼名ヲ復一ト呼ビ少ヨリ
穎悟學ヲ好ム安政五年始テ蘭書ヲ學ビ後チ更ニ英語ヲ修メ文典究理書等ヲ傳習
シテ文久三年ヲ以テ佛國ヘ航シ翌年歸朝ス講學ヲ致遠館教授トナシ又英文翻譯
ニ從事セリ其後進チ勝導スルヤ懇切至ラサル所ナク闔藩靡然トシテ風教ニ浴ス
明治三年舉ゲラレテ大學出仕トナリ既ニシテ文部少教授ニ進ミ正七位ニ叙シ諡

テ東京醫學校長心得ヲ命セラル九年七月米國費拉特費府萬國醫學會ノ舉アルヤ
君本邦委員トシテ之ニ臨ミ大ニ醫學上改良策ノ今日ニ急務ナルヲ論ジ且ツ其學
理實驗ニ基テ之ヲ演セシカバ忽チ全會副會長ニ撰舉セラルニ至レリ是レ蓋シ
本邦學術委員ノ外國ニ於テ名譽ヲ博シタルモノ、嚆矢トナス
以來專ラ職ヲ醫學部教授ニ盡セシカバ忽チニシテ醫學社會ノ面目ヲ改メ學術器
械的ノ進歩ハ實ニ此時ニ兆セリト謂フモ過言ニ非ザルナリ是ヲ以テ十四年七月
ニハ東京大學教授兼醫學部長ニ榮進シテ正六位ニ進ミ累進シテ從五位トナリ功
ヲ以テ勳五等雙光旭日章ヲ賜ヒ又學士會員ニ舉ゲラルニ至レリ
十八年學術研究ノ爲メ私費ヲ以テ再ヒ歐州ニ留學スルヤ官殊ニ帶官ノマヽ之レ
ニ航スルヲ許シ且ツ醫學學校教育法等ノ取調ヲ囑シ手當トシテ金一千圓ヲ交付セ
ラルノ命ヲ受ケテ出發シ大ニ智驗ヲ究メテ歸ル是ヨリ專ラ醫史及裁判醫學ノ
教授ニ當リ諄々トシテ倦マズ就中醫術上ノ秘點ニ至ツテハ其發明ニ係ルモノ多
シト云フ是レヨリ先キ官制大改革アル君醫科大學教授兼醫科大學長トナリ奏任
官一等級俸ヲ賜フ尋テ大學評議官トナレリ又先年脚氣病ノ流行スル君之カ委

醫學博士三宅秀君

員長ニ擧ゲラレ又帝國大學衛生委員長タリ是ヲ以テ更ニ勳等ヲ進メテ四等トナシ旭日小綬章ヲ賜フ次テ醫學博士ヲ授ケラル

始メ君ノ大學醫學部教授ノ任ニ就クヤ自ラ請フテ其給ヲ減ゼンコトヲ以テス其謙遜推シテ知ルベシ而シテ君病理學ニ於テハ尤モ長スル所ニシテ其他内外科理化學ニ至ルマデ修メサルモノナシ故ニ其生徒ヲ教導スル秩序亂レズ學問淵源アリ常ニ人ニ語テ日本邦醫術未ダ進マズ往々外人ノ容喙ヲ免レズ嘆ズベキナリ吾輩盟テ此學ノ眞理ヲ研究シテ外人ヲ凌烈センコトヲ勉メザル可カラズト其慷慨熱心自ヲ任ズルコト如此宜ナル哉君ノ醫科大學長トナルヤ主任官當テ案ヲ拍ツテ曰ク科長其人ヲ得タリ余復タ心ヲ此ニ勞セズト以テ其爲人ヲ知ルベキナリ其所著ノ書病體剖觀示要病理各論治療通論等アリテ大ニ世ニ行ハル

醫ハ固ヨリ仁術ナリ人ノ生命ヲ委託セラレ社會ノ安寧ヲ全フスルノ重任ヲ負フノ術業ナリ彼ノ醫術的ヲ目シテ商法的利己主義ト誤解シ徒ラニ華美驕奢ヲ事トシ藥價ヲ以テ九倍主義ノ營利ヲ謀ルガ如キハ更ラニ論ズルニ足ラザルナリ嗚呼世ノ醫ヲ以テ業トスル者此傳ヲ讀マバ亦以テ少シク顧ミル所アルベシ

醫學博士池田謙齋君

身ニハ絹布ヲ纏ヒ潤袖ヲ附ケ長衣ヲ着徐々然トシテ婦女子ノ狀ヲ裝ヒ嘗テ醫術ノ繁劇ノ務ナルコトヲ知ラズ彼ノ戰場鮮血地ニ塗リ腥風衣ヲ襲フノ時ニ臨デ一朝此輩ヲノ軍陣繃帶治療等ノ業ヲ執ラシメンカ決シテ勇敢活潑ノ術ヲ旋スコト能ハザルベシ君ハ東京ノ人舊越後長岡藩士ナリ天保十二年十月廿日越後南蒲原郡西野村ニ生ル幼ヨリ慧智アリ能ク物ヲ判ス長ズルニ及デ遂ニ醫學ニ志ヲ寄ス弱冠ノ頃ヒ初テ江戸ニ遊ビ醫學ヲ修ム當時醫ヲ以テ名アル石見ノ人池田玄仲其才ヲ愛シ立テ、其養子トナス君本性ハ入澤氏此ニ於テ池田ト稱ス明治維新ノ際兵部省醫師試補ニ擧ゲラレ既ニシテ大學ニ入り又少典醫ニ進ム三年十月ニ獨逸國へ留學ノ特命ヲ以テ之ニ航シ同國專門醫學校ニ入テ螢雪碎身業大ニ進ム九年五月全校ヲ終ヘテ歸朝スルヤ直ニ陸軍々醫監トナリ又宮内文部兩省ニ兼勤シ從五位ヲ授ケラル既ニシテ三等侍醫ヲ兼子又大學醫學部總理ノ任ヲ負ヒテ學生蒸陶ニ從事セシガ處理其宜キヲ得テ大ニ人望ヲ得タリ其醫名ノ高キコト如此宜ナル哉二等侍醫ヨリ一等侍醫ヲ兼子又勳四等ヲ授ケラレ累進シテ正五位トナリ勳

等ヲ進メテ三等トナシ旭日中綬章ヲ給ヒ十九年ニ至テ遂ニ專任侍醫局長官トナ
 リ勅任官二等ニ叙セラレテ從四位ニ進ミ續テ勳二等旭日大綬章ヲ特授セラル、
 ノ恩典ヲ得次テ醫學博士トナレリ
 是レヨリ先キ君成辰ノ役官軍ニ從テ大ニ傷卒治療ニ從事シ其施術ニ因テ平癒ノ
 功ヲ奏スルモノ數ヲ知ラズ軍平デ兵部省醫師ニ舉ゲラレ爾來拮据巡勉職務ニ盡
 ス所アリ後官撰ニ依テ獨逸ニ留學シテ大ニ内外科術ノ新技ヲ極メ之ニ因テ自ラ
 發明スル所ノモノ寡カラズ故ニ歸朝スル直ニ陸軍々醫監ニ榮任セラレタリ其後
 西南ノ役起ルニ當リ君ハ專ラ麾下ニ在テ盡ス所アリ以テ出征ノ衆醫ヲシテ内顧
 ノ患ナカシメタリト云フ
 君人ト爲リ豁達ニシテ果斷アリ最モ外科術ニ長セリ故ニ其軍陣治療法ニ於テハ
 尤モ其妙ヲ得高破割割手ニ隨テ刀ヲ運ラシ萬愈ノ術立ロニナル然レドモ内科術
 ニ於テモ亦達セザルモノナク病理ノ如キハ一見以テ其原因ヲ知リ且ツ施術ヲ運
 ラス尤モ迅速ニシテ衆醫ノ耳目ヲ驚カセシ一ニシテ足ラズト云フ
 凡ソ醫タル者徒ラニ學術上ノ點ニ達スルノミナラズ亦宜シク果斷力ナクンバア

ル可カラザルナリ今人アリ頭ヲ破リ脈ヲ絶チ鮮血淋漓トシテ迸出スルニ臨ンテ
 ハ寸分一秒モ躊躇ス可ラザルナリ彼ノ藝醫者流ノ傷ヲ見テ面色ヲ變ジ針ヲ取テ
 逡巡スルガ如キニ至テハ寧ロ醫ナキニ如カザルモノアリ況ンヤ戰ニ於テヤ

醫學博士橋本綱常君

君ハ福井縣ノ人舊越前藩士ナリ幼名ヲ破魔五郎ト呼ビ后チ琢磨ト稱セリ弘化二
 年六月廿日ヲ以テ福井常盤町ニ生ル天才秀拔少ヨリ醫學ニ志シ齠齒ノ頃ヒ既ニ
 醫書素讀ニ通シ歲較々長ジテ鄉醫ニ贊ヲ執リ十一歳ノ頃ヒニハ藩侯ニ召サレテ
 表醫師トナリ七人扶持ヲ賜ヒ又除痘館皆勤ノ褒詞ヲ得テ人漸ク其少年ノ凡才ナ
 ラザルヲ知レリト云フ歳十七ノ頃ヒ請テ長崎ニ遊ビテ大ニ洋方ヲ傳習シ續テ江
 戶ニ至ル是ヨリ先キ其兄左内重龍ヲ蒙リ君亦遠慮スル所アリシカ既ニシテ免セ
 ラレ特典ヲ以テ其母へ三人口ヲ給シ且ツ其修業費トシテ更ニ三人口ヲ給與セラ
 ル、ノ恩命ヲ得尋テ元治元年長州征討ノ舉アル之ニ出張ノ命ヲ受テ盡ス所アリ
 軍平デ後チ長崎留在ノ蘭醫ボードエンニ就テ學ビ次テ與外科醫トナリテ征會ノ

役ニ從軍シ明治元年十一月ニ至テ凱旋シ藩設醫學所佐教トナリ進ンテ病院頭取トナリ賞典祿若干ヲ受ク始メ君ノ蘭學ヲ修ムルニ當リ之ヲ學ブモノハ實ニ寥々指チ屈スルニ足ラズ其遇々之レアル世人忽チ之ヲ擯斥シテ共ニ齒セザルニ至レリ然レドモ獨リ君ハ大志ヲ抱キ誓テ此小節ヲ心頭ニ懸ケズシテ益之カ講習ニ怠ラザリシカバ學業銳進大ニ蘭語ニ精通スルニ至レリト云フ

明治ノ三年軍事病院醫官ニ舉ゲラレ續テ軍醫寮七等出仕トナリ五年五月學國留學ノ命ヲ受ケテ之ニ航シ七月柏林醫科大學ニ入テ粉骨碎身次テウルツブルヒ大學ニ轉學シテ學業大ニ進ミ醫學楷梯試騷ヲ經テ之ニ及第シ外科教頭リンハルトヨリ准助手タルノ許可ヲ得爾來澳國維納府大學ニ至テ大ニ學理ヲ究メ既ニシテウルツブルヒ大學ニ歸校シテ脚氣病新説ヲ著述シテ大ニ其名ヲ博シ九年四月醫家試験ヲ經テ醫學博士ノ學位ヲ得テ再ヒ維納府大學ニ至テ之カ研究ニ從事セリ其明年普國軍醫軍制學調査ノ命ヲ受テ將ニ之ヲ了セントスルヤ遇々西南ノ急變起ルヲ聞キ急裝伊太利ヲ經テ歸朝ノ途ニ就ケリ

君ノ歸朝スルヤ直ニ陸軍々醫監ニ任ゼラレテ本病院ニ出仕シ既ニ大坂出張ヲ

命セラレ續テ長崎ニ至リ遂ニ征討軍團病院附トナリテ大ニ戰地ニ其技ヲ顯ハシ衆醫ノ耳目ヲ驚カセシト一ニシテ足ラズ後チ長崎臨時病院ニ轉セリ其間數閱月晝トナク夜トナク官軍數百ノ士官并ニ下士卒ノ負傷者治療ニ從事シ未ダ一タダモ安眠ニ就ク能ハザリシト云フ軍平テ勳四等ニ叙シ金若干ヲ賜フ其醫名ノ高キト如此是ヲ以テ凱旋ノ後チニハ東京大學醫學部教授ノ職ヲ負ヒ其他甲ニ乙ニ丁ニ苟モ醫學ニ關スルモノハ悉ク之カ委員ニ舉ゲラル、ニ至リ尋テ從五位ヲ授ケラレ又陸軍病院長タリ十七年大山陸軍卿ノ歐州ヲ巡回スル之カ隨行トナリテ大ニ智見ヲ廣メテ歸レリ次テ外國勳章ヲ受領スルト三箇ノ多キニ及ベリ曰ク伊太利國皇帝陛下ハ贈ルニコンマンデル、テルナル、デイ子テル、サンマウリシヨ、エーラツコアル勳章ヲ以テシ佛蘭西共和國政府ハオフキンエド、ロルドル、ナシナル、ドヲ、レシチアンドノール勳章ヲ贈リ埃地利國兼共牙利國皇帝陛下ハ贈ルニダスコム、トワルクライツアル、レルヘーヒス、デイーレ、フレツ、ジヨセフ勳章ヲ以テセルガ如キ其外邦ニ醫名ヲ博シタルヲ見ルベキナリ十八年功ヲ以テ勳三等旭日中綬章ヲ授ケラル此歲獨逸博士社長ベース氏ヨリ爾來君ヲウルツブルヒ、フイヂカリ、シ

エ、メチチニ、シエゲセエ、シヤフトノ名譽委員ニ撰擧スルノ旨ヲ通セリト云フ是ヲ以テ陸軍々醫總監ニ累進シテ軍醫本部長トナリ正五位ニ叙セラル又獨逸國皇帝陛下ハ贈ルニ赤鷲第二等勳章ヲ以テセラレタリ尋テ從四位トナリ又日本赤十字社監督ニ舉ゲラレ又醫學博士トナレリ

發ニ君陛下ノ勅問ニ應シテ皇室ノ養生法ヲ解キ且ツ其ノ皇子ノ養育法ヲ親シク上聞ニ達シ之ヲ學理ニ照シテ其原因ヲ明ニシ之ヲ實驗ニ徵シテ以テ自然ノ原則ヲ開陳シ誠意肺腑ヨリ出ヅ其後奏聞空シカラズ常宮殿下ノ拜診御用掛ヲ仰付ラル、ニ至レリ又總裁ニ品彰仁親王殿下ヨリ上裁ヲ經テ有功章ヲ賜與セラレタリ昨年八月勅令第百三號ニ依リテ大日本帝國憲法發布紀念章ヲ授ケラレ今年又市參事會ノ議決ニヨリ東市京養育院醫長ノ任ヲ負フニ至ル是ニ於テ君ノ醫名ハ殆ント朝野ニ匿レナク堂々タル天下ノ大醫家ヲ以テ仰カル、ニ至レリ君又醫學ニ於テハ達セザルモノナク就中最モ外科術ニ其妙ヲ得故ニ君ノ一タビ療刀ヲ奮フニ當ツテハ病者其痛ヲ感スルコトナク割破割解手ニ從テ刀ヲ運ラシ迅速神ノ如シ是レ蓋シ天性ナリ又君ノ實兄橋本左內氏ハ嘗テ勤王家ノ主唱者ニシテ遂ニ王

事ニ斃タリ今其獄中ノ作ニ曰、二十六年如夢過、願思平昔感、滋多天祥、大節當心折、土室獨吟正氣歌、ト以テ其豪挾磊落ノ氣慨ヲ知ルニ足ルベシ
洋學年表ヲ案ズルニ本邦文明ノ種ヲ播キシモノハ實ニ醫學ニアリトス今ヨリ數十年前ニ當テ蘭法醫術ノ始テ本邦ニ行ハレテヨリ以來蘭學ヲ修ムル者必ズ醫ニ非ザルハナシ斯クノ如クニシテ泰西ノ文明ヲ輸入シ遂ニ今日ノ隆盛ヲ來セシ所以ナリ

醫學博士佐藤進君

君ハ東京在籍ニシテ舊常陸ノ人ナリ弘化二年十一月廿五日茨城縣久慈郡太田町ニ生ル本姓ハ高和氏實家世々酒造ヲ以テ業トス君少ヨリ穎敏讀書ヲ好ミ嬉戲常ニ群兒ト異ナリ長ズルニ及ンデ商トナリテ其家ヲ繼グニ意ナシ其母亦之ヲ強ユ可カラザルヲ覺リ當時祇園寺ノ老僧心越禪師易ヲ能スルヲ聞キ往テ之ヲトセシム僧曰ク學業ニ就ク可ナリ醫學殊ニ宜シ後必ズ名ヲ成スコトアルベシト終ニ意ヲ決シテ舊佐倉藩醫佐藤尙中ニ托スルニ君ノ一身ヲ以テス時ニ君ノ齡十五歳ナ

醫學博士佐藤進君

リ爾來粉骨碎身日ヲ以テ夜ニ繼ギ致々トシテ怠ラズ學業銳進忽ニシテ衆弟ノ上ニ出ツ始メ尙中繼子ナク顯敏ノ子弟ヲ舉テ其家ヲ繼ガシメント欲シ竊ニ徒弟ノ秀才アル者ヲ試ム是ニ於テ君ヲ拔デハ養子トナス時ニ齡廿三ナリ是レヨリ專ラ養父ノ薰陶ヲ受ク成辰ノ役官軍與羽ニ向フ傷者頗ル多シ君總督宮ノ特命ヲ奉ジテ與羽ニ出張シ白河及三春ニ病院ヲ開キテ晝夜負傷者ノ治療ニ從事シ尋テ陸軍大病院頭取ノ命ヲ蒙リ軍平デ歸京ス賞賜若干アリ此時ニ當テ朝野擾亂ノ後ヲ受ケ學藝未ダ振ハズ殊ニ醫業ノ萎非尤モ甚シ君慨然本邦ニ在テ醫術ノ蘊奧ヲ極ルコト能ハザルヲ嘆シ遂ニ意ヲ決シテ明治二年六月自費ヲ以テ單身獨乙國ニ航シ翌年伯林大學ニ入テ醫學ヲ修ム

此ハ時ニ方リ偶々普佛大戰争ノ起ルニ會ス負傷スル者頗ル多ク戰地ヨリ日夜絶ヘズ負傷者ヲ運搬シ來ルコト夥シ君雀躍喜ンテ曰ク此ノ好機失フ可カラスト日夜病院ニ入テ諸大家ニ親炙シ治術ヲ研究シテ大ニ悟ル所アリ全シク七年遂ニ螢雪ノ苦ヲ積ミ大試験ヲ經テ全校ヲ卒業シ優等證ヲ得テ醫學士ノ稱號ヲ領ス其後亦奧國維納府ニ至リ汎ク醫學ノ大家ト交際シ蘊奧ヲ探リテ大ニ得ル所アリ偶々

父尙中大患ニ罹ルノ電報ニ接シ倉皇歸朝ス時ニ八年七月ナリ此年順天堂醫院ノ新築竣功ヲ告グ君父ヲ扶ケテ日夜内外患者ノ治療ニ從事シ傍ラ生徒ニ教授ス患者治ヲ乞フ者日ニ相踵ギ門外市ヲ爲シ終日尙診察ヲ了セサルニ至ル又醫事雜誌ヲ發行シテ大ニ新奇發明ノ治術ヲ公ニス是ニ於テ順天堂名益々高ク百里ヲ遠シトセズシテ治ヲ乞フ者四方ヨリ群リ至ル

明治十年四月直ニ陸軍々醫監ニ舉ゲラレ續テ陸軍臨時病院長トナリテ盡ス所アリ從五位ニ叙セラレ功ヲ以テ勳四等ヲ授ケラレ尋テ陸軍本病院長トナリ後チ大學醫學部講師ノ任ヲ負ヒテ大ニ後進ノ士ヲ誘導シ既ニシテ大學出仕トナリテ勅任ニ進メラレ大學醫學部第一、二醫院長ヲ兼子又陸軍々醫本部ヘモ出勤シ遂ニ正五位ニ進ミ次テ勳三等ニ叙セラレ旭日中綬章ヲ賜フ十九年三月辭職スルニ及ンデ慰勞トシテ文部省ヨリ若干金ヲ賜ヒ又醫學博士ノ學位ヲ授ケヨル

是ヨリ先キ西南ノ役起ルヤ官軍ノ負傷者頗フル多ク重傷者ノ大坂ニ集マル數千人君官命ヲ奉ジテ該地ニ臨ミ衆多ノ軍醫ヲ督シテ日夜官軍ノ負傷者ヲ治療シ數月間未ダ嘗テ手ニ醫刀ヲ捨テザリシト云フ其間新奇ハ治術ヲ行ヒテ屢々衆醫ヲ

驚、カ、セ、シ、コ、ト、一、ニ、シ、テ、足、ヲ、ズ、本、邦、外、科、醫、術、ノ、面、目、ヲ、一、新、セ、シ、ハ、實、ニ、此、時、ニ、在、リ、ト、謂、フ、モ、誣、言、ニ、非、ザ、ル、可、シ、此、年、五、月、木、戸、孝、允、病、篤、シ、官、君、ヲ、シ、テ、之、ヲ、診、セ、シ、ム、君、行、在、所、ニ、於、テ、親、シ、ク、天、顔、ニ、咫尺、シ、奉、リ、テ、詳、カ、ニ、其、病、狀、ヲ、具、上、シ、又、西、南、ノ、役、負、傷、シ、テ、大、坂、ニ、在、ル、者、ノ、狀、情、ヲ、奏、上、シ、且、併、セ、テ、囊、ニ、獨、乙、國、ニ、留、學、中、普、佛、交、戰、ノ、際、ニ、於、ケ、ル、負、傷、者、ノ、狀、況、ヲ、モ、奏、聞、ニ、達、シ、畢、テ、酒、肴、ヲ、賜、フ、君、學、ハ、內、外、諸、科、ニ、通、ジ、テ、修、メ、ザ、ル、モ、ノ、ナ、シ、然、レ、ド、モ、最、モ、外、科、術、ニ、長、ズ、ル、ハ、世、ハ、治、ク、知、ル、所、ニ、シ、テ、割、割、解、破、手、ニ、從、テ、刀、ヲ、運、ラ、シ、濟、生、ノ、術、立、ロ、ニ、成、ル、十、九、年、官、職、ヲ、解、カ、レ、テ、ヨ、リ、專、ラ、カ、テ、順、天、堂、ト、學、生、陶、治、ト、ニ、用、ヒ、其、名、殆、ン、ド、天、下、ニ、隱、レ、ナ、キ、ニ、至、レ、リ、泰、西、各、國、多、ク、ハ、醫、術、ヲ、以、テ、高、尙、ノ、學、ト、シ、容、易、ニ、人、ヲ、シ、テ、之、ヲ、修、メ、シ、メ、ズ、ト、是、レ、他、ナ、シ、學、資、ト、忍、耐、ト、勉、強、ト、才、智、ト、經、驗、ト、ハ、五、條、件、ヲ、備、フ、ル、ヲ、要、ス、レ、バ、ナ、リ、人、動、モ、ス、レ、バ、醫、學、ヲ、以、テ、賤、業、視、シ、曾、テ、其、學、ノ、高、尙、ナ、ル、コ、ト、ヲ、知、ラ、ザ、ル、者、ア、リ、豈、ニ、思、ハ、ザ、ル、ノ、甚、キ、ニ、非、ズ、ヤ、

醫學博士田口和美君

君、字、ハ、士、行、節、堂、ト、號、ス、父、ノ、名、ハ、順、庵、母、ハ、山、士、家、氏、家、世、々、醫、ヲ、以、テ、業、ト、ス、君、天、保、十、年、十、月、十、五、日、ヲ、以、テ、武、州、北、埜、玉、郡、小、之、袋、村、ノ、藤、畠、鄉、ニ、生、ル、幼、ニ、シ、テ、機、敏、年、甫、テ、十、五、江、戶、ニ、遊、ビ、佐、藤、一、齋、鹽、谷、宕、陰、諸、儒、ニ、從、ヒ、專、ラ、漢、學、ヲ、修、メ、居、ル、十、五、年、幕、醫、林、洞、海、ノ、門、ニ、入、テ、蘭、學、ヲ、學、ビ、兼、テ、醫、術、ヲ、傳、習、シ、後、チ、又、赤、澤、寬、堂、ニ、就、テ、專、ラ、歐、醫、治、療、ヲ、學、ビ、刻、苦、電、勉、業、大、ニ、進、ム、以、爲、ラ、ク、多、年、學、ブ、所、蓋、シ、紙、上、ノ、論、ノ、ミ、若、カ、ズ、之、ヲ、實、地、ニ、驗、セ、ン、ニ、ハ、ト、因、テ、自、ラ、計、ル、所、ア、ラ、ン、ト、ス、偶、々、古、河、城、主、土、井、侯、ニ、聘、セ、ラ、レ、シ、モ、就、カ、ズ、文、久、二、年、籠、テ、收、メ、テ、下、野、安、蘇、郡、佐、野、ニ、ト、居、シ、始、テ、醫、業、ヲ、開、ク、治、ヲ、乞、フ、者、日、々、相、踵、キ、名、聲、漸、ク、遠、近、ニ、傳、フ、王、政、復、古、萬、機、爰、ニ、新、ナ、リ、有、爲、ノ、士、爭、テ、東、京、ニ、應、集、シ、各、々、爲、ス、所、ア、ラ、ン、ト、ス、君、慨、然、ト、シ、テ、思、ヘ、ラ、ク、志、士、豈、碌、々、ト、シ、テ、鄙、鄉、ニ、安、居、ス、ル、ハ、秋、ナ、ラ、ン、ヤ、ト、遂、ニ、意、ヲ、決、シ、テ、コ、レ、ヲ、父、ニ、請、ヒ、托、ス、ル、ニ、其、妻、子、ヲ、以、テ、シ、明、治、二、年、正、月、單、身、上、京、大、學、東、校、及、病、院、ニ、入、リ、英、人、ウ、キ、リ、ト、ス、及、渡、邊、洪、基、桐、原、眞、節、氏、等、ニ、就、テ、化、學、解、剖、生、理、ノ、諸、科、ヲ、研、究、シ、日、以、テ、夜、ニ、繼、ギ、致、々、ト、シ、テ、倦、マ、ズ、業、忽、チ、ニ、シ、テ、進、ム、明、治、ノ、三、年、始、テ、大、學、少、句、讀、師、ニ、舉、ゲ、ラ、レ、次、テ、大、學、出、仕、ト、ナ、リ、累、進、シ、テ、二、等、教、諭、ヨ、リ、五、等、教、授、ト、ナ、

リ遂ヒニ大學教授ニ任セラレテ從六位ヲ授ケラル爾來教職ニアリテ拮据勉勵シ其名益々顯ハレ十七年ニハ位階ヲ進メテ正六位ト爲ス後チ官制ノ大改革ニ際シ更テニ醫科大學教授ニ任ジ奏任官ニ等ニ叙セラレ二十年五月自費ヲ以テ歐洲へ航スルニ當リ其留學中年俸三分ノ一ヲ給與テラル、ノ恩命ヲ受ケ尋テ醫學博士トナレリ「コレヨリ先キ君醫學諸科ヲ修ムルニ當リ其最モ意ヲ盡セシモノハ實ニ解剖學ニ在リトス然レドモ君始メ資性仁柔屍体ヲ弄シ肉ヲ舐シ筋ヲ解ク等ノコトハ甚喜バザルトコロ且ツ當時醫學尤モ幼稚ニシテ其レコレヲ修ムルモノ多クハ書圖ニ據テ之ヲ琢習シ獨リ實地解剖ニ至リテハ皆厭忌シテコレヲ爲スモノ絶テアルコトナシ蓋シ學ト術トハ常ニ參驗駢進セザレハ以テ其堂ニ到ルヲ得ズ是ニ於テ自カヲ奮起シ勉メテ剖割ヲ以テ事トシ或ハ深夜骨ヶ原ニ往テ白骨ヲ拾ヒ又ハ深林墓地ニ入テ其膽ヲ練リ爾來又意ニ介スルモノナキニ至レリト其嘗テ大學ニ在ルヤ或ハ人ノ熟睡ヲ窺テ暗夜竊ニ教塲ニ入り以テ積屍ノ間ニ座シ又或ハ深更人靜マツテ後竊ニ燭ヲ取テ之ニ臨ミ以テ其筋骨、皮肉、臟腑ノ部位ヲ精密ニ點檢シ又ハ夜更ケ体氣共ニ疲レテ往々屍ヲ枕ニシテ假寐スルコトアリ又或

ルトキハ其屍体ハ冷氣ニ襲ハレ遺然トシテ夢覺レハ燭盡キ燈滅シ暗中手ニ觸ルハモノハ只觸體ハミ此ノ如クニシテ經驗スルコト數年大ニ自得スル所アリ遂ニドクトルミユルレル并ニドクトルホフマンノ二氏ニ親炙シテ同氏等ノ推薦スル處トナリ解剖學教室ヲ整理シ且ツ之カ日課ニ供スル解剖學的標本ヲ製成シテ以テ後進ヲ教導セリ偶々解剖學校授ドクトル、デーニツツ氏ノ來聘ニ會ヒ以後益力ヲ斯ノ學ニ致シ深思耗慮組織胎生ノ二學ヨリ局處解剖學ノ蘊奧ヲ探驗シテ比較解剖學ヲ研精シ又標本製作蒐集貯藏ニ潛心盡力シテ功アリ是本邦ニ於テ解剖學標本製蒐集貯藏ノ鼻祖ニシテ爾來夙ニ起キ深更ニ寢子寸分一刻ダモ未ダ嘗テ手ニ卷ヲ捨テズ其妻亦内ニ在テ之ヲ佐ケ良人ヲシテ家事ノ憂ナカラシメシト云フ君又嘗テ人体骨格ヲ鉸鏈ス是ヲ本邦人鉸鏈ノ始トス博士ミユレル大ニ其術ノ精妙ニ感シ醫書一部ヲ寄贈ス君又命ヲ奉ジテ偶工松本喜三郎ヲ指揮シ紙塑ノ人耳ヲ製造セシム外部ヨリ内部ニ至ル細大備具毫モ遣スコトナシ又川本洲樂ヲ使役シ象牙ヲ以テ骨格ノ鉸鏈ヲ模造セシム此二品ハ曩ニ文部省ヨリ澳國維納府大博覽會ニ寄贈シ大ニ聲譽ヲ博セリ後チ獨逸ノ碩學ルードルフ、ヒルシヨ一氏君ノ解

剖學ニ精シク骨格鏡鏡等ヲ製作スルヲ聞キ自著ノツエラルバトロギー并ニ小照
 ナ寄贈シテ遠交ヲ求ム又今田東氏紙塑人工製造ヲ監察シ其功成ルニ及ンデ大學
 總理ヨリ絹帛ヲ賜フ其ノ後チ君益々力ヲ此ニ盡シ更ニ組織胎生ノ二學ヲ研究シ
 亦解剖書數十卷ヲ著セリ是ニ於テ君ノ名聲四方ニ傳播シ我解剖學者ヲ稱スルハ
 ハ必ズ君ヲ推スニ至レリ君又人肝ノ護膜腫ヨリ微毒バチルレンヲ發見シ之ヲ世
 ニ公ニセリ其生徒ヲ教導スル循々敢テ倦マズ其職ヲ醫學教務ニ奉ジテヨリ殆ン
 ド二十ヶ年尙一日ノ如ク老テ益々壯ナリ
 廿年五月又自費ヲ以テ歐洲へ遊學シ交ヲ名醫ニ求テ術ヲ外國ニ試ミント請フ許
 カル則チ獨船デ子ラルウエルテル號ニ搭シ先ツ伊國シリ、島ノメツシーナ港ニ
 着シ尋テレジヲニ到リベリンジノ鐵道線ニ沿フテナーブルニ行キ羅馬ヲ經テ
 ゲノアニ到リミュンヘンヲ着キテ伯林ニ着ス時ニ七月十七日ナリ而シテ全府ニ
 甘有餘月ノ日子ヲ送り其間自己専門學ノ研究ニ從事シ或ハウイスバーデンニ開
 キシ自然學者及ヒ醫家ノ大會ニ臨ミ或ハドレスデンプラトゲ維納ブダヘスト、ブ
 レスラウ等ノ各地ニ趣キ以テ學海ノ深淺ヲ探リテ大ニ其識見ヲ博メ次テ全府ヲ

去テクレヘルド、キヨルンボン、ハイテルベルグ、カル、スルーヘ、バーテンバーテン、
 ストラスホルク等ニ行キテ醫學社會ノ現況ヲ察シ次ニ佛國巴里ニ轉シテ止マル
 一數閱月ニシテ白耳義及和蘭ニ行キ次ニ英國倫敦ニ至ツテケンブリッジ大學ヲ觀
 覽シテ再ヒ巴里ニ歸リ尋テ歸朝ノ途ニ就ケリ
 抑モ君ノ此行タルヤ專ラ各國大學ノ學事ヲ觀察シ學門邦家ノ腦裏ヲ探リテ之ヲ
 討論講究セルニアレバ至ル處トシテ大學ニ臨マザルナク専門家ニ接セザルハナ
 シ以テ大ニ學術ノ玄微ヲ闡明セシト云フ其歸朝後嘗テ知友ニ語テ曰ク歐州凡百
 ハ事績ハ徒ニ之ヲ形貌ニ求ムベカラズシテ須ラク奧裏ヲ洞察シ交互參驗セバ翻
 然自悟スル所アルヘク醫學亦然リ蓋シ醫術微ヲ折キ精ヲ競フハ首トシテ獨逸ヲ
 推ス然レトモ管見ニ據レバ佛國醫術ノ玄ヲ鈞シ理ヲ晰カニスル亦探ルベキモノ
 少ナカラズ醫術ニ潛心スルモノ彼此兼攻シテ優ヲ取り短ヲ捨ツベシ偏守シテ一
 ヲ廢スルハ不可ナルニ似タリト以テ其卓見ヲ窺フニ足ルベシ
 君又遊西中ノ純學的ノ成績ヲ問ヘバ其編述ノ如キ左ノ數種ノ著書ヲ以テ之ヲ知
 ルヲ得ベシ現今本邦美術獎勵ノ爲メ東京彫工會々頭渡邊洪基君及會員ノ懇請ト

ニ因ツテ毎月美術應用人解剖學ノ講説ヲ爲セリ
 其著ハス所ノ書ハ解剖攬要十三卷、組織攬要三卷、顯微鏡術攬要一卷、微毒觸接傳染
 毒論一卷、同附圖一冊等アリ皆世ニ行ハル又遊西中ノ編述ニシテ獨國刊行ノ顯微
 鏡的解剖綱鑑及解剖生理學綱鑑解剖部ニ記載スル所ノモノヲ掲クレバ即日本墨
 汁ノ冷用注入論、迷走神經幹ノ稀有ナル破格及ヒ分枝論、返回神經ノ下甲狀腺動脈
 ニ於ケル位置論、喉頭局所解剖學補缺論、人頸ノ胸骨上罅裂論等ナリトス
 嗚呼君經驗アリ學識アリ且ツ醫學上ノ發明一ニシテ足ラズ遂ニ解剖學ノ大家ヲ
 以テ其名ヲ宇内ニ發揚スルニ至ル之ヲ碩學ト謂ハズシテ何ゾヤ

醫學博士小金井良精君

君ハ新潟縣ノ人舊長岡藩士ナリ父ノ名ハ儀、牧野侯ニ仕ヘテ子五人ヲ生メリ君ハ
 其次男ニシテ安政五年十二月十四日越後國古志郡長岡今朝白村ニ生ル少ヨリ慧
 悟學ヲ好ム六歳ノ頃ヒ藩立學校ニ入テ漢籍ヲ修ム時偶マ戊辰ノ役ニ際會シ絃誦
 ハ音ハ忽チ變ジテ百雷一聲ハ砲聲ト化シ書ヲ賣テ劍ヲ買フハ時勢トナリ君慨然

感ズル所アリ且家又貧學資ヲ給スルコト能ハザルヲ以テ遂ニ志ヲ決シテ上京セ
 リ時ニ明治三年三月ニシテ歳僅ニ二十ナリ然レドモ志ハ益々固ク某校ノ學僕ト
 ナリテ刻苦奮勵業大ニ進ム

明治三年十月大學南校ニ入り居ルコト一ケ年半ニシテ第一大學區醫學學校ニ轉學
 シ爾後專ラ醫學ヲ研究スルコト七ケ年ニシテ東京大學醫學部ヲ卒業シテ醫學士
 ノ稱號ヲ受ク時ニ十三年七月ナリ十月更ニ解剖學並ニ組織學修業ノ爲メ三ケ年
 間獨乙國へ留學ヲ命ゼラレテ之ニ航シ十四年一月柏林大學ニ入テ教頭ワルグイ
 ルニ就テ解剖及組織學ヲ研究シ凡ソ三ケ年ニシテ全大學ノ官仕助手ニ舉ゲラレ
 後又自費ヲ以テ一ケ年半尙其蘊奧ヲ究メ十八年六月ニ至テ歸朝ス

歸朝後直チニ文部省出仕トナリテ大學醫學部へ勤務シ次テ醫科大學教授トナリ
 テ從六位ニ叙セラレ又醫學博士トナレリ是レヨリ先キ獨乙ニ在ルトキ嘗テ網膜
 發生並ニ紅彩構造ノ二書ヲ著ハシテ之ヲ世ニ公ニセシカバ忽チ其名ヲ歐洲醫學
 社會ニ知ラルハニ至リ爾來其學ノ大家ト交通往復シテ大ニ覺ル所ロアリ遂ニ伯
 林大學ノ官仕助手ニ舉ゲラルニ至リタルハ一大名譽ト謂ハザルベカラズ現時

本邦ニ於テ純粹理學的ヨリ解剖學ヲ研究シ且組織學者ヲ以テ稱セラルハモノハ君ヲ措テ亦他ニ其人アラザルナリ彼ノ先年人類學調査ノ爲メ北海道へ出張ヲ命ゼラレタルヲ以テ知ルベキナリ

君人ト爲リ温厚篤實遂ニ學僕ヨリ起テ身ヲ立ルニ至ル其難苦想フ可キナリ彼ハ餘リアルノ學資ヲ有シテ身ハ一業一事ダモ成スコト能ハザル者ニ比セハ其差豈天壤ノミナランヤ

從來本邦學問社會ノ實況ヲ察スルニ之カ卓出ノ人材或ハ成業ノ士ハ多クハ寒苦ハ間ニ奮勵シテ忍耐力アリ且ツ智能ヲ具備スル者ニ非ザルハナク彼ノ富裕ノ家ニ生レテ少ヨリ懦弱ノ風ニ感染サレタルモノハ一トシテ事業ノ見ルベキモノナク且ツ有爲ノ士在ルコトナシ是ヲ以テ之レヲ觀レバ宴安ハ恒ニ耽毒ニシテ人ヲ誤ラシムルハ妨害タルヲ知ルベク後進ノ士謹テ之ヲ避ケサルヘカラス

醫學博士佐々木政吉君

身ハ富豪ノ家ニ生レテ餘リアルノ學資ヲ有シテ尙且其業ヲ成サヤルモノハ下ハ

尤モ下ナルモノナリ家甚ダ富マズ學資給セズ之ニ代フルニ刻苦ヲ以テシ能ク其業ヲ成シ而モ海外萬里ノ異域ニ在テ能ク學術ノ蘊奧ヲ極メテ榮名ヲ碧眼社會ニ博スル者アラバ上ノ尤トモ上ナル者ト云ハザル可カラズ我佐々木博士ハ如キ實ニ其人ナリ

君ハ安政二年十一月十一日江戸本所花町ニ生ル本性ハ中田氏家元寒苦學資ヲ給スルコト能ハズ家業學事ニ縁ナシ然レドモ君ハ少ヨリ學業ヲ好ミ尙モ閑隙アレバ常ニ文ヲ誦シ字ヲ習フテ以テ己レノ樂トナス嘗テ郷塾ニ學ビテ立口ニ群兒ヲ駕シ屢々師ノ賞ヲ受ク其父亦タ其家業ノ強ユベカラザルヲ覺リ當時ノ名醫佐々木東洋先生ニ托スルニ君ノ一身ヲ以テス爾來粉骨粹身日以テ夜ニ繼ギ致々トシテ怠ラズ忽チニシテ衆徒ノ上ニ出ツ師モ亦大ニ之ニ望ミヲ屬シ切々トシテ之ニ鍼戒ヲ加フ業大ニ進ム師是ニ於テ立テ、養子トナス

明治ノ四年始メテ東京醫學部ニ入テ醫學ヲ研究スルコト凡ソ七ケ年ニシテ其業ヲ終ヘ十一年三月ニ至テ大學醫部卒業大試験ニ及第シテ醫學士ノ學位ヲ受ク其間試業アル毎ニ常ニ優等點ヲ得テ階級ノ第一席ヲ占ム儕輩以テ及バストナシ之ヲ

嘆稱セシト云フ然レモ君ハ尙醫術ノ深理ヲ探ラント欲シ其明年自費ヲ以テ獨乙國ニ航シ全國伯林大學ニ入りテ醫術ノ蘊奧ヲ研究シ就中尤モ病理學ノ攻究ニ其志ヲ傾ケテ難問攻究具サニ螢雪ノ苦ヲ嘗メテ學業特進遂ニ大學助手ニ舉ゲラレ後チ又研究生トナリテ大ニ醫術上ノ玄微ヲ極メ終ニ病理學上ニ就キ一ノ新發明ヲ爲シテ之ヲ公ニセシカバ汎ク歐洲醫學社會ニ其名ヲ博スルニ至リ爾來全府ハ碩學大家往々君ノ居ヲ叩キテ病理ノ攻究ヲ共ニスルニ至レリ又嘗テ醫學大家ハ席ニ招レテ一場ノ演說ヲ爲シ滿場ノ大喝采ヲ得シト云フ居ルヲ五年學成リ業終ヘテ歸朝スルニ當リ直ニ大學ニ聘セラレテ講師トナリ次テ醫科大學教授トナリテ委任官三等ニ任ジ從六位ニ叙セラル是レヨリ先キ脚氣病審査委員トナリ又醫術開業試驗委員トナリ又大學紀要編纂委員トナリテ大ニ公務ニ盡ス所アリ尋テ醫學博士ノ學位ヲ授ケラル君最モ内科ニ長スルハ世人ノ汎ク知ル所ニシテ我々大學出身醫學士中病理學ヲ稱スルトキハ必ズ君ヲ推スト蓋シ君曩キニ伯府ニ於テ本邦學術ノ光彩ヲ赤兒社會醫術ノ競争場裡ニ輝カシタルヲ以テ之ヲ知ルベキナリ

君人ト爲リ温順恭謙ニシテ毫モ挾ム所ナシ其人ニ應スル慇懃到ラザル所ナク彼ノ病者ヲ遇スルガ如キハ尤モ切實ヲ以テシ之ヲ學術的ニ照シテ其病困ヲ原子之ヲ實驗的ニ徵シテ以テ其術ヲ施ス又官餘父ヲ助ケテ日々其私立ノ病院ニ臨ミ常ニ數百人ノ患者ヲシテ之ニ寄宿セシム現ニ曩ニ醫術ヲ以テ天下ニ其名ヲ轟カシタル東洋先生親ラ之カ監督ノ任ニ當レリト云フ

醫學博士緒方正規君

君ハ熊本縣ノ人舊細川藩士ナリ通稱ハ源喜嘉永六年十一月五日肥後國八代郡種山郷川俣村ニ生ル父ノ名ハ玄春醫ヲ業トナシ母ヲ増ト呼ブ君資性敏達少ヨリ學ヲ好ム六歳ノ頃ヒ習字ヲ始メ漢籍ヲ受ケ後チ藩立學校ニ入舍シテ和漢學ヲ修メ稀ニ歸省スルコトアルモ母ハ永ク家ニ留ルヲ快トセズ速ニ學校ニ行カシメ以テ之ヲ律ス君出京ノ後チ母ハ病ニ罹リ危篤ナルニ及ンデ姉妹ハ之ヲシテ歸國セシメント告ゲシニ母眉ヲ縮メテ曰ク彼レ一旦志ヲ立テ帝都ニ學ブ中途ニシテ歸ル何ハ益アラシヤト遂ニ之ヲ肯セズ業成ラサレバ必ズ之ヲ報ズル勿レト遺言セ

リト君年漸ク長シテ醫學ニ志ス
 明治ノ三年十月熊本縣學校ニ入り蘭學并醫學ヲ修メテ始テ醫學ノ獨逸ニ如カザ
 ルヲ悟リ尋テ校ヲ退キ箴ヲ修メテ出京シテ獨逸學ヲ修メ五年三月大學南校獨逸
 部ニ入り九月更ニ大學東校ニ轉シ切瑳琢磨七ケ年醫學ヲ修メテ全課ヲ卒業シ尋
 テ傳染病調査掛トナリテ官務ニ盡ス所アリ十三年四月東京大學醫學部卒業大試
 驗ニ及第シテ醫學士ノ學位ヲ受ケ五月大學雇トナリテ醫院ニ在勤シ十月遂ニ官
 選ヲ以テ滿三ケ年間生理衛生ニ學修業ノ爲メ獨逸國ヘ貸費留學ノ命ヲ受ケテ之
 ニ航シ全園ライチヒ大學ニ入テ生理學博士ルードワイヒ氏并ニ衛生學博士ホフ
 マン氏ニ就キニ學ヲ修メ胃中ニ於ケル中性脂肪ノ變化腸中ニ於ケル食物ノ消化
 并ニ脾臟腺細胞新生等ニ就テ實驗ヲ遂ケ其成績ヲ世ニ公ニシ該地ニ在ルコト二ケ
 年三ヶ月ニ後全國シユンヘン大學ニ轉シ衛生學博士ベツテンコーフェル氏并
 ニ生理學博士フナイト氏ニ就キ亞硫酸瓦斯ノ人體ニ有害ナル實驗ヲ爲シ其成績
 ナ公ニシ此ニ留ルコト五ヶ月ニシテ後全國伯林府衛生局ニ在學スルコト五ヶ月ニシ
 テ留學期已ニ滿テリ然レトモ內務省ヨリ尙一ケ年學資ヲ給與セラレ再ヒシユン

ヘン府ニ赴キ十七年二月遂ニ大學助手ニ舉ゲラレアルコト類ノ胃中消化ニ及
 ボス作用ヲ研究シ其成績ヲ世ニ公ニシ尋テ十七年十二月歸朝ス

歸朝ノ後大學醫學部講師ノ任ヲ負ヒ又內務省ヘモ兼務セリ次テ醫科大學教授ト
 ナリ又帝國大學衛生委員及中央衛生會委員トナリ廿一年六月醫學博士トナレリ
 是レヨリ先キ君獨逸ニ留學スルコト四年大ニ生理衛生ノニ學ヲ究メ其實驗ヲ公ニ
 スル五回遂ニ大學助手タルノ名譽ヲ得タリ蓋シ泰西ノ助手ハ本邦ノ所謂助手ト
 ハ大ニ異ニシテ專ラ學理ヲ研究シ實地ヲ講ズルヲ以テ目的トシ又苟モ助手ノ講
 堂ニ登テ講義ヲ爲スアレバ博士モ大博士モ之ヲ傍聽セルガ故ニ又名譽研究生ノ
 稱アリト云フ

君又多年脚氣病源ノ研究ニ從事セシガ遂ニ、囊ニ脚氣バチルレンヲ發見シ續テ鷄
 虎列刺バクテリア炭酸瓦斯ノ病的バクテリアニ及ボス作用蕁菜コムマバチルレ
 ン、テタヌス、ノコムマバチルレンノ婦人毛髮ニ寄生スル糸狀黴菌ノ發見等アリ且
 ツ君ノ示導ニ據リテ研究シタル成績ヲ世ニ公ニシタルモノ枚舉ニ暇アラズト云
 フ今ヤ我大學卒業ノ諸學士漸ク其數ヲ増シテ遂ニ今日學術上ハ一大進歩ヲ來ス

ハ時運ニ向ヘリ、豈ニ亦賀ス可キニ非ズヤ

醫學博士實吉安純君

君ハ鹿兒島ノ人嘉永元年二月阿多郡伊作村ニ至ル其先ハ藤原氏天正年間ヨリ累世島津家ニ仕フ父舊名半之丞今安福ト稱シ齡巳ニ古稀ヲ越ヘ猶ホ家ニ在リ母ハ藩醫師田部柳庵ノ妹ニシテ泰子ト稱ス君ノ在英中病ニ罹リテ歿ス一兄三弟アリ兄ハ戊辰ノ役國事ニ奔走シテ銃創ヲ負ヒ閑地ニ歸臥ス弟ハ嘗テ神官ニ任シテ權少教正ニ補セラル次ハ教員又弟ハ理學士ニシテ益美ト稱シ現ニ山口高等中學校教授タリ

君ノ父夙ニ文武ニ志篤ク最漢籍ニ通シ帷ヲ垂レテ群生ヲ薰陶ス當時鄉黨ノ士相踵テ贊テ其門ニ執リ甚タ盛名アリ君幼ヨリ讀書ノ傍ニ在リテ其訓導ヲ受ク次子タルヲ以テ他家ヲ繼カシメント欲セシモ君父母ノ意ニ從ハス自ラ一家ヲ興サンコトヲ希望セリ年甫メテ十四田部氏ニ就テ醫學ヲ見習ヒ年十六ニシテ鹿島藩醫池上祥齋ノ門ニ入り居ルコト二年偶輩殺ノ下物情慄然藩士ノ上都スル者甚タ多

ク君亦其機ニ乘シ守衛方トナリテ京都ノ藩邸ニ在勤ス時ニ年十八野津鎮雄大久保利通ノ知遇ヲ得期滿ツルニ及ヒ藩費ヲ以テ典醫高階丹後守ノ門ニ入塾ス后歸國シ再ヒ軍隊醫師トナリ慶應三年京都ニ來ル恰モ世論沸々ノ時ニシテ終ニ戊辰ノ役トナリ命ヲ受ケテ東寺ニ屯在シ鳥羽伏見ノ負傷者ヲ診查ス尋テ北越ニ從軍シ軍功祿ヲ受ク

君軍ニ從テ負傷者ヲ治療スルヤ漢方ニ依リ銃創ニ膏藥ヲ貼シ又煎藥ヲ投セリ北越ノ役況ク他藩ノ醫師ト相交リ啓發スル所少カラス乃銃創ヲ洗滌シ茅根蒲公英ノ如キ内服劑ヲ與ヘ以テ洋方ニ擬セリ一日越前山本宗立等ト相語テ曰ク亂平定ノ后共ニ佐藤尙中ノ門ニ遊ハント是レ蓋シ君ノ洋醫ニ志スノ濫觴トス亂既ニ平寧ニ至リ歸國ス幾干モナク川村純義ノ撰拔ニ依リ明治二年三月藩費醫學修業ノ爲メ上京ス此時ニ當リ薩州軍隊函館出師應援ノ途ニアリシヲ以テ西鄉隆盛ニ乞ヒ其軍ニ從フ既ニ平定セルヲ見テ直チニ歸京シテ佐倉ニ至リ佐藤尙中ノ門ニ入ル全年十二月師ニ從テ上京シ大學東校ニ入り修業殆ントニケ年餘物理化學解剖學三科ノ大試験ニ應シ各科最高點ヲ得テ首位ヲ占ム同學二百餘名相顧ミテ呆然

タリ佐藤氏亦記憶ニ富メルヲ愛シ大ニ其名譽ヲ賞讃セリト云フ
 明治四年獨乙人ミシレルホフマンニ氏來朝ス即學制ヲ改メ英學ヲ廢スルニ當リ
 同學皆獨乙學ニ轉ス君先キニ英學ヲ脩メ歐州文學ノ隆盛ヲ窺フヤ渡航以テ醫學
 ノ淵源ヲ究メンコトヲ期ス以爲ラク我願フ所醫學ニ在リ今ヤ英學ヲ捨テ、更ニ
 獨乙學ニ從フ醫學ノ進歩ヲ遲緩ナラシメ又留學ノ機一步ヲ晚ル得喪果シテ如何
 學若カス海軍ニ從事シ以テ洋行ノ時機ヲ待タンニハト斷然校ヲ辭シテ海軍ニ出
 身ス兵部省十三等出仕トナリ海軍病院勤務ヲ命セラル五年五月十二等出仕トナ
 リ十月海軍々醫副ニ任セラル六年海軍兵學寮出仕トナリ七年三月海軍中軍醫ニ
 任シ樺太千島等ニ航行ス后學舎長トナリ次テ從七位ニ叙セラル九年六月朝鮮國
 修信使歸國ニ際シ外務省ヨリ送船乘組ヲ命セラレ釜山浦ニ航ス當時朝鮮國王ヨ
 リ人參其他數品ヲ賜ハル歸朝シテ海軍大軍醫ニ任シ正七位ニ叙セラル十年西南
 ノ役軍團附ヲ命セラレ福岡ニ出張ス此レヨリ九州各地ノ軍團病院ニ轉シ九月鹿
 兒嶋ヨリ凱旋シテ歸京ス尋テ十一年六月海軍少醫監ニ任シ勳五等ニ叙セラル終
 身年金百圓ヲ賜フ

君海軍ニ從事スルヲ數閱年官命ヲ以テ各地ニ轉勤シ居所一定セサリシト雖漸
 ク中央ノ醫務ニ服スルニ及ンテ英醫アデルソン來朝シ軍醫生徒ヲ教授ス君乃
 入テ教官トナリ學舎長トナリ通辯官トナリ氏ニ親炙シ生徒ト俱ニ定期ノ試問ニ
 應シ嘗テ一回ダモ對策ニ怠リシコトナシト明治十年九州ヨリ歸京シ續テアンデ
 ルソンヲ補助ス此時ニ當リ學生漸ク語學ニ習熟シテ復通辯ヲ要セサルヲ知リ玆
 ニ於テ戶塚軍醫總監事務長前田獻吉ニ謀リ終ニ海軍卿河村純義ノ命ヲ得テ英國
 ニ留學ス十二年九月龍動府神聖トーマス病院醫學科ニ入り醫學本科ヲ修メ英國
 外科醫前期試験及龍動內科醫前期試験ニ及第シ十四年ヨリ十五年マテ實地解剖
 學助教ヲ勤メ名譽賞狀ヲ得第三冬學期第一等褒資英貨二十磅并ニ名譽賞狀ヲ得
 十五年五月英國高等外科醫前期試験ニ及第シ十六年一月英國外科后期試験ニ應
 シテ外科醫免狀ヲ得同年四月龍動內科醫試験ニ及第シテ內科醫免狀ヲ得全國開
 業醫籍ニ登録セラル十二月ヨリ歐州大陸諸國ヲ巡見シテ十七年五月歸英シ六月
 內科助手ヲ勤メ名譽賞狀ヲ受ク又外科助手トナリテ名譽賞狀ヲ得十八年六月英
 國高等外科醫后期試験ニ應シテ高等外科醫ノ稱號ヲ受ケ全年九月ニ至リテ歸朝

ス
君ノ歸朝スルヤ海軍軍醫大監ニ任シ海軍々醫學校教官ニ補セラレ尋テ正六位ニ叙セラル明治十九年虎刺拉病流行シ府下ノ生靈日ニ死スルモノ數千百人益猖獗ヲ極ムルニ際シ東京府知事ノ依囑ヲ受ケテ避病院長トナリ監督到ラサル所ナカリシト全年警察醫長ヲ兼任ス又皇后陛下ノ御沙汰ニ因リ東京慈惠病院次長ヲ命セラレテ入院患者ノ半ハヲ擔當シ屢大手術ヲ實行シ卵巢切開術ノ如キ十回以上ニ及ヒ其成績善良ニシテ當時ノ成醫會月報ニ掲載シ頗ル醫學研究ノ好資料トナルモノアリ又全會ニ於テ實驗說ヲ演說シ以テ大ニ醫道ヲ補益セリ二十二年三月東京始審裁判所醫務囑托ヲ受ク后海軍々醫學校々長ニ補セラル君十九年以來中央衛生會委員トナリ醫學上并ニ公衆衛生上ニ盡力シ又日本藥局方取調委員トナリ二十五年一月一日ヨリ實行シタル改正藥局方所裁ノ藥品中君ノ考案ニ係ルモノ少カラス今ヤ從四位勳四等ニ叙セラレ醫學博士ノ學位ヲ受ク二十五年八月終ニ海軍々醫總監ノ榮職ニ就ケリ
初ノ君ノ學ニ從フヤ學資豐裕ナラサリシモ又缺乏シテ爲メニ研究ヲ杜絶スルニ

至ラス嘗テ同窓ノ知己ニ借財セシコトヲ知ラスト其師事セシ所頗ル多シ然レモ一回ノ譴責ヲ受ケス毎ニ其愛重スル所トナル人苟クモ學業大成ノ目的ヲ達セント欲セハ宜シク堅忍不拔ノ志操ニ次クニ亦練磨ノ機會ヲ得サル可カラス茲ニ君ノ學歷ニ從ヘハ文久元年ヨリ明治十八年ニ至リ恰モ十五年ノ久シキ世態幾變遷千艱萬難ニ際會シテ猶能ク一轍ノ針路ニ直行シ以テ志望ヲ達セシ所以ノモノ豈ニ堅心不撓ノ致ス所ニアラサルナキヲ知ランヤ

醫學博士 樫村清徳君

君ハ舊米澤藩士ニシテ夙ニ藩學興讓館ニ學ブ興讓館ハ碩儒平州先生ノ創設スル所ニシテ規模洪大學制嚴肅子弟ヲ率ユルニ科第進級ノ法アリ年齡ニ應シテ一定ノ書ヲ課シ八才ニシテ孝經中庸十歳ニシテ孟子全部ヲ讀マシメ其逸ヲ撰ヒ秀ヲ賞ス名ケテ秀逸ト云フ而シテ此撰拔ニ當ルモノハ八百子弟ヲ通シテ僅ニ七八十人ニ超ユルコトナキヲ例トス現ニ舊藩士ニシテ社會ニ頭角ヲ顯ハセルモノ概子當時ノ秀逸ナラサルハナシ君實ニ其一人ナリ君ノ學ニ就クヤ每試必ス秀逸時ニ

父清秀多病三十二才ヲ以テ隱居シ家ヲ君ニ讓ル君年甫メテ十二歳家采薪ノ慮アリシヲ以テ修學ヲ專ニスル能ハス十三歳以來秀逸録中ニ其名ヲ欠クニ至レリ然レトモ君ノ今日アルヲ致ス所以資性穎悟堅忍不拔ハ質ニ富ムト家庭教育ノ素アルハミナラス興讓館ハ巍峨トシテ君ノ門前ニ蜂フルモ家計ノ許サハルアリテ之レニ入ル能ハサリシモノ却テ之レカ困タラスンハアラサルナリ

君嘉永元年十一月ヲ以テ生ル五才ニシテ母ヲ喪ヒ祖母ノ手ニ長ス祖母頗ル烈ニシテ常ニ世間孫兒ヲ待ツノ痴愚ヲ厭ヒ且ツ曰ク祖母撫育三錢減價ノ俚言豈ニ誠メサル可ケンヤト故ニ君聖堂ニ入ルニ及ヒ課外ノ遊戯ハ其爲ス所ニ放任スト雖凡苟クモ學事ニ怠ルノ狀アル片ハ譴責些モ假借スル所ナク紀律ノ嚴肅ナル殆ト涙ナキカ如シ君今尙能ク遊フコトヲ好ムモ又能ク業ニ勉ムルモノ習性ト成リシモノカ常ニ新貝片山丸山江口小田切甘粕藁科等ノ藩儒ニ就テ文ヲ學ヒ訓練實識シテ間寢食ヲ怠ルニ至レリ之レヲ以テ一般ノ課書概子涉獵セサルナシ既ニシテ齡十七歳時世ノ變遷ニ感發スル所アリ慨然奮起シテ以爲ラク今ヤ丈夫タルモノ僻地ニ踟躕シテ章句ニ區々タルノ時ニアラス須ラク大都ニ遊ヒ機運ニ適スル

學科ヲ講シ國家ニ盡サ、ルヘカラスト孤劍飄然江戸ニ出テ幕府立ル所ノ醫學所ニ入り專ラ英學ニ從事シ前ノ駐澳全權公使渡邊洪基今ノ軍醫監足立寛等ニ師事シ又今ノ陸軍々醫總監石黒忠憲ニ兄事ス氏頗ル君ヲ友愛セリト云フ

維時恰モ幕府革命ノ前年ニシテ幕政衰頽ニ瀕シ國家頻リニ多事諸藩ノ學生漸次退學シテ歸途ニ上リ先輩遂ニ在學スルナキニ至レリ既ニシテ幕府朝敵ノ名ヲ得官軍東下ノ命降り人心恟々滿都騷亂君亦此世渦中ニ在リテ滯學スル能ハサルモ毫モ沮喪スルナク辛苦經營更ニ大ニ爲ス所アランコトヲ期シ遂ニ石黒氏ニ從ヒ歸國シテ一篇ノ建議ヲ草シ之レヲ藩主ニ上テ曰ク今ヤ幕府ノ霸業澆季衰運ニ傾クモノ決シテ一朝一夕ノ故ニアラス王政ノ故ニ復スル恰モ旭日ノ晨スルカ如シ滔々タル世潮豈ニ吾一二藩ノ能ク支フル所ナランヤ須ラク大義名分ヲ明ニシ藩政ヲ一變シ千歳不雪ノ汚名ヲ青史ニ存セシメス藩祖ヲシテ祠ラサルノ鬼トナスコトナク寧ロ大活眼ヲ開キ時機ノ如何ヲ察シ頑論ヲ排擊シ翻テ維新ノ偉業ヲ翼賛シ他藩ニ先タチ海外ニ留學生ヲ派シ小ハ藩命ヲ發揚シ大ハ國家ニ盡スノ遠謀ヲ企圖スルニ若カス臣卑賤微弱ト雖凡請フ謹ンテ其任ヲ忝フセント言半バ達ス

ルニ及ンテ阻障アリテ止ム茲ニ於テ復學友曾根俊虎ト謀リ越後ニ赴キ高僧某ニ就キ洋行ノ資ヲ得事成ラントス偶官兵四隣ニ起ルニ際シ再ヒ齟齬シ竟ニ時機ヲ待ツニ若カサルヲ知リ歸國ノ途ニ上ル國境要塞ノ兵僅カニ百人許君以爲ラク維新固ヨリ期スル所ナルモ官兵勇猛勝ニ乘シテ藩地ニ入ルニ至ラハ一朝ニシテ蹂躪セラレ慘况又言フ可ラサラン其總督井田某ニ説テ曰ク沿道官軍充塞シ殊ニ北越松ヶ崎ヨリ上陸スル官兵其幾千萬ナルヲ知ラス之レヲ望ムニ山河皆錦旗須ラク急ニ之レヲ藩ニ報シ近境土着ノ兵ヲ募リ兵數ヲ倍シ以テ國境ニ備ヘサルヘカラスト總督亦以テ然リトシ君ニ軍符ヲ交付シ飛輿ヲ命シ咄嗟米澤ニ到リ急ヲ報セシム依テ直チニ土着兵ヲ出スコトヲ得米澤爰ニ全キコトヲ得タリ

是ヨリ先キ渡邊洪基松本貞順ニ從ヒ幕府脱兵ニ加ハリ會津若松城ニ在リ東北諸藩一定スルニ及ンテ二氏遁レテ函館ニ赴クノ途米澤ヲ過ク君渡邊氏ト舊識ナルヲ以テ曾根俊虎ト相謀リ氏ヲ留メテ英學ヲ學ハント欲シ乃之レヲ説キ尋テ富裕ノ名アル醫師高橋玄勝ニ就キ資ヲ出サシメ藩學中ニ英學ノ一科ヲ設ケ卒先シテ青年子弟ト共ニ英書ヲ渡邊氏ニ學ブ君先キニ遊學シテ諸氏ニ一步ヲ先ンシ且ツ

學ニ敏ナルヲ以テ每試業必ス優等ヲ得同校子弟ノ推ス所タリ已ニシテ渡邊氏故アリテ東京ニ歸ルニ及ンテ君モ亦隨從セント欲セシモ校長高橋氏諭シテ曰ク君優等固ヨリ先發ノ理アリ然レモ今渡邊氏校ヲ去リ君亦共ニ出京セハ學制一朝ニ頽衰スヘシ須ラク良師ヲ得ルノ間留リテ後進子弟ヲ導ク君ノ盡ス可キ義務タル可シト事情止ム能ハス意ヲ決シテ藩ニ留マリ校務ニ從事スル數月學事頗ル觀ル可キモノアルニ至レリ然レモ負笈ノ念一日モ止ム能ハス明治二年七月校長ニ迫リテ校ヲ去リ友人有壁精一ト相携ヘ江戸ニ來ル

君ノ郷關ヲ出ツルヤ校長ノ許ヲ得ス且藩命ヲ俟タサルノ故ヲ以テ學資ノ出處ナク顧ミテ家計ヲ算スルニ曾テ擔石ノ儲ナシ僅ニ祖母貯フ所ノ金ニ拾圓ト古金銀貨十六圓ヲ得祖父ノ傳フル栗山華山文鼎等ヨリ贈ル所ノ書畫及自ラ愛藏セル英字典大ウエブストル一冊ヲ高橋某ニ典シテ金五圓ヲ得以テ旅費トナス行李漸ク整ヒ友人ヲ會シテ通夜連飲歡ヲ盡シ味旦月ニ歩シテ程ニ上ル晝夜兼行旬餘日漸ク京ニ入り麻布藩邸ニ投セリ此時ニ當リ三田慶應義塾極メテ旺盛ナルニ心醉シ矢テ入學ヲ期望セシモ藩費給セス薄資又支フ可カラス日夜懊惱一日出遊シテ石

黒氏ニ途上ニ邂逅ス氏元ヨリ友愛ニ厚ク大學東校ノ以テ學フヘキヲ語り且ツ紹介ノ勞ヲ取リシヲ以テ君初メテ就學ノ方向ヲ定ム實ニ明治二年八月ナリ已ニシテ其校ニ在ルヤ孜々勉學頗ル急進シ二ヶ月ノ后試業ヲ經テ直チニ句讀師ヲ命セラレ若干ノ給ヲ得ルニ至レリ此レ君ノ學資ヲ要セスシテ勉學ハ緒ヲ開キ初一念ハ大ニ成ラントスル階段ニシテ今日隆盛ナル登龍門ナリシト謂フ可シ爾來同僚先輩ヲ補翼シ名望俄ニ噴々三年十月大學中得業ニ任シ同年五月大學大得業生兼少舎長トナリ八月文部權中助教監事事務ニ任シ文部省十一等出仕トナリ五年三月更ニ文部省少助教ニ任シ尋テ八等出仕トナリ七年十月總監事兼勤ヲ命セラル全月宮内省御用掛ニ兼勤シ十二月五等教授ニ任シ八年六月文部省七等出仕ニ補セラル九年三月東京大學雇ニ任シ尋テ東京醫學校東京大學醫學部五等教授囑托セラル又脚氣病院委員全病院審査官ヲ命セラレ十二年十月醫院內科部長タリ十四年大學教授トナリ從六位ニ叙セラル

君ノ官ニ在ルヤ身ヲ犧牲ニ供シテ國家ニ盡力シ事蹟大ニ觀ル可キモノアリ其洋行ニ於ケル數回之レヲ思フテ數回成ラス明治四年行既ニ期シ故アリテ止ム此時

ニ當リ京都府知事榎村正直厚給ヲ以テ君ヲ聘シ且二年ノ后洋行セシメンコトヲ欸通セシモ校內事情アリテ復之レヲ止ム已ニシテ大學東校學制ヲ改メ獨逸教師忽布滿ヲ招聘ス君擢テ、之レカ附屬トナリ通辨トナリ其語ノ通セス事ノ究スルニ中リテハ竊ニ忽氏ノ使婢ニ習フ然レモ君嘗テ醫タルヲ願ハス而シテ東校ニ入り忽氏ニ屬スルニ至レルモ只資ノ給セサルニ由レリ其志常ニ普通學ニ在リシヲ以テ其帶フル所專ラ俗務ニノミ任セリ漸クニシテ君反省スル所アリ明治八年ノ頃ヨリ初メテ醫學ヲ研究シ殊ニ內科實地ニ熱心シ大ヒニ其蘊奧秘術ヲ極ム此ニ於テカ一躍シテ醫科大學教授トナル幾千モナク同志ト相謀リ當時ノ校長長與專齋ニ稟議シ九年初メテ別課醫學科ヲ置キ廣ク生徒ヲ募リ自ラ內科實地ニ任シ臨床講義ノ筈ヲ開ケリ諸生其丁寧懇勸ヲ德トシ大ニ衆望ヲ得タリ二十一年ノ頃之レヲ廢スルニ至ルマテ畧一千有餘名ノ實地醫士ヲ養成シ現ニ實地醫士トシテ世間ニ稱セラル、モノ多ク此別課生ニ出テタルハ君與リテ力アリト謂フ可シ

明治十七年君頗ル健康ニシテ壯圖勃焉時ニ大學モ亦漸ク後任者輩出セシヲ以テ多年ノ宿志ヲ遂ケント欲シ自費洋行ヲ以テ非職ヲ乞フ官其勳勞ノ偉大ナルト年

來其機ヲ失セシメタル故カ其志ヲ容レ殊ニ帶官ヲ許セリ之レヨリ諸教授中帶官
 洋行スルモノ簇々絶ヘサルモノ蓋シ君ヲ以テ其嚆矢トス在留一年餘十八年冬歸
 朝シ將サニ大ニ大學ニ盡スアラントス時恰モ改革ノ舉アリ論スル所協ハス即以
 爲ラク別ニ見ル所ヲ以テ國家ニ盡ス必スシモ朝野ヲ論セスト急ニ非職ヲ請ヒ家
 居專ラ有益ノ書ヲ著譯シ國家ニ答ントス時ニ一畏友君ヲ懇懇シテ曰ク有用ノ書
 固ヨリ世道ヲ裨益スル尠少ナラサルヘキモ曷ソ直接ニ起死回生ノ術ニ當リ國民
 元氣ヲ補益スルノ勝レルニ若カサランヤト君ノ門人安藤一郎又勸告シテ曰ク師
 遠征ノ后百事ヲ處理シ門巷ヲ掃フテ鶴首延領セル蓋シ今日ニ期スル所アレハナ
 リ如カス此機ニ乘シ一大病院ヲ設立シ輿望衆見ニ從ハンニハト此ニ於テカ君モ
 亦決スル所アリ憤然資ヲ傾ケテ病院ヲ設立シ經始數月ニシテ竣功ス實ニ十九年
 十月ナリ爾來内外患者蟻集シテ治ヲ請フモノ陸續絶ヘス一日百名ニ降ルコトナ
 キニ至ル今ノ山竜堂病院卽是ナリ君年齡未タ五十ニ充タス將來ニ期スル所豈ニ
 此ニ止ルモノナランヤ其野ニ在リテ博士ノ學位ヲ受ク偶然ナラサルヲ知ルニ足
 ラン

君醫學ニ志シテヨリ以來僅ニ數年其纂譯スル所ノ書ニ乏シカラス新纂藥物學一
 般療法内科病論日本藥局方隨伴其他内外新聞ニ公ニセシ所ノ論文ニシテ其重モ
 ナルモノハ舉手呼吸運動胸膿洗滌療法及新製穿胸器竹製脊椎矯正器商陸越幾私
 ノ効用吃逆療法等はナリ尙他年得意トスル所ノ内科實地醫書ヲ著スニ志アリト
 其舉ノ一日モ早カラシコトヲ刮目シテ俟タンノミ
 君人ト爲リ淡泊瀟灑ニシテ小節ニ係ラス果敢勇往志氣剛直人ト交ルニ邊幅ヲ修
 ノス身キニ倣ラス尊キニ阿ラス人ニ依頼スルコトナク特立特行分ニ應シ儉ヲ守
 リ幼ヨリ金錢貸借ヲ好マス事ニ當リ倦ムコトナク必ラスヤ其効ヲ見サレハ止マ
 ス一遊戯ノ末技ト雖モ亦然リ又能ク酒ヲ嗜ム其醉ニ方リテヤ豁然春ノ如ク陶然
 仙ノ如キモ間鋒芒アリ見テ奸曲トナスモノヲ刺スコトアリ自ヲ守ルノ嚴正ナル
 理ニ於テ得ヘカラサレハ一介モ人ニ受ケズ名ニ於テ正シカラサレハ寸毫モ與フ
 ルコトナシ頗ル實業ヲ好ミ虛名ヲ憎ミ恩怨ノ淘汰玉石ヲ分ツヨリ甚シ常ニ謂テ
 曰ク故人ハ所謂一飯ハ徳モ必ス酬ヒ匪毗ハ怨モ必ラス報スト千歳ハ下此言實ニ
 吾心ヲ得タリト以テ其性情ハ一班ヲ知ルニ足レリ

醫學博士宇野朗君

醫學博士宇野朗君

君ハ靜岡縣ノ人舊代官江川太郎左衛門ノ配下タリ嘉永三年十月十五日ヲ以テ伊豆國君澤郡三島宿傳馬町ニ生ル明治九年五月大學東校ニ入學シ醫學ヲ修ムルコト七年間九年九月舊東京醫學校ニ於テ醫學部ヲ卒業シ翌年三月教師付下醫トナリ全校通學生教授介補ヲ兼勤ス全年十二月通學生教授兼勤ヲ免シ病院宿直ヲ命セラル十年十月東京大學醫學部助教ヲ囑托セラル又醫院外科副部長トナル十四年七月東京大學助教ニ任シ醫學部勤務ヲ命セラル尋テ正七位ニ叙セラル全年六月准醫學士トナル十六年四月器品課監督ヲ兼ヌ十月醫學部諮詢部會ノ會員ニ撰舉セラル十七年一月東京輕罪裁判所ニ出頭シ歐打創傷鑑定ノ件ヲ處理シ全年四月大學教授ニ任ス更ニ諮詢總會ノ會員トナル七月再ヒ歐打致死鑑定ノ件ニ付東京輕罪裁判所ニ出頭ス十一月當分第一醫院長心得トナリ十八年三月大學醫學部第一醫院副長ヲ兼勤ス五月醫學部得業生試檢規則起草委員トナリ十八年第二回東京醫術開業試檢委員囑托ノ任ヲ受ケ同年十月學藝志林編纂事務委員トナリ十九年三月醫科大學教授ニ任シ同月第一醫院長心得兼第二醫院長ヲ命セラル四

月奏任官三等ニ叙シ尋テ醫學士ノ稱號ヲ受ク廿二年十月學術上研究ノ爲メ歐州ニ出張スルニ當リ全國醫院管理法取調ノ囑托ヲ受ク后又忽布氏フベルクリン取調ノ命ヲ受ケ本年六月歸朝セリ

醫學博士大森治豐君

君嘉永六年ヲ以テ生ル山形縣ノ人ナリ明治五年東京大學豫科ニ入り僅カニ二年ヲ經テ本科生ニ進ミ十一年十一月ヲ以テ同大學ヲ卒業シ醫學士ノ學位ヲ受ク尋テ福岡醫學校ニ奉職シ同校廢止後直チニ福岡病院長トナル君ノ福岡病院ニ入りテ其長タルヲ專ラ院務ヲ總裁シテ釐革スル所多ク此時ニ當リテ泰西的の外科治術ニ練達スルノ醫少ナキニ拘ハラヌ君、夙ニ大學ニ於テ篤學業ヲ修メ圭刀ヲ執ルヤ剖割其手ニ任シ毫モ滯アルナシ嘗テ妊婦ヲ解剖シテ九死ノ裡ニ母子ノ命ヲ全フシ幾干モナク健康ニ復セシム此レ同病院ニ於ケル人身解剖ノ嚆矢ニシテ世人呼ンデ大森院長ノ腹切ト稱ス君屢々内外科至難ノ病症ニ接シテ忞疇スル所ナク現ニ又脹滿切開ノ如キ八百二

十餘件ニ達セリト而シテ海外醫學社界ノ實際ヲ視察セス專ラ本邦ニ在リテ研鑽ハ功ヲ積ミ其施術ハ多數ナルト且ツ一トシテ其治驗ヲ見サルモノハナキハ君ガ獨特ノ技量トシテ醫學者ノ推ス所タリ又醫學上ノ論文ニシテ最モ價値アルハ明治二十三年二月伯林醫學週報第九號ニ出セル卵巢手術五十件ノ報告ナリト云フ

醫學博士谷口謙君

君ハ美作ノ人舊藩山藩士ナリ安政三年一月江戸虎ノ門舊藩邸内ニ生ル賦性豪放幼ニシテ劍ヲ眞影流ノ達人長沼可笑門ニ習ヒ又唐津藩士平岡又右衛門ニ就テ馬術ヲ學ヒ十歳ノ頃ヒ武事已ニ稱スヘキモノアリ父有稔文辭ヲ以テ顯ハル君ヲシテ儒者タラシノント欲シ鞠育具サニ到ル君毫モ學事ヲ顧ミス講學ニ託シテ優游閑歩概子以テ常トス一日例ニ依テ櫻川ニ漁ス携フル所ノ論語一卷ヲ流失ス恍然トシテ家ニ還リ大ニ父ノ譴責ニ逢フ然レモ心ヲ學籍ニ致スナシ后西久保街某ノ學舎ニ通學スルニ及ンテ嚴父其膝下ヲ放タス日々温習セシム君誦句下ラス反覆百遍傍ヲノ慈母却テ了得スルニ至リシト云フ

偶京師事アリ父藩命ヲ帶ヒ上洛ス茲ニ於テ母子相携ヘテ谷中ニ移ル一夜咄嗟忽チ轟キ砲聲耳ヲ劈ク此レ彰義隊東嶺山ノ戰役ニシテ砲煙彈雨劍光閃々タルヲ望ミ周章狼狽僅カニ免カル、ヲ得タリ后又谷中ニ閑居ス一日無聊ニ倦ミ一二ノ書冊ヲ繕キ偶然讀書ノ妙味ヲ悟ルヤ君カ山水遊行ノ僻今ヤ學文ノ嗜好ト一變シ專心留意復他事ヲ顧ミサルニ至レリ尋テ非贅ヲ柴東三郎ノ門ニ執リ就學年許意釋然タラサル所アリテ更ニ於玉池住海保辨之助ニ就キ史書ヲ講讀ス韓非老蘇荀子等其最好ム所タリ時ニ年十四進ンテ泰西ノ學ヲ修メ大ニ爲スアラン、ヲ期ス此時ニ當リ洋學猶昌ナラス習得ノ道從テ難シ且ツ家貧ニシテ始メテ學事ノ爲メニ心勞スルニ至リ以爲テク修學ノ資ヲ得ルハ商事ニ若クナシ一攫千金志成シ易カラスト旅費少許ヲ用意シ一短刀ヲ懷中シ單身飄然トシテ家ヲ出テ東海道藤澤宿ニ至リ尿牛ヲ買ヒ之レヲ東都ニ輸シテ利ヲ獲ント欲シ往復數回業ニ從フ、ト一年余途箱根嶺ヲ過ク中途脚氣ニ侵サレ足蒸シテ起ツ能ハス馬背輿丁ノ牽ク所トナリ漸クニシテ其宿ニ至ル病勢此レヨリ加ハリ遂ニ業ヲ抛テ歸國ス幾許ナラスシテ父役吏トナリ家道君ニ資スルニ至リ欣喜雀躍外人某ニ就キ獨乙學ヲ修ノ拮据

勉旃業大ニ進ム是ヨリ先キ君法學政治學ヲ究ムルノ志アリシモ父其性ニ鑑ミ醫ニアラサレハ以テ功ヲ全フセサルヲ知リ切ニ之レヲ諭ス當時藩醫石井謙道又頻リニ父ノ意ヲ賛ス君乃翻然悟ル所アリ意ヲ決シテ明治六年一月大學東校ニ入ル全十年陸軍官費醫學生トナリ更ニ螢雪ノ苦ヲ積ミ十四年六月大學ヲ卒業シ醫學士ノ學位ヲ受ク尋テ陸軍々醫副官ニ任シ從七任ニ叙セラル十八年五月一等軍醫トナリ正七位ニ叙セラル十九年二月陸軍大學校御用係ヲ兼勸シ又戰時衛正事務改正委員ヲ命セラル六月陸軍醫學學校教員ヲ兼任ス

明治十九年七月內科醫學陸軍病院經理研究ヲ命セラレ獨乙國ニ留學ス君ノ伯林大學ニ在ルヤカル、ゲルハルトニ就キ內科臨床講義ヲ聽キ傍ヲ其實驗ニ從事シルトルフ、ウイルヒヨウニ就キ病理解剖學ヲ研究シエルンストザルトウスキーニ就キ生理病化學ヲ實脩シ夏期休暇中ロベルトコツポニ細菌學ヲ學ヒ又伯林衛戍病院ニ出テ、院務ヲ見習ヒ傍ヲ病院上等監督ドーグスニ就キ病院經理法ヲ研脩シ廿二年十一月歸朝ス

君ノ獨國在學中殊ニ我政府ノ命ヲ受ケ、カル、スルー府開設ノ赤十字締盟國第四

回會議ニ列シ又奧國維納府萬國統計衛生會ニ出席シ各盡ス所アリ歸朝ノ後二等軍醫正ニ任シ陸軍醫學學校教官ヲ兼子專ラ陸軍醫務ニ從事セリ

其著亞兒加里ノ体中酸化作用ニ及ホス影響一ニ麻醉藥ノ蛋白分解ニ及ホス影響尿ノ化學的檢査グレアチニトンノ定量法尿中ノアツエトンノ定量法安尼亞加里性尿酸酵ニ就テフミニ説ニ就テノ實驗說等ハ留學中ノ著說ニシテ學者ノ未タ論及セサル所ナリト云フ

人ト爲リ峻嚴ニシテ威容侵スヘカラサルモノアリト雖モ一タヒ胸襟ヲ開ケハ光風齊月心事自ラ悠々純朴ノ至誠人ヲシテ服セシム威望兼備ハ士トハ夫レ君等ノ謂ヒ乎

醫學博士濱田玄達君

君安政元年十一月二十六日ヲ以テ肥後國里浦村ニ生ル父ヲ元齋ト稱シ累世醫業トシ相傳ヘテ九代ニ至レリ君襁褓ニ在リテ母ノ喪ニ丁リ成童ニ及ンテ家業ヲ繼クノ意アリ年十三才復父ノ喪ニ逢ヒ痛哭哀叫殆ト絶セントス君既ニ孤トナリ

家甚タ富マスト雖トモ異母殊ニ其再危ヲ憫ミ愛願誘掖頗ル周到ナリシヲ以テ所志益堅ク自ラ同郷醫某ニ乞フテ食客トナル初メ君竊カニ以爲ラク以テ勤學ノ便ヲ得ルアラント而シテ其門ニ入ルニ及ンテ業務繁劇製藥調劑ヨリ婢僕ノ事ニ願使セラレ學窓更ニ書見ノ閑ヲ得ス日夜齷齪トシテ師門ニ服事ス明治三年藩廳醫學校ヲ創立シ專ラ醫家ノ子弟ヲ養成ス當時蘭人マンズヘルト教授ヲ督セシヲ以テ君之レニ就キ始メテ盤行ノ書ヲ讀ミ天下ノ趨勢ヲ見テ悟ル所アリ即チ日ク今ヤ青年志ヲ成スハ秋郷宇ニ躊躇スル鳳凰蕪澤ノ嘆ナキニアラスト竟ニ親戚故舊ニ説クニ遊學ノ意ヲ以テス時維新ノ革命ヲ去ル日尙ホ淺ク世態推移ノ歸點ヲ知ルモノ甚ハタ少ナシトス故ヨ以テ皆前途ヲ危ミ其遠遊ヲ賛スルモノアルナシ商人某夙ニ仁俠ノ名アリ偶々君ノ識見凡庸ナラサルヲ愛シ資ヲ投シテ爲ス所アラシム君大ニ喜ヒ奮然笈ヲ負フテ上京ス時ニ年十八才ナリ明治四年大學校ニ入り獨逸語ヲ學ブ未タ幾干ナラスシテ危難ニ逢ヒ學資ヲ掠メヲレ即チ后圖ノ出ツハキナク先ツ衣服ヲ屠シテ以テ數月ノ費途ニ充ツ此時ニ當リ君學資ハ命脈ヲ繋グ僅カニ一縷ハミ而カモ晏然學ニ從事シテ餘念ナキモノハ其期待スル所アリシヲ見

ルニ足ル官君ノ篤學厚志ナルヲ感シ殊ニ其資ヲ給ス后貸費生ニ拔擢セラル、ニ及ンテ志更ニ奮ヒ螢雪致々業日ニ進ミ明治十三年七月東京大學醫學部ヲ卒業シテ醫學士ノ學位ヲ受ク

后熊本醫學校教頭トナリ病院御用掛ヲ兼子尋テ病院長ニ兼任ス明治十六年醫學校々長ニ任セラレ更ニ御用掛衛生課醫務係担当ヲ命セラル又地方衛生委員ニ撰舉セラル尋テ其職ヲ辭シ明治十八年一月私費ヲ以テ獨乙國ニ航シ全國ストラスボルグ大學ニ入り産科婦人科ヲ專修ス全年四月文部省ヨリ向三ヶ年間官費修業ノ命ヲ得翌年十一月更ニミュヘン大學ニ入りテウヰル氏ノ無給助手トナリ是ニ於テ專ラ實修ニ從事シ其蘊奧秘術ヲ極ム此時ニ當リ本邦人ニシテ助手タリシモノ亦少カラサリシト雖モ異域數多ノ患者ヲ囑托セラレテ獨斷手術ヲ實行セシカ如キ君ノ信用ヲ價シタルモノト謂フ二十一年五月進ンテ各地病院ノ景况ヲ視察シ全年八月ヲ以テ歸朝ス

君嘗テ吾邦產婆ノ幼稚ナルヲ嘆シ獨國在留中熱心ニ研究ヲ遂ケ歸朝ノ后當路大臣ニ建議スル所アリ尋テ大學病院ニ產婆養成所ヲ設置スルニ至リ爾來產婆養成

ノ方針ヲ改良シ着々效ヲ顯ハスモノ君ノ盡力最モ多キニ居レリ之ヲ以テ大學教授トナルヤ直チニ入ツテ第一醫院產科婦人科教室主任タリ二十二年本邦男女婚姻取調委員ヲ命セラル又第三回内國勸業博覽會審査官トナリ二十四年八月醫學博士ノ學位ヲ授ラル

其實驗論文亦少ナシトセス就中明治十五年東京醫學新誌ニ報告セル脾臟ノエヒノコックス發見ハ實ニ本邦醫學社會ニ認識セラレサリシモノナリト云フ又二十一年ニハ子宮全体摘出術ノ新法ヲ案出シテ實驗上良好ノ成績ヲ顯ハシ二十三年第一回日本醫學會ニ於テ演說シタル卵巢囊腫手術上ニ付注意スヘキ一二ノ要件ノ如キ又全年八月産后ニ於ケル尿淋瀝症ノ外科的療法ノ一法ハ最モ其顯著ナルモノトス君又産婆教科書ノ高尙ニシテ人智ノ程度ニ背馳シ已ニ陳腐ニ屬セル論說多ク動モスレハ斯學ノ方針ヲ誤ルアランコトヲ憂ヒ産婆學ノ著アリ近時頗ル世ニ行ハル

夫レ學問ノ目的之レヲ小ニシテハ自家ノ尊榮ヲ計リ之レヲ大ニシテハ社會ヲ改良シ以テ邦國ノ福運ヲ増進スルニ在ルヤ明ナリ殊ニ海外留學者ノ如キ鉅多ノ資本ヲ擁シテ異邦ノ學海ニ投ス自ラ省ミテ其本分ヲ念ルベケンヤ君常ニ醫道ノ蠶革スヘキモノアルヲ以テ專心實終ヲ主トシ尤モ學理深淵ノ資料ヲ撰擇シ之レカ研究ニ從事ス今ヤ我邦產科婦人科ニ於テハ名聲頗ル盛ニシテ其醫學ノ進歩ヲ促シタルモノ故ナキニアラサルナリ人ト爲リ温厚篤實ニシテ應答禮ヲ重ンシ一見隔靴ノ感ナシ曾テ孟母三遷ノ訓育最モ學事成業ノ根柢タリシコトヲ憶ヒ今ヤ專ラ奉養ヲ盛ニシテ其親ニ服事スト云フ以テ其至孝ヲ察スルニ足レリ

醫學博士高橋順太郎君

君ハ東京ノ入舊加州金澤藩士ナリ安政三年三月加賀國金澤ニ生ル明治四年三月大學南校ニ入學シ獨乙語學ヲ修メ全七年開成學校ニ於テ鑛山學科ヲ專攻ス翌年全學科ノ癡セラル、ニ及ンテ東京醫學學校ニ轉シ歲余ニシテ學業大ニ進ミ尋テ本科生ニ進ミ十四年醫學卒業考試ニ登第シ醫學士ノ學位ヲ受ク直チニ醫學部備トナリ内科當直醫トナル全年八月東京大學御用掛トナル

明治十五年二月文部省官費留學生トナリ獨乙國ニ航シ全國伯林府大學ニ入り大

學教授等フスレリーブライトナ師トシ十七年四月全國ストラスブルク府大學ニ
 轉シ教授シユミードベルヒニ就キ專ラ藥物學及裁判醫學ノ化學ニ屬スル部分ヲ
 攻究シテ學理實驗ノ功ヲ積ミ十八年十月ヲ以テ歸朝ス
 尋テ東京大學御用掛トナリ醫學部ニ勤務ス明治十九年醫科大學教授ニ任シ奏任
 官四等正七位ニ叙セラル二十三年奏任官三等ニ叙セラル二十四年八月醫學博士
 ノ學位ヲ受ク是ヨリ先キ内務省ノ囑托ニヨリ日本藥局方調査委員トナリ盡ス所
 アリタリ

醫學博士北里柴三郎君

君ハ多年獨國伯林醫科大學教授博士ドクトルコッホニ就キ其高足ノ一人トシテ
 同博士ヲ助ケバクテリヤ學術上著シキ効ヲ顯ハシ又一二ノ發明ヲ爲シタルカ爲
 メ歐米醫學社會中ニ英名ヲ博シ已ニ英國ケンブリッジ大學校米ノフヒテデルフヒヤ
 州立大學校ヨリモ各書ヲ寄セ雇聘センコトヲ欲スルニ至レリ現ニ帝國博士ニシ
 テ之レニ冠スルニ普國大博士ノ學稱ヲ以テス稀代ノ名譽ト謂ハサル可ケンヤ

君ハ熊本縣北里惟信ノ男ニシテ安政三年十二月阿蘇郡北里村ニ生ル幼ヨリ大志
 アリ醫術ヲ以テ家ヲ興サンコトヲ矢ヒ明治四年熊本醫學校ニ入學シ全校ノ教師
 マンスヘルトニ就キ蘭學醫學ヲ學ブ氏ハ頗ル顯微鏡的學術ニ熱心ニシテ業ヲ授
 グルニ當リ其講說スル所多ク之レニ關セサルナシ因テ君亦顯微鏡ヲ用ヒテ常ニ
 微物ノ發見ニ力ヲ致セリ當時全校ニ在勤シマンスヘルドノ通辨ヲナシタル大坂
 日新病院高橋正純語テ曰ク此レ蓋シ君ガ今日微菌學上一大發明ヲ爲シタル源因
 ナルヘシト勉旃三星霜ヲ經テ東京ニ出テ明治七年直チニ東京大學理學部ニ入り
 獨乙學醫學ヲ脩メ十五年醫學全科ヲ卒業シ醫學士ノ稱號ヲ受ク

明治十六年二月職ヲ内務省衛生局ニ奉シ十七年九月内務省御用掛トナル十八年
 十一月衛生學術上取調ノ爲メ獨乙國留學ヲ命セラレテ之レニ航シ教授コッホヲ
 師トシ其微菌學教室ニ於テ專心斯學ニ從事シ又肺病治療法ヲ研究シテ大ニ得ル
 所アリ既ニシテ内務技師補ニ任シ尋テ内務一等技師ニ任ス二十年九月奧國維納
 府ニ於テ萬國衛生會ヲ開クヤ君内務省ノ命ヲ受ケテ之レニ出席セリ二十三年七
 月判任官一等ニ叙セララル此時ニ當リ君主トシテ肺病治療法ヲ研究シ効ヲ顯ハス頗

ル著大ナルヲ以テ留學期既ニ滿ルニ及ヒ繼續講究セシムルカ爲メ宮内省ヨリ特旨ヲ以テ學資金千圓下賜セラル尋テ休職トナリ猶一年間休職ノ儘獨國滯留ノ許可ヲ得醫術研究ニ從事シ二十四年八月醫學博士ノ學位ヲ受ク全年十月歸朝ノ途ニ上リ佛英伊及米ノ四箇國ヲ巡視シ各地衛生事業ノ取調ヲ終ヘ二十五年五月ヲ以テ歸朝セリ

君留學中ノ實驗論說頗ル夥多ニシテ牧舉ニ遑アラス其最重ナルモノハ蜜扶斯及虎列刺黴菌ノ酸性及アルカリ性營養基ニ於ケル關係虎列刺黴菌ノ乾燥及温熱ニ對スル抵抗力虎列刺黴菌ノ乳汁ニ於ケル關係虎列刺黴菌ノ人糞中ニ於ケル關係虎列刺黴菌ノ自他ノ病性及非病性ノ黴菌ニ於ケル人工的營養基中ノ關係醉痘黴菌及其人工的發育法破傷風黴菌ニ就テ蜜扶斯黴菌ノ自他ノ類似ノ黴菌ニ異ナルインドール反應ヲ呈セサル試檢脾脫痘黴菌ノ地層中ニ於テ芽崩ヲ形成スル關係醉痘黴菌ヲ固形營養基ニ發育セシムル方法非酸素黴菌ノ研究破傷風毒ノ動物試檢肺結核黴菌及自他ノ病的黴菌ヲ咯痰中ヨリ純養スル方法腐敗血中ヨリ螺旋菌ヲ純養スル方法麴香菌ニ就テゾフナリヤ及破傷風ヲ動物ニ免疫セシムル法流行

性感胃黴菌ヲ純養スル法免疫及耐毒法ノ試檢等ナリトス

獨國文部省ハ君ノ出發スルニ當リ學事上功勞少カラサルヲ嘉ミシ特ニ相當ノ勳賞若クハ大博士ノ學位ヲ授與スヘント師匠コツホ氏ヲシテ傳ヘシム君謝シテ曰ク勳賞ハ人ノ能ク佩用スル所敢テ望ム所ニアラス然レモ普國大博士ノ學位ヲ得ルハ學者無上ノ幸榮ナリト君歸朝ノ后贈ルニ左ノ證狀ヲ以テセリ

醫學博士此里柴三郎氏ニ授與スルプロフェッソル證狀

本大臣ハ在東京醫學博士此里柴三郎氏ノ貴重ナル學術上ノ功績ニ對シ

プロフェッソル

ノ稱ヲ授與シタル后今ヤプロフェッソルタル北里醫學博士カ將來淪ラス身ヲ學術推轡ノ事ニ委セラル、ヲ篤信シテ此證狀ヲ贈ル而シテ氏ハ之レニ對シテ本大臣カ任命セルプロフェッソルニ屬スル等級及特權ヲ享有セラル可シ此證狀ニハ本大臣署名シテ之レヲ證シ宇漏生王國敎務學務醫務省ノ印證ヲ押捺ス

千八百九十二年五月一日

醫學博士北里柴三郎君

伯林ニ於テ

教務學務醫務大臣ボツセ

右證書ニ關スル通知書

貴下ノ貴重ナル學術上ノ功績ニ對シプロフェツソルノ稱ヲ貴下ニ授與シ併セテ
其爲メ調製セル證狀ヲ贈進ス

千八百九十二年五月一日

伯林ニ在テ

教務學務醫務大臣ボツセ

在東京

醫學博士北里柴三郎君

人ト爲リ恭順ニシテ雅量アリ應對懇懇毫モ禮ヲ欠クナシ君ノ歸途ニ就クヤ歐米
到ル所學者紳士ノ招待ヲ受ケ頗ル優遇セラレシト苦學積功ノ餘慶ト謂ハサル可
ケンヤ

醫學博士片山國嘉君

君ハ靜岡縣ノ人安政二年七月ヲ以テ遠州周智郡犬居村ニ生ル片山龍菴ノ二男ニ

シテ兄ヲ片山隆菴ト稱シ夙ニ英才ヲ以テ鄉黨ノ稱スル所トナル學未タ央ニシテ
鬼籍ニ入ル惜哉君少ヨリ學ヲ好ミ黃吻能ク事理ヲ斷ス年十四ノ頃足立寛氏ノ門
ニ寄食シ明治四年十月大學校ニ入り給費生ニ擧ケラレ十二年十月東京大學醫學
部全科ヲ卒業シテ醫學士ノ學位ヲ受ク尋テ醫學部備トナリ生理學教師プロフェ
ソル、エ、ケ、ゲルノ助手ヲ勤ム十四年七月東京大學御用掛トナリ全年十二月助教
授ニ任シ法醫學及衛生學ノ講義ヲ擔任ス之レ我大學醫學部ニ於ケル該二科教授
ノ嚆矢トス十五年六月內務省衛生局ニ兼勤シ又醫學部諮詢會々員ニ撰ハレ尋テ
東京醫術開業醫術委員タリ

明治十七年七月滿四年間裁判醫學科修業ノ命ヲ受ケ獨逸二國ニ留學ス初メ伯林
大學ニ於テ教授リマン氏ニ法醫學ヲ學ヒグラウイッ、メンデル、リーブライヒノ
諸教授ニ就キ病理學及病理解剖學、神經病學、精神病學、毒物學諸科ヲ脩メ十八年
太利維納府大學ニ轉シエ、フオン、ホフマン、マイ子ル、トフリツケ其他ノ諸氏ニ就キ
更ニ普通醫學ヲ修メ再ヒ伯林大學ニ移リコッボナ師トシ微菌學及衛生學ヲ修メ
又リマンナ師トシ法醫學ヲ脩メ其他ノ諸科ヲ講脩シ廿一年十一月ヲ以テ歸朝ス

醫學博士片山國嘉君

君夙ニ法醫學ノ研究ヲ主トシ海外ニ航シテ汎ク有名ノ大家ニ親炙シテ益其識奧ヲ究ム歸朝ノ翌年一月我邦檢屍法ニ就キ帝國大學總長ヲ經テ一編ノ意見書ヲ奉呈シ全年八月市區郡區制度ニ關シ又建議スル所アリタリ聞ク當時醫科大學ニ國家醫學講習科ヲ設立セシモノ之レ實ニ君及緒方博士等ト與テ力アリシト現ニ其講師トナリ盡ス所少カラス尋テ東京始審裁判所醫務囑托ヲ受ケ又中央衛生會委員ニ撰ハレ日本男女婚姻年齡取調委員ヲ命セラレ廿三年五月司法省ノ諮問ニ應シ裁判醫事檢査鑑定料草案ヲ起草ス

其留學中實驗論文ノ著シキモノ少カラス維納大學ニ於テ刺創ト刺器トノ干係ニ就キ種々ノ試檢ヲ行ヒ其成績ヲ記シタル論文及伯林大學ニ於ケル酸化炭素中毒血ノ新反應ニ就キト題シタル論文ハ教授ザルコスオーノ化學實驗所ニアリテ血液ノ法醫學上ノ干係ニ就キ實驗的研究ノ成績ヲ記述シタリ又高温ト血液トノ法醫學上緊要ナル干係ニツキ記述シタル論文ハ彼國ノ雜誌ニ掲載ス當時本邦ニ於テハ東京醫事新誌ニ之レヲ譯載セリ歸朝ノ后火事後ノ灰燼中ニ存在セル血痕ノ檢査ニ關シタル論文及血尿檢査ニ於ケル還元ヘマチン光像必要ニ就キ東京醫學

會ニ於テシタル演說ハ全會雜誌ノ掲載スル所トナレリ之等ハ以テ君遺著ノ一端ヲ窺フニ足ルモノナリ
君又先キニ裁判醫學提綱衛生學ヲ願ハシ後法醫學ノ著アリ蓋シ前者ヲ增訂シタルモノニシテ大ニ世ニ行ハル

醫學博士三浦守治君

君本姓ハ村田氏舊三春藩士村田七郎ノ二男ニシテ安政四年五月磐城國岡村郡平澤ニ生ル幼ニシテ穎悟居作成人ノ如ク慶應三年五月初メテ三春善光寺住職井上知完師ニ就キテ學ブ年十三更ニ三春講所ニ入り熊田嘉善山地純一佐久間澁門諸氏ニ從ヒ專ラ漢籍ヲ學ヒ講習漸ク積ムニ及ヒ寡言篤行毎ニ衆生ハ規鑑ヲ以テ稱セラル明治五年十六歲矢テ學事大成ヲ期シ東京ニ出テ岡鹿門ノ塾ニ入り漢籍ヲ專攻スルコト一年余六年十一月東京醫學校ニ轉シ雪霜苦學十四年二月卒業試問ニ應シ優等首位ノ榮ヲ得テ醫學科ヲ卒業シ尋テ醫學士ノ學位ヲ受ケ
是ヨリ先キ君鵬志ヲ抱キ蹶然袖ヲ拂テ東京ニ來リ第二醫院長三浦義純ニ依ル氏

ハ元同郷ノ人矩律森殿卓行ヲ以テ聲アリ君從弟村田醫學博士ト共ニ其門ニ在リ
 テ蒸陶ヲ受ク氏君ノ學才非凡ナルヲ見遂ニ養フテ嗣子トス茲ニ於テ三浦姓ヲ胃
 ス恰モ明治七八年ノ頃ナリ
 大學卒業ノ后御用掛ニ任シ醫學部當直醫トナリ臨床ノ實驗ニ從事スルコト恭年
 明治十五年二月留學ヲ命セラレテ獨乙ニ航シ直チニ全大學ニ入り教授ユーリア
 ス、コーンハイムニ就キ病理學及病理解剖學ヲ研究シ滯留三學年時ニ病理學教頭
 病ムアルニ逢ヒ既ニシテ伯林大學ニ轉シ病理學ノ泰斗トトル、ウイルヒヨ一ニ
 就キ益斯學ヲ修メ十七年七月學位試問ニ應シ對策拔群トクトルノ學位ヲ受ク君
 猶醫學ノ源流ニ遡リ以テ蘊奧ヲ究メント欲シ勉旃二年余留學滿期ヲ告グルニ至
 リ更ニ私費ヲ以テ在留スルコト一年ウイルヒヨ一ニ親炙シ其實驗室ニ於テ研究
 スルコト數歲成績ヲ得シモノ少カラス在歐中ノアルバイトニシテウイルヒヨ一
 寶函ニ顯ハレタル幾多ノ報告皆此際ニ成リシモノナリト留學爰ニ五星霜ヲ經過
 シ學理實驗業共ニ終ハリ二十年三月ヲ以テ歸朝ス直チニ大學教授ニ任シ病理學
 解剖學ノ教授ヲ擔當シ又脚氣病審査委員ヲ命セラル夫レ脚氣ハ我邦特種ノ病症

ニシテ本邦人ノ此病ニ懼ルモノ年々其若干ナルヲ知ラサルナリ而シテ之レカ病
 源ヲ攻究シタルモノアラス君乃夙夜學理ヲ參照シテ病源ヲ檢定シ屢實驗ノ成績
 ヲ論壇ニ發表シテ大ニ世人ノ注意ヲ促セリ二十二年六月中央衛生會臨時委員ト
 ナリ尋テ本邦男女婚姻年齡取調ヲ命セラレ二十三年三月正七位ニ叙セラレ奏任
 官三等ニ任シ二十四年八月醫學博士ノ學位ヲ受ク
 君歸朝后官務ニ執掌シ閑アレハ手卷ヲ捨テス專ラ斯學ノ研究ニ從事シ内外ノ雜
 誌ニ寄稿シタルモノ少カラス今其最重ナルモノ一二ヲ擧クレハ心臟畸形虫卵ニ
 因スル纖維性結核樣組織脊髓質化脚氣ノ病理等之レナリトス
 人ト爲リ謹直人ニ接スル温良恭謙苟クモ才ヲ銜ヒ能ニ誇ルノ風ナシ而シテ日ニ
 其身ヲ三省シ以テ行ヲ修ムト德望益高キ所以ナリ嗚呼當世輕薄ニ流レ朋儕ノ間
 或ハ言語ニ堪ヘサルモノアリ宜シク君ノ修行ニ鑑ミ自省スル所ナクシテ可ナラ
 ンヤ

醫學博士中濱東一郎君

醫學博士中濱東一郎君

君東京ノ人奮高知藩士安政四年七月ヲ以テ江戸ノ新錢坐ニ生ル幼ヨリ家庭ニ在リテ父ノ蒸陶ヲ受ケ夙ニ洋語ヲ學ヒ七八才ニシテ始メテ大島圭介、矢田部良吉、佐久間某ニ從テ英學ヲ學ブ明治五年出テ、橫濱十全病院ニ入り院醫セメンズノ通辯ヲ兼テ醫學ヲ修業ス庶期意ノ如クナラス既ニシテ去テ東京ニ來リ六年大學東校ニ入り勉學業ニ就クコト八閏年十四年四月東京大學ニ於テ醫學部ヲ卒業シ醫學位ヲ受ク直チニ福島縣醫學校長兼教授トナリ尋テ岡山縣病院一等醫學教授ニ任シ全縣衛生委員ニ撰ハル十七年十一月石川縣金澤病院長ニ轉シ十八年九月内務省御用掛ヲ命セラレ職ヲ辭シテ上京ス

明治十八年十月内務省ノ命ヲ受ケ衛生學術取調ノ爲メ獨乙國ニ派遣セラル君翌年十二月ヲ以テ全國ニ航シ十九年一月ライプチヒ大學衛生試檢所ニ入り衛生學教授ホフマンニ從ヒ飲食物試檢ニ從事シ傍ラ同地醫會及市區醫ノ組織議會等ニ係ル件ヲ稽查シ十一月ミュンヘン府大學ニ入り衛生學教授ベツテコーフェルニ從ヒ流行病ノ研究又葡萄酒色素ノ實驗ニ從事シ又教授レーマント共ニ硫化炭素ノ毒力等ノ試檢ヲ施シ生理學教授ホイトニ從ヒ尿酸酸ノ排泄トアルカリ性飲料

トノ干係ヲ攻究シテ共ニ其成績ヲ得曩キニ飲食物ノ試檢ヲ爲スヤ吾人々類ノ食料ニ必要ナル淡白質ハ一日幾何ノ量ヲ必用トスルヤヲ檢査シ遂ニ之レヲ世ニ公ニセリ二十年九月本邦政府ノ命ヲ受ケ奧國維納府萬國衛生會ニ出席シテ本邦虎刺拉豫防法ヲ演說ス二十一年更ニ伯林ニ至リ黴菌學ノ泰斗コッポニ從ヒ黴菌學ヲ修メケーヒールノ菌及酵母分離ノ研究ヲ遂ケ后再ヒライプチヒ大學ニ入りテ教授ロイカルトニ從ヒ寄生蟲ノ研究ヲ爲シ在留三年月學理實驗ヲ積ミ全年九月ライプチヒヲ發シ和蘭英吉利白耳義佛蘭西各國ヲ巡回シテ衛生上ノ諸件ヲ視察シ二十二年二月ヲ以テ歸朝シ内務省四等技師ニ任セラル又醫科大學國家醫學會講習科授業ヲ囑托セラル

明治十六年君ノ岡山病院ニ在ルヤカンブー、ハーゾー、ヂストマノ研究ヲ爲シ大ニ世人ノ注目スル所トナリ歐洲人ハ其所說ヲ翻譯シ之レヲ外國ノ雜誌ニ掲載スルニ至レリ又廣島縣福山近傍ニ一種ノ地方病發生シ曾テ之レヲ研究シタルモノナキヲ聽キ直チニ出張シテ調査ニ從事シ其病理ヲ發見シテ之レニ附名セリ後大學教師ベルツト共ニ同地ニ出張シテ取調ヲ爲スニ當リ氏モ亦君ノ意見ニ賛同セリ

ト尋テカンヅーチストマノ取調及ハイ病ヂストマノ卵ニ付テノ研究並ニ赤痢病
學術上ノ取調ノ成績ヲ世ニ公ニス

明治二十三年二月東京衛生試験所長ニ兼任ス爾來病理衛生取調ノ爲メ各地ニ出
張シ或ハ病理ヲ研究シ或ハ豫防法ヲ實施シ椅席殆ト暖カナルノ追ナシト是ヨリ
先ニ神奈川縣三浦郡ニ一種ノ奇病發生シ諸先生屢出張シテ之レヲ檢ス或ハ蠟ノ
中毒ナリト云フモノアリテ此說大ニ勢力アルニ至ラントス后君出張シテ其誤レ
ルヲ發見シ遂ニ蠟ノ冤罪ナル一冊子ヲ發行セリ曾テ醫學士熊谷幸之輔氏ト共ニ
類症鑒別ヲ著ハシ又醫學士菅之芳ト共ニ内科醫鑑及醫療寶鑑ノ著アリ

君カ父ヲ萬次郎ト稱シ土佐ノ一漁夫ナリ年甫メテ十三隣人ノ傭フ所トナリ一日
漁舟ニ乗ル生魚濺瀾殆ト漁師ヲシテ日ノ傾クヲ念レシム時ニ颶風俄カニ起リテ
怒濤舟ヲ捲キ擢折レ椽毀ケテ孤葉渺海ニ漂フコト數日遂ニ一小嶋ニ着ス上リ見
レハ之レ無人嶋落膽又落膽即穴居水草ヲ逐フコト半歲偶鯨船ノ救フ所トナリテ
米國ニ到リ孤身天涯ニ辛酸シテ學術ヲ研究シ嘉永年間歸朝セリ爾來歐米諸國ノ
事情ヲ總覽シテ頑迷者流ヲ起タシメ大ニ進化ノ道ヲ知ラシム維新后全權公使ノ

始メテ渡來スルヤ之レニ從ツテ頗ル斡旋スル所アリ后又普佛戰爭ノ交渡航シ今
ヤ身閑散ノ地ニ在リテ又世事ニ干セスト
君風骨稜々眼光人ヲ射ル其事ニ當ルヤ電勉匪躬事窮メサレハ措クナシ實ニ好箇
ノ偉男子ナリ

醫學博士佐藤三吉君

君ハ岐卓縣ノ人舊大垣藩士ニシテ安政四年十一月ヲ以テ美濃國安八郡大垣新地
ニ生ル父ヲ只五郎ト云フ藩廳ニ斷獄吏タリ至公ヲ以テ稱セラル君乃其三子ナリ
天資穎敏幼ニシテ大志アリ其鄉儕ニ遊フヤ才學衆ニ超ユ師野原得齋君ノ才ヲ愛
シ立テ、養子トナサント請フ君應セス十三歳ニシテ父ヲ失ヒ藩廳ニ仕丁タリ時
ニ維新ノ大業始メテ成リ文物漸ク將サニ盛ナラントス人々競フテ學ニ就キ苟ク
モ資アル者ハ笈ヲ負フテ東都ニ遊ヒ然ラサル者亦藩選ヲ以テ進メラル而シテ君
其資ナク亦推選ニ漏レ慨然トシテ日ク嗟男兒此有爲ノ時機ニ生レ徒ラニ鄙郷ニ
蟄居シテ斯志ヲ伸フル能ハス豈ニ千載ノ遺憾ナラスヤト切齒之レヲ久フス同藩

士安藤就高君ノ姉婿ナリ時ニ職ヲ監督官ニ奉シテ東京ニ在リ聞テ之レヲ愍ミ且其志ヲ壯ナリトシ直チニ君ヲ迎フ且告ケテ曰ク方今洋學ヲ脩ムルモノ日一日ヨリモ多シ然レモ其學ヲ所英ニアラサレハ則佛獨逸ニ至ツテハ寥々トシテ曉天ノ星ヲ觀ルカ如シ吾燕其近狀ヲ察スルニ佛ト戰テ之レニ勝チシヨリ馬躍リ士勇ミ文運頓ニ勃興シ碩學大家輩出シテ勢旭日ノ昇ルカ如キアリ想フニ其英ヲ凌キ佛ヲ駕シ牛耳ヲ歐洲ニ執ル蓋シ將サニ遠キニアラサラントス汝洋學ヲ修メント欲セハ宜シク志ヲ獨逸ニ專ニス可シト君是ニ於テ欣然直チニ贊ヲ司馬凌海ノ門ニ執リ始メテ獨乙學ニ就ク明治四年君年甫メテ十四晨起更寐寸抄怠ラス歲餘ニシテ學大ニ進ム

明治五年大學南校ニ入り幾何モナク官費生ニ擢ラレ尋テ開成學校ニ轉シ鑛山學ヲ修ム居ルコト三年業大ニ進ム時ニ全學科突然廢止セラル、ニ會ス悵然大息シテ曰ク噫、教育ノ基礎何ソ其ノ鞏固ナラサルヤ吾子三年ノ苦學遂ニ徒勞ニ屬セシムト、恣然意ヲ決シテ東校ニ入り醫學ヲ研究スルコト六年間志ヲ外科學ニ傾ケ常ニ以爲ラク外科ノ術タルニ刀能ク生ヲ濟ヒ亦能ク死ニ活ルル生死ノ係ル所聞髮ヲ

容レハ危險亦甚シ苟クモ斯業ニ就事スルモノ百切千磨割割妙ヲ得スハ豈ニ容易ニ手ヲ下タスヘケンヤト十五年四月優等ノ點ヲ得テ遂ニ大學全科ヲ卒業シ醫學士ノ稱號ヲ受ク尋テ大學醫院ノ外科助手ニ舉ケラレ十六年三月外科專修ノ命ヲ受ケ獨逸國ニ航シ伯林大學ニ入り首トシテ教ヲ外科學教授ベルクマンニ受ケ滿腔ノ熱血ヲ實地ノ學ニ澱キ畢生ノ全力ヲ治療ノ術ニ究メ傍ラ他ノ諸大家ニ就キ各種ノ專問學ヲ講究シ遂ニ大ニ悟ル所アリ

君ノ伯林大學ニ在ルヤ沍寒怠ラス太暑倦マス四年ノ星霜致々斯學ノ研究ニ從事ス此時ニ當リベルクマンノ名聲噴々トシテ伯林全市ニ噪キ四方ノ才俊陸續相踵キ篋ヲ負フテ來リ學フ而シテ氏獨リ君ヲ愛敬スル最厚ク其歡待音ナラサリシト云フ亦以テ君ノ才學ト技倆ヲ窺フニ足レリ二十年五月期滿ルニ及ンテ我文部省ハ特ニ巡回費トシテ金三百圓ヲ贈リ汎ク邦内ノ諸名家ヲ歴問セシム乃維納府ニ遊ヒ其他ノ碩學大家ニ逢フテ其蘊奧ヲ探リ尋テ英國ニ到リサントトマス病院ノ實況ヲ視察シ今年十月ニ到リ歸朝ス

茲ニ於テ君ノ志望始メテ達シ歸朝ノ后醫科大學教授ニ任シ奏任官四等ニ叙セラ

ル二十三年十一月奏任官三等ニ進ミ正七位ニ叙セラルル二十四年醫學博士ノ學位ヲ授ケラルル是ヨリ先キ醫科開業試驗委員トナリ又第三回内國勸業博覽會審査官トナリ又忽布氏液審査委員ヲ命セラルル皆大ニ盡ス所アリ二十四年濃尾震災ニ際シ出張ヲ命セラレ其負傷者ヲ治療シテ到ラサル所ナシ官特ニ褒狀ヲ賜ヒ以テ其功勞ヲ賞ス

君人ト爲リ清廉方正ニシテ勇敢其信スル所ヲ行ヒ其知ル所ヲ言ヒ勇往直進寸歩ヲ授ケテ氣骨概子斯ノ如シ宜ナル哉年未タ壯丁ニ至ラスシテ遂ニ能ク大成スルニ至レリ而シテ前途猶遠シ今ヨリ以往世ニ益スル所蓋シ將サニ量ラレサラントス嗚呼畏ルヘキ哉初メ安藤氏ノ世ニ出ツルヤ實ニ君カ父ノ力ニ頼レリ而シテ君カ今日ノ業ヲ致セル一ニ安藤氏ノ助ヲ以テナリ氏今則亡ス君其遺孤ヲ愛恤シ其家ヲ經紀シテ懇切周到ラサルナシト嗚呼交遊ノ誼骨肉ノ情是ニ於テカ至レリ盡セリ亦以テ君ハ仁術更ニ一段ハ光彩ヲ發輝セリ世ノ輕薄子少シク鑑ミル所アリテ可ナリ

醫學博士榊俣君

君父ヲ令轄ト稱ヒ又綽ト號ス元ト江戸ノ浪人ニシテ嘉永四年津ノ藩ニ仕ヘ士籍ニ列セラル慶應年間幕府ニ出仕シ富士見御寶藏番格トナリ開成所ニ勤務ス專ラ活版印刷事務ヲ統裁セリ母ハ舊幕臣山田一郎ノ長女ナリ曾テ清水家ニ仕フ君其長子ニシテ安政四年八月二十八日ヲ以テ江戸下谷ニ生ル性柔順ニシテ人ト爭フコトナシ幼名善太郎ト呼ヒ后俣ト改ム成童ノ頃ヒ小林貞介ノ門ニ入り漢籍ヲ學ヒ尋テ開成所ニ入學シ英學數學ヲ習フ明治元年王政復古ニ際シ父母ニ從テ駿府ニ移リ静岡藩設ノ學舎ニ學ヒ外山正一堀越愛國等ニ就キ英學漢學ヲ修ム后沼津小學校ニ於テ小學全科ヲ卒業シ又松田玄端石橋好一ニ就キ英學ヲ修ム父夙ニ蘭學ニ通シ戊辰ノ變亂ヲ經世態爲メニ改マルニ及ンテ曰ク今時學者經世ノ術醫學ニ若クモノナシ我レ曾テ此道ヲ修メサリシヲ悔ユト君之レヲ聞キ大ニ前途ノ進修ヲ助成セリト云フ

明治三年甫テ十四志ヲ醫學ニ傾ケ五年上京シテ下谷和泉橋三崎嘯ノ塾ニ入り獨乙學ヲ修ム十月東京第一大區醫學學校醫學豫科生トナリ七年本科ニ進ム十二年虎

醫學博士榊俣君

拉刺病流行シ都民大ニ病ム君即衛生會ノ命ヲ受ケ日夜病家ヲ問フテ傳播ノ情勢ヨリ衛生所係ノ事項ヲ調査ス十三年三月卒業試験ニ當リ全成績甲點ヲ以テ及第シ醫學士ノ學位ヲ得此レヨリ更ニ漢學ヲ修メント欲シ須田仲ニ就テ文學及道德學ノ講義ヲ聽ク其篤學概子此ニ類ス后大學醫學部雇トナリ第一醫院當直醫タリ明治十五年二月精神病學專攻ノ爲メ獨乙留學ノ命ニ接シ孤身海外ニ航シテ伯林大學ニ入り精神病學及密接關係ノ諸學科ヲ研究シ其月ニシテ才名大ニ顯ハレ撰ハレテ獨乙國精神病學會正員トナリ又伯林醫學會ノ會員ニ舉ケラル后伯林精神病學會ノ正員ニ推撰セラル留學期滿ツルニ及ンテ一年間延期ノ電命ヲ受ケ更ニ法醫學ヲ研究ス君渡航以來教授二十有餘氏ニ就キ講義及臨床講義ヲ傍聽シ就中故ウエントフアル教室ニ於テ精神病學ノ補助員トナリウキルシヨ一教室ニ於テ神經系統ノ病理解剖的實驗ヲ爲シメンデル教室ノ電氣療法ニ從事セシハ大ニ其知見ヲ博該ナラシメタリト云フ十九年五月伯林ヲ發シ獨奧伊瑞數國ヲ巡回シ各地ノ癡癲病院及學校等ヲ視其建築法院則校則等ヲ調査シ全年十月歸朝シテ醫科大學教授ニ任セラル

明治十九年十一月醫科大學ニ精神病學教室ヲ設ク君其任ニ當リ精神病學ノ講義ヲ開ク是レ本邦ニ於ケル大學正課精神病學ノ初メトス二十年三月正七位ニ叙セラル又東京癲狂院ノ治療ヲ担任ス二十一年一月東京醫學會定議員トナリ四月國政醫學會ノ副會頭ニ舉ケラル二十二年四月醫科大學精神病學教授主任トナリ日本赤十字社員ニ列ス十月國政醫學會組織改正ニ當リ又其定議員トナリ現ニ大學教授ニシテ巢鴨病院長ヲ兼ヌ二十四年八月醫學博士ノ學位ヲ受ク

明治二十年華族相馬家ニ事アリ僅カニ一家ノ騷擾ニ過キサリシト雖モ誠胤君ノ狂者タリシヤ否ノ疑點ハ當時人ノ談柄タリ君乃綿織剛清家宅侵犯事件ニ付醫科大學ヲ代表シテ法庭ニ出頭シ其精神病者タルコトヲ證明シテ考證明確以テ世上ノ怪訝ヲ解ケリ爾來東京癲狂院巢鴨病院ニ於テ患者ヲ治スル幾百千人夙ニ名聲アリ君實驗ノ重モナルモノハ錯迷患者ノ腦變狀、麻痺狂患者ノ腦ノ變化、脊髓勞ノ神經變化、眞性筋肉肥厚ヒステリー症ノ知覺變常シヤクニソン、癲癇、精神病者ノ皮膚病、男性ヒステリー症、精神病ノ阿片療法、インフルエンザ病ト精神病ノ干係其他精神病ノ源因、酒精中毒、鉛粉中毒、麻痺狂等ニ就テノ發見及著述等之レナリ而シテ眼

科學ノ四卷ハマイエルノ眼科學ヲ譯シ之レニ自家ノ實驗ト理論ヲ增加セシモノナリト云フ

君謹直寛厚ニシテ事ヲ處スル鄭重常ニ儉素ヲ主トシ親ニ仕ヘテ至孝子弟ヲ遇スル周到囊キニ獨乙ニ在ルノ日教授ヅキルシヨト共ニ博物會場ニ在リ偶全國皇太子フリードリヒウキルヘルイ殿下ノ臨御セラル、ニ逢ヒ尊辭ヲ辱フセリト榮譽ト謂フ可キナリ

醫學博士隈川宗雄君

君父ヲ原有鄰ト稱ス沈深大器アリ人ニ先冬チテ蘭學ヲ修メ最醫道ニ通ス曾テ板倉藩醫ニ舉ケラレ主ニ從テ三河國重原ニ移リ后歸國シテ業ヲ福島ニ開クニ至リ鄉黨皆圭刀ノ妙ヲ稱セリ其母又賢女ヲ以テ知ラル四男アリ君乃第二子ニシテ安政五年十月十三日岩代國伊達郡梁川ニ生ル幼字郁次郎ト云フ家甚富マサリシモ母能ク家業ヲ佐ケ專ラ意ヲ家庭ノ教育ニ盡ス維新革命ノ頃ヒ藩中尙武ノ餘習翕然成風ナシ文學大ニ衰頽スルニ至ル君未タ弱冠ナラス恰モ癡藩置縣ノ政變ニ際

シ人皆商工ノ業ニ從事スルヤ却テ學事ハ忽スニ不可カラル疾呼シ有爲ハ少年ト相會シテ文學ヲ講シ俗流ニ脱出シテ超然夙ニ志望ハ異ナル者アリシト明治五年福島講習所ニ入りテ英學ヲ修メ堀江某ニ就キテ經史ヲ習フ學業特進更ニ大成ヲ期シ東上ノ志アリシト雖モ學資續カス却テ至親ノ煩慮ヲ想ヒ忍ンテ以テ自ラ昂ム翌年遠藤達ノ招ク所トナリ奮然笈ヲ負フテ上京ス當時隈川宗悅東京ニ在リ洋醫ヲ以テ其名大ニ顯ハル后遠藤氏ヲ媒シ君ヲ養フテ子トセント欲ス遂ニ入贅シテ名ヲ宗雄ト改メ壬申義塾ニ入りテ專ラ獨逸學ヲ脩ム是ヨリ先キ君郷里ニ在ルヤ切瑛琢磨試問屢々ニシテ成績拔群曾テ人後ニ落チス夙ニ師友ノ注目スル所トナレリ就中時ノ典事遠藤達其才學ヲ賞賛シテ已マス後任ニ東京ニ移ルニ及ンテ君ヲ召ス嗟君カ鵬程萬里ノ志依テ以テ展フルニ至リシモノ豈千載ノ一遇ト謂ハサル可ンヤ九年進ンテ東京大學ニ入り勉學數閱年十六年七月醫學部ヲ卒業シ醫學士ノ學位ヲ受ク直チニ大學醫學部助手ニ任セラレ眼科教授梅學士ヲ補助シテ傍ラ研究ニ從事セリ

明治十七年十月自費ヲ以テ獨逸ニ航シ全國伯林府大學ニ入り醫化學ヲエサルマ

スキニ學ヒ生理學ヲハ、ムングニ學ヒ病理學ヲウキルヒヨニ學ヒ內科學ヲケルハルト、イラデン、ゼナルト等ニ學ヒ特ニ醫化學ノ我邦ニ幼稚ナルヲ嘆シ研究功ヲ積ミ得ル所ヲ以テ解熱藥ノ作用及食物論ニ關スル二箇ノ業ヲウキルヒヨ一雜誌ニ騰録セリ之レ未タ學者ノ論及セサリシ所ニ係リ斯業ヲ益セシモノ少カラスト蓋シ學者ノ名譽トスル所聊カ以テ君カ學事ノ一斑ヲ窺フ可キナリ

明治二十二年十一月歸朝シ尋テ帝國大學ノ命ヲ受ケ病理學上ノ取調ヲ爲シ又脚氣病審査委員ヲ囑托セラル全年八月東京府知事蜂須賀侯ノ囑托ニ依リ當時駒込病院醫長トナリ當時虎斯拉病勢猖獗ニシテ院務ノ整理極メテ困難ナリシニモ拘ハラズ終始多數ノ患者ヲ療治シ盡カスル所少カラス二十四年四月醫科大學教授ニ任シ奏任官四等ニ叙セラル

君頗ル義氣ニ富ミ事勇敢ヲ尊ブ又能ク其親ニ仕ヘ其師ヲ敬シ禮讓欠クル所ナシ嗚呼醫ノ仁術ニ副フルニ懿德ノ重ンスヘキヲ以テス無垢ノ人ト云フ可キナリ

醫學博士青山胤通君

君ハ岐阜縣ノ人青山景通ノ第三子ナリ安政六年五月十五日ヲ以テ美濃國惠那郡苗木藩ニ生ル父壯ニシテ國學者平田篤胤ニ從ヒ國學ヲ脩メ神祇官ニ出仕シ官小祐ニ至ル君幼時慧悟能書ヲ以テ稱賛セラル父ノ師家平田延胤有爲ノ兒タルヲ知リ養テ子トセント欲ス君年十一歳ニシテ入贅ス平田姓ヲ冒スコト四歳故アリテ本姓ニ改ム是ヨリ先キ君郷ヲ辭シテ西京ニ遊ブ偶東都文學ノ勃興ヲ聞キ遊學ノ企志禁ス可カラス奮然笈ヲ負フテ上京ス當時英佛學最盛ニシテ學生多ク二學ニ従事ス君大ニ看破スル所アリシヲ以テ壬申義塾ニ入り獨逸學ヲ講習ス既ニシテ業大ニ進ミ明治七年十二月東京大學募集試験ニ應シ直チニ豫科第二級ニ入ル苦學勉旃意ヲ學事ニ損ニシ芝浦ノ月墨堤ノ花殆ト之レヲ知ラサルト八年間十五年三月東京大學ニ於テ醫學全科ヲ卒業シ醫學士ノ學位ヲ受ク

明治十五年五月東京大學御用掛ニ任シ醫學部病理學教場補助トナル十六年三月內科學專脩ノ爲メ外國留學ヲ命セラル乃之レニ航シ獨逸伯林大學ニ入りウイルヒヨ、ライデン、ブナイリヒ、ベルクマン等ニ就キ各其專問ヲ修ム就中ウイルヒヨノ蒸陶ヲ受クルコト最篤ク腫瘍細胞分裂ノ事ヲ研究シテ大ニ好成績ヲ得遂ニ之レ

醫學博士青山胤通君

ナ公ケニシテ學術社會ノ耳目ヲ聳動セリ實學四年歸途佛國巴理ニ在ルコト數月有名ノ大家シヤルコーニ質シ二十年八月ヲ以テ歸朝ス直チニ醫科大學教授ニ任シ奏任官四等ニ叙セララル二十年三月第一回醫術開業試驗委員ヲ命セラレ二十年正七位ニ叙セラレ尋テ奏任官三等ニ進ム

人ト爲リ剛壯ニシニ才幹アリ人ニ語テ日ク日本ノ博士ハ我レ日本ノ博士タルヲ知ル博士固ト之レ學者ノ爵位ナリ或ハ日本學者中ノ錚々タルモノナラント雖モ宇内廣シ豈ニ日本全州ヲ以テ論スルヲ得ン我レ之レヲ想フ毎ニ冷汗背ニ充ツト抱負大ナリト謂フ可シ君歸朝以來專ラ身ヲ後進ノ蒸陶ニ委子又第一醫院内科主任タリ而ノ究理實驗ニ係ル所醫學會雜誌醫事新誌新聞等ニ掲載シ醫道ヲ益スルモノ勲カラスト云フ

醫學博士河本重次郎君

君萬延元年八月十五日ヲ以テ但馬國城崎郡豐岡ニ生ル七才ニシテ母ヲ喪フ父ヲ齋助ト稱シ舊豐岡藩ノ小臣タリ齡六十一才今猶嬰鏗タリト云フ君幼時藩ノ稽古

堂ニ上リ儒家久保田精一ニ就キ漢書ヲ學フ年甫メテ十一才國ヲ辭シテ橫濱ニ來リ中江氏ニ依ル氏ハ學問該博夙ニ名聲アリ普佛戰爭ノ後ヲトシテ獨乙學ノ隆盛ヲ期シ大ニ君ヲ獎勵ス君蹶然起ツ所アリ乞フテ外國語學校ニ入ル全校ハ高島嘉衛門ノ創立ニシテ當時英佛獨ノ三語ヲ教授セリ君性穎敏最地理學ヲ好ミカルリツテルノ地學ナハチガルノ亞弗利加探見記レウインストンノ亞弗利加紀行等皆之レヲ讀マサルハナシ此校ニ學ブコト二年篤學群生ヲ凌駕シ年十六出テ、東京ニ來リ外國語學校ニ入ル自ラ矢テ曰ク予後來東洋ノ地理學者タルヘシトクンツヒン氏ニ就テ專ラ氣候學ヲ修ム雷雨ノ夜高キニ登リテ風力計ヲ窺ヒ或ハ混乾器ノ高下晴雨計ノ昇降ヲ計リ逐一細記シテ之レヲ師ニ送り銳意忍耐其研究ニ從事ス當時クニツピンノ本國獨乙ニ送リタル日本氣候表ハ其輔佐スル所最多キニ居レリト云フ明治九年東京醫學學校豫備門第二級ニ入ル既ニ獨乙語ニ習熟シ物理ノ熟考深思ヲ以テ自ラ勉メシカ故ニ學術衆ニ超ヘ本科ニ入ルニ當リ級ノ上席ハ常ニ其占有ニ歸ス十六年七月易々甲科ヲ以テ醫學會科試驗ニ登第シ醫學士ノ學位ヲ受ク全年八月外科ニ入リスクリツバ教師ノ助手トナル夫レ助手ハ自ラ手ヲ下

醫學博士河本重次郎君

シテ大手術ヲ施シ又ハ至難ノ施術ヲ案出シテ之レヲ應用スルカ如キ曾テ之レナ
 シト君夙ニ技術ト學理ヲ兼備セサル可カラサルヲ期シ機會ヲ得ルアレハ進ンテ
 之レヲ實行シ幾干ナラスシテ大ニ技術家ノ名聲ヲ博スルニ至レリ此時ニ當リ醫
 學部諸氏ト集談會ヲ設ケ學術ヲ講演ス即現今ノ東京醫學會ノ起原ニシテ君其初
 會ニ於テ勝靜派ノ結緊ト題シ演說セリ大ニ聽衆ノ喝采ヲ博シ此ヨリ辨說家ヲ以
 テ世上ニ知ラル當時梅錦之丞外科主顧ニシテ最名アリ官氏ヲ獨國乙ニ派遣セン
 トス氏亦之ヲ辭ス是ニ於テ君諸人ノ推ス所トナリ官費留學ヲ命セラル
 此時ニ當リ濱尾新三宅秀ノ二氏亦洋行ノ途ニ在リシヲ以テ匆々旅裝ヲ整ヘ明治
 十八年十二月同船橫濱ヲ發シ翌年正月馬塞港ニ着シ巴里ニ留ルコト數月ニシテ
 伯林ニ到リ先ツ病院ノ現況ヲ視察シウイルヒヨ氏ヲ訪ヒ此ヨリ獨乙南邦ノ一王
 國巴丁國フライブルク府大學校マンツ氏ヲ訪フ氏ハ眼ノ教育論并ニ其不具不全
 論ニ精通シ名聲眼科界ニ曠々タリ君專ラ氏ヲ師トシ毎日多クノ時間ハ眼科室ニ
 在リテ眼病患者ニ手ヲ下シ又クラウゼノ外科ヘガルノ婦人科有名ナル動物學ノ
 大家ワイスマゾンノ生物發育學ヲ傍聽シ一年余ニシテウユルツブルク府大學ニ

轉シ眼科博士ミヘルニ就キ實地ヲ研修スミヘルハ頗ル眼科ノ原理ニ通シ大家ノ
 名アリ而シテ君ノ眼科病理學ハ眞ニ氏ノ論說ニ胚胎シ又ロイベルノ内科リンド
 フライシユノ病理解剖ヲ見聞シタルハ後日君ノ眼科病理學ニ大ナル根蒂ヲ與ヘ
 タリト云フ

是ヨリ先キ君ウユルスブルク大學ニ在リテベルギー和蘭英國等ニ漫遊シウトレ
 一ト府ニドンドルスヲ訪ヒ其光拆異常論ヲ叩キ倫敦ニ在リテ神聖トーマス病院
 ニ出入シ眼科長ノトルシブノ臨床ヲ實驗シテ其風土人情ヲ知リシノミナラス英
 國流眼科ノ程度進歩ノ狀況ヲ知悉シ後伯林ニ轉ス時ニ眼科ノ手術ニシユワイケ
 ル檢眼術ニヒルシユルベク實驗ニシヨレル等アリテ共ニ其名アリ君常ニ三氏ニ
 親灸シテ診斷ト技術ヲ咀嚼參考シ又ツペンハイムノ神經病學ウキルヒヨノ病
 理學講筵ニ列シテ學理ヲ講究シ進ンテ噠馬瑞典ノ北邦ニ飛遊シコッペーゲン府
 大學ノハンセツグールトノ優待ヲ受ケ竟ニ伯林ヲ去テ奧國ウインナ府ニ轉學シ
 マツキスヲ師トス氏ハ實際家ニシテ許多ノ實驗ニ基キテ立論シ皆實用ヲ主トス
 君大ニ之レヲ慕ヒ常ニ曰ク氏ノ如クニシテ初メテ眼科ノ師タルヲ得ベシト更ニ